京都府遺跡調査報告集

第142冊

1．鳥取橋遺跡第１次
2．平安京跡左京四条一坊六・十一町、壬生大路
3．長岡京跡右京第995次（7ANKSM-16地区）・開田遺跡
　・開田古墳群
4．長岡京跡右京第996次（7ANGHK-3地区）・上里遺跡
5．京都第二外環状道路関係遺跡
　長岡京跡右京第973次（7ANOSJ-5・OOR-9地区）・下海印寺遺跡、
　西代遺跡、奥海印寺遺跡、下海印寺遺跡
6．女谷・荒坂横穴群第11・12次

２０１１

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

（1）女谷D支群遠景（北東から）

（2）女谷D支群全景（南東から）

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年４月に設立され、本年度で創立30年を迎えました。この間、当調査研究センターでは京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成21年度に国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した京都第二外環状道路関係遺跡、平成21・22年度に京都府警察本部の依頼を受けて実施した平安京跡左京四条一坊六・十一町・壬生大路、西日本高速道路株式会社（ＮＥＸＣＯ西日本）の依頼を受けて実施した女谷・荒坂横穴群、平成22年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した鳥取橋遺跡、長岡京跡右京第995次・開田遺跡・開田古墳群、長岡京跡右京第996次・上里遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された国土交通省近畿地方整備局と西日本高速道路株式会社（ＮＥＸＣＯ西日本）、京都府警察本部、京都府建設交通部をはじめ、京都府教育委員会・京丹後市教育委員会・京都市教育委員会・（財）京都市埋蔵文化財研究所・長岡京市教育委員会・（財）長岡京市埋蔵文化財センター・八幡市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成23年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理　事　長　　上　田　正　昭

例　　言

1．本書に収めた報告は下記のとおりである。

鳥取橋遺跡第１次

平安京跡左京四条一坊六・十一町、壬生大路

長岡京跡右京第995次(7ANKSM-16地区)・開田遺跡・開田古墳群

長岡京跡右京第996次(7ANGHK-3地区)・上里遺跡

京都第二外環状道路関係遺跡平成21年度　長岡京跡右京第973次(7ANOSJ-5・OOR-9地区)

・下海印寺遺跡、西代遺跡、奥海印寺遺跡、下海印寺遺跡

女谷・荒坂横穴群第11・12次

2．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．	鳥取橋遺跡第１次	京丹後市弥栄町和田野車田、井辺森山ほか	平成22年５月12日～７月６日	京都府建設交通部	筒井崇史
2．	平安京跡左京四条一坊六町・十一町・壬生大路	京都市中京区壬生坊城町48番地16	平成21年11月30日～12月８日、平成22年４月19日～６月24日	京都府警察本部	増田孝彦・伊野近富
3．	長岡京跡右京第995次・開田遺跡・開田古墳群	長岡京市開田２丁目	平成22年４月26日～６月２日	京都府建設交通部	村田和弘
4．	長岡京跡右京第996次・上里遺跡	長岡京市井ノ内上印田地内	平成22年４月26日～６月５日	京都府建設交通部	高野陽子
5．	京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第973次・下海印寺遺跡、西代遺跡、奥海印寺遺跡、下海印寺遺跡	長岡京市下海印寺尾流地内・方丸地内、奥海印寺西代地内・新郷地内・駿河田地内	平成21年６月２日～10月23日	国土交通省近畿地方整備局	中川和哉・増田孝彦・黒坪一樹・戸原和人・竹井治雄・木村啓章
6．	女谷・荒坂横穴群第11・12次	八幡市美濃山荒坂65－2	平成21年７月９日～平成22年２月25日、平成22年５月13日～６月11日	西日本高速道路株式会社(ＮＥＸＣＯ西日本)	引原茂治・松尾史子・松元章徳

3．本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第６座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4．本書の編集は、調査第２課調査担当者の編集原案をもとに、調査第１課資料係が行った。

5．現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第１課資料係主任調査員田中彰が行った。

本 文 目 次

1．鳥取橋遺跡第１次発掘調査報告 1
2．平成21・22年度平安京跡左京四条一坊六・十一町、壬生大路発掘調査報告 11
3．長岡京跡右京第995次(7ANKSM-16地区)・開田遺跡・開田古墳群発掘調査報告 31
4．長岡京跡右京第996次(7ANGHK-3地区)・上里遺跡発掘調査報告 39
5．京都第二外環状道路関係遺跡平成21年度発掘調査報告 51
6．女谷・荒坂横穴群第11・12次発掘調査報告 81

挿 図 目 次

1．鳥取橋遺跡第１次

第１図　調査地位置図および周辺主要遺跡分布図 1
第２図　調査トレンチ配置図 2
第３図　各調査トレンチ平面図・土層断面図(１) 3
第４図　各調査トレンチ平面図・土層断面図(２) 5
第５図　各調査トレンチ平面図・土層断面図(３) 6
第６図　出土遺物実測図(１) 8
第７図　出土遺物実測図(２) 9

2．平安京跡左京四条一坊六・十一町、壬生大路

第１図　調査地位置図 11
第２図　トレンチ配置図 12
第３図　１トレンチ北西・北東壁土層実測図 13
第４図　２～４トレンチ遺構平面図、２トレンチ北西・北東壁土層実測図 14
第５図　４トレンチ北西壁土層実測図 15
第６図　１トレンチ遺構平面図 16
第７図　井戸跡ＳＥ42・147実測図、ＳＥ42井戸枠実測図 18
第８図　３トレンチ遺構平面図、３トレンチ北西・北東壁土層実測図 19
第９図　井戸跡ＳＥ63・65実測図 20
第10図　出土遺物実測図(１) 21
第11図　出土遺物実測図(２) 22
第12図　出土遺物実測図(３) 23

第13図　出土遺物実測図（４）……24
第14図　出土遺物実測図（５）……25
第15図　出土遺物実測図（６）……26
第16図　出土遺物実測図（７）……27
第17図　出土遺物実測図（８）……28
第18図　出土遺物実測図（９）……29

３．長岡京跡右京第995次・開田遺跡・開田古墳群

第１図　調査地周辺主要遺跡分布図……31
第２図　調査トレンチと近隣調査地配置図……32
第３図　１トレンチ遺構平面図……33
第４図　溝ＳＤ101遺物出土状況図……34
第５図　２トレンチ遺構平面図……34
第６図　トレンチ土層断面図……35
第７図　３トレンチ遺構平面図……36
第８図　出土遺物実測図……37

４．長岡京跡右京第996次・上里遺跡

第１図　調査地周辺主要遺跡分布図……39
第２図　調査地周辺調査トレンチ配置図……40
第３図　調査地土層断面図……41
第４図　調査地周辺主要遺構分布図……43
第５図　調査地検出遺構配置図……44
第６図　溝ＳＤ１・２・３・10土層実測図、土坑ＳＫ７・溝ＳＤ３内護岸施設実測図……45
第７図　出土遺物実測図（１）……47
第８図　出土遺物実測図（２）……48
第９図　周辺調査地主要遺構分布図……49

５．京都第二外環状道路関係遺跡

第１図　調査地位置図……51
第２図　西代地区トレンチ配置図……53
第３図　西代地区１～３トレンチ土層断面図……54
第４図　西代地区４～９トレンチ土層断面図……55
第５図　西代地区７・８トレンチ平面図……56
第６図　新郷地区トレンチ配置図……57

第７図　新郷地区トレンチ土層断面図……57
第８図　新郷地区トレンチ平面図……58
第９図　駿河田地区トレンチ配置図……58
第10図　駿河田地区トレンチ平面図……59
第11図　駿河田地区トレンチ土層断面図……59
第12図　尾流・方丸地区調査トレンチ配置図……60
第13図　尾流地区トレンチ北壁土層断面図……61
第14図　尾流地区上層遺構平面図……62
第15図　尾流地区竪穴式住居跡ＳＨ05実測図及び遺物出土状況図……63
第16図　尾流地区竪穴式住居跡ＳＨ140・掘立柱建物跡ＳＢ184実測図……63
第17図　尾流地区溝ＳＤ120・ＳＤ130実測図及びＳＤ130遺物出土状況図……64
第18図　尾流地区土坑ＳＫ14実測図……64
第19図　尾流地区下層遺構平面図……65
第20図　尾流地区土坑ＳＫ193・194実測図……66
第21図　尾流地区出土遺物実測図（１）……67
第22図　尾流地区出土遺物実測図（２）……68
第23図　尾流地区出土遺物実測図（３）……68
第24図　尾流地区出土遺物実測図（４）……70
第25図　尾流地区出土遺物実測図（５）……71
第26図　尾流地区出土遺物実測図（６）……72
第27図　尾流地区出土遺物実測図（７）……73
第28図　方丸地区トレンチ配置図……75
第29図　方丸地区Ｂ・Ｃトレンチ平面図、Ｂトレンチ東・南壁土層断面図……76
第30図　方丸地区Ｃトレンチ東壁・土坑ＳＫ02土層断面図……77
第31図　方丸地区出土遺物実測図……78

６．女谷・荒坂横穴群第11・12次

第１図　調査地及び周辺遺跡分布図……81
第２図　女谷・荒坂横穴群支群配置図……83
第３図　女谷・荒坂横穴群第11・12次調査遺構配置図……84
第４図　１号横穴実測図……86
第５図　１号横穴立面図及び遺物出土状況図……87
第６図　１号横穴出土遺物実測図……88
第７図　２号横穴実測図……89
第８図　２号横穴遺物出土状況図……90

第９図　２号横穴出土遺物実測図……91
第10図　３号横穴実測図……92
第11図　３号横穴立面図及び土層実測図……93
第12図　３号横穴遺物出土状況図……94
第13図　３号横穴出土遺物実測図（１）……95
第14図　３号横穴出土遺物実測図（２）……96
第15図　４号横穴立面図及び土層実測図……97
第16図　４号横穴実測図……98
第17図　４号横穴遺物出土状況図（１）……99
第18図　４号横穴遺物出土状況図（２）……100
第19図　４号横穴出土遺物実測図（１）……101
第20図　４号横穴出土遺物実測図（２）……102
第21図　５号横穴実測図……104
第22図　５号横穴立面図及び土層実測図……105
第23図　５号横穴遺物出土状況図……105
第24図　５号横穴出土遺物実測図……106
第25図　６号横穴実測図……107
第26図　６号横穴遺物出土状況図……108
第27図　６号横穴出土遺物実測図……109
第28図　７号横穴実測図……110
第29図　７号横穴遺物出土状況図……111
第30図　７号横穴出土遺物実測図……111
第31図　８号横穴実測図……112
第32図　８号横穴立面図及び土層実測図……113
第33図　８号横穴遺物出土状況図……114
第34図　８号横穴出土遺物実測図……115
第35図　第12次調査谷中央部断面図……117
第36図　第12次調査出土遺物実測図……117
第37図　女谷Ｄ支群（第11・12次調査）と谷内通路……119

付 表 目 次

５．京都第二外環状道路関係遺跡

付表　調査地一覧……52

6．女谷・荒坂横穴群第11・12次
付表　女谷D支群横穴一覧 ----------118

図 版 目 次

1．鳥取橋遺跡第１次
図版第１　(1)調査前全景(南西から)
(2)調査地全景(北東から)
(3)調査地全景(南西から)
図版第２　(1)１トレンチ全景(南西から)
(2)１トレンチ土層断面(北西から)
(3)８トレンチ全景(北東から)
図版第３　(1)８トレンチ土層断面(北西から)
(2)２トレンチ全景(南西から)
(3)２トレンチ土層断面(北西から)
図版第４　(1)９トレンチ全景(南西から)
(2)９トレンチ土層断面(北西から)
(3)３トレンチ作業風景(北東から)
図版第５　(1)３トレンチ全景(南西から)
(2)３トレンチ土層断面(北西から)
(3)10トレンチ全景(南西から)
図版第６　(1)10トレンチ土層断面(北西から)
(2)４トレンチ全景(南西から)
(3)４トレンチ土層断面(北西から)
図版第７　(1)５トレンチ作業風景(南から)
(2)５トレンチ全景(北から)
(3)５トレンチ土層断面(北西から)
図版第８　(1)６トレンチ上層全景(南西から)
(2)６トレンチ全景(南西から)
(3)６トレンチ土層断面(北西から)
図版第９　(1)７トレンチ重機掘削(北から)
(2)７トレンチ作業風景(北東から)
(3)７トレンチ土層断面(南東から)
図版第10　(1)出土遺物１

(2)出土遺物２

２．平安京跡左京四条一坊六・十一町、壬生大路

図版第１　(1)調査前全景(南東から)
(2)平成21年度１トレンチ市電軌道検出状況(南から)
(3)１トレンチ全景(南西から)
図版第２　(1)平成21年度１トレンチ全景(北東から)
(2)１トレンチ北東壁断面(南西から)
(3)１トレンチ北西壁断面部分(南東から)
図版第３　(1)１トレンチ柱穴ＳＰ52遺物出土状況(北西から)
(2)１トレンチ井戸跡ＳＥ42検出状況(南東から)
(3)２トレンチ全景(北東から)
図版第４　(1)１トレンチ全景(南西から)
(2)１トレンチ全景(南から)
図版第５　(1)１トレンチ井戸跡ＳＥ42井戸枠検出状況(南から)
(2)１トレンチ井戸跡ＳＥ42完掘状況(東から)
(3)１トレンチ井戸跡ＳＥ147完掘状況(南西から)
図版第６　(1)３トレンチ全景(南東から)
(2)４トレンチ全景(北西から)
図版第７　(1)３トレンチ溝ＳＤ140断面(北西から)
(2)４トレンチ北西壁断面(東から)
(3)４トレンチ井戸跡ＳＥ63(南東から)
図版第８　出土遺物１
図版第９　出土遺物２
図版第10　出土遺物３

３．長岡京跡右京第995次・開田遺跡・開田古墳群

図版第１　(1)１トレンチ遺構検出作業風景(南東から)
(2)１トレンチ完掘状況(北から)
(3)１トレンチ溝ＳＤ101完掘状況(北から)
図版第２　(1)１トレンチ溝ＳＤ101遺物出土状況(北から)
(2)１トレンチ溝ＳＤ107検出状況(北西から)
(3)１トレンチ遺構掘削作業風景(北西から)
図版第３　(1)１トレンチ溝ＳＤ107検出状況(西から)
(2)１トレンチ溝ＳＤ107完掘状況(西から)

(3) 1トレンチ溝ＳＤ107土層断面(西から)
図版第４　(1) 1トレンチ溝ＳＤ107遺物検出状況(東から)
(2) 2トレンチ遺構検出状況(南から)
(3) 2トレンチ遺構完掘状況(南から)
図版第５　(1) 3トレンチ遺構検出状況(東から)
(2) 3トレンチ遺構完掘状況(東から)
(3)調査地近景(北から)
図版第６　出土遺物

４．長岡京跡右京第996次・上里遺跡

図版第１　(1)調査地全景(南から)
(2)調査区南部全景＜上層＞(北から)
(3)調査区中央遺構検出状況＜上層＞(東から)
図版第２　(1)砂礫集積ＳＸ５検出状況＜整地面＞(北から)
(2)砂礫集積ＳＸ５瓦出土状況(上が南)
(3)落ち込みＳＸ４検出状況(北東から)
図版第３　(1)土坑ＳＫ６検出状況(南東から)
(2)土坑ＳＫ７検出状況(南から)
(3)溝ＳＤ１検出状況(東から)
図版第４　(1)調査区南部遺構検出状況＜上層＞(南から)
(2)溝ＳＤ３検出状況(東から)
(3)溝ＳＤ３土層断面(東から)
図版第５　(1)調査区全景＜上層＞(北から)
(2)調査区全景＜上層＞(南から)
図版第６　(1)溝ＳＤ３全景(東から)
(2)溝ＳＤ３・木組遺構ＳＸ14検出状況＜上層＞(南東から)
図版第７　(1)木組遺構ＳＸ14検出状況(南東から)
(2)木組遺構ＳＸ14検出状況(南から)
(3)木組遺構ＳＸ14・南壁土層断面(南東から)
図版第８　(1)調査区西壁中央土層断面＜上層＞(西から)
(2)調査区西壁南部土層断面＜断ち割り部は下層＞(西から)
(3)調査区西壁北部土層断面(西から)
図版第９　(1)下層遺構検出状況(北から)
(2)流路ＳＤ10全景(東から)
(3)流路ＳＤ10土層断面＜西壁＞(東から)

図版第10　出土遺物

5．京都第二外環状道路関係遺跡

図版第１　(1)西代地区１トレンチ(北東から)
(2)西代地区２トレンチ(東から)
(3)西代地区３トレンチ(東から)
図版第２　(1)西代地区４トレンチ(東から)
(2)西代地区５トレンチ(東から)
(3)西代地区６トレンチ(東から)
図版第３　(1)西代地区７トレンチ(南から)
(2)西代地区８トレンチ(東から)
(3)西代地区９トレンチ(北東から)
図版第４　(1)新郷地区全景(西から)
(2)新郷地区トレンチ(北西から)
(3)駿河田地区トレンチ(東から)
図版第５　(1)尾流地区調査前の状況(北西から)
(2)尾流地区上層遺構全景(北東から)
(3)尾流地区竪穴式住居跡ＳＨ05(北東から)
図版第６　(1)尾流地区竪穴式住居跡ＳＨ140(北東から)
(2)尾流地区掘立柱建物跡ＳＢ184(南西から)
(3)尾流地区土坑ＳＫ14(南から)
図版第７　(1)尾流地区溝ＳＤ130全景(南東から)
(2)尾流地区溝ＳＤ130遺物出土状況(南から)
(3)尾流地区下層遺構全景(北東から)
図版第８　(1)尾流地区下層遺構全景東側部分(南東から)
(2)尾流地区下層遺構全景西側部分(南東から)
(3)尾流地区土坑ＳＫ193遺物出土状況(北西から)
図版第９　(1)尾流地区土坑ＳＫ193完掘状況(東から)
(2)尾流地区土坑ＳＫ194遺物出土状況(北西から)
(3)尾流地区土坑ＳＫ194完掘状況(東から)
図版第10　(1)方丸地区調査前全景(南東から)
(2)方丸地区Ａトレンチ全景(南東から)
(3)方丸地区Ａトレンチ溝ＳＤ01遺物出土状況(北から)
図版第11　(1)方丸地区Ａトレンチ土坑ＳＫ04遺物出土状況(北西から)
(2)方丸地区Ａトレンチ土坑ＳＫ04完掘状況(北西から)

(3)方丸地区Bトレンチ全景(北西から)
図版第12　(1)方丸地区Bトレンチ S D01断面(北西から)
(2)方丸地区Cトレンチ全景(西から)
(3)方丸地区Cトレンチ S K02全景(南から)
図版第13　出土遺物1
図版第14　出土遺物2
図版第15　出土遺物3
図版第16　出土遺物4

6．女谷・荒坂横穴群第11・12次

図版第1　(1)女谷D支群全景(南東から)
(2)女谷D支群全景(空撮：上が北西)
図版第2　(1)女谷D支群全景(東から)
(2)女谷D支群全景(南から)
図版第3　(1)女谷D支群遠景(北東から)
(2)女谷D支群遠景(南西から)
図版第4　(1)5～7号横穴検出状況(東から)
(2)5～7号横穴検出状況(南東から)
図版第5　(1)1号横穴遺物出土状況(南東から)
(2)1号横穴遺物出土状況側面(南東から)
(3)2号横穴遺物出土状況(南東から)
図版第6　(1)3号横穴玄室断面(北東から)
(2)3号横穴玄室奥壁付近遺物出土状況(南東から)
(3)3号横穴玄室中央部遺物出土状況(南東から)
図版第7　(1)3号横穴玄室全景(南東から)
(2)4号横穴玄室全景(南東から)
図版第8　(1)4号横穴再利用面鏡出土状況(南から)
(2)4号横穴再利用面と玄室床面(南東から)
図版第9　(1)4号横穴再利用面と玄室床面(南から)
(2)4号横穴再利用面と玄室床面(北西から)
(3)4号横穴瓦出土状況(北東から)
図版第10　(1)5号横穴玄室追葬面(南東から)
(2)5号横穴玄室初葬面(南東から)
図版第11　(1)5号横穴玄室遺物出土状況(北東から)
(2)5号横穴玄室遺物出土状況(南東から)

(3) 5号横穴墓道遺物出土状況(北東から)
図版第12　(1) 6号横穴玄室断面(東から)
(2) 6号横穴玄室遺物出土状況(東から)
(3) 6号横穴埋土断面(北西から)
図版第13　(1) 6号横穴玄室全景(南東から)
(2) 7号横穴玄室全景(南東から)
図版第14　(1) 7号横穴玄室断面(北東から)
(2) 8号横穴再利用面遺物出土状況(南から)
(3) 8号横穴墓道遺物出土状況(南西から)
図版第15　(1) 8号横穴玄室追葬面(南東から)
(2) 8号横穴玄室初葬面(南東から)
図版第16　(1) 8号横穴初葬面全景(東から)
(2)土坑ＳＫ９(南東から)
(3)谷底部瓦出土状況(北西から)
図版第17　(1) 1号横穴全景(南東から)
(2) 2号横穴全景(南東から)
(3) 3号横穴全景(南東から)
(4) 4号横穴全景(南東から)
図版第18　(1) 5号横穴全景(南東から)
(2) 6号横穴全景(南東から)
(3) 7号横穴全景(南東から)
(4) 8号横穴全景(南東から)
図版第19　(1)第12次調査全景(表土掘削後：南西から)
(2)第12次調査全景(完掘後：南西から)
図版第20　(1)谷の中央部(奥が谷の入り口：南西から)
(2)谷の断面(北東から)
図版第21　出土遺物１(１号横穴：土器)
図版第22　出土遺物２(１・２号横穴：土器)
図版第23　出土遺物３(３号横穴：土器)
図版第24　出土遺物４(３号横穴：土器)
図版第25　出土遺物５(４号横穴：土器)
図版第26　出土遺物６(４号横穴：土器)
図版第27　出土遺物７(５号横穴：土器)
図版第28　出土遺物８(５～７号横穴：土器)
図版第29　出土遺物９(８号横穴：土器・石製品)

図版第30　出土遺物10(８号横穴：土器)
図版第31　出土遺物11(瓦・耳環)
図版第32　出土遺物12(鏡・鉄製品)

1.鳥取橋遺跡第１次発掘調査報告

１．はじめに

今回の発掘調査は、一般国道482号道路新設改良事業（丹後弥栄道路）に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

鳥取橋遺跡の周辺は、竹野川とそこに合流する鳥取川や奈具川によって形成された沖積低地が広がっており、現在、水田が営まれている。この沖積低地は東西１～1.5kmほどの広さがあるが、北側と南側の旧町界付近ではやや狭くなる。鳥取橋遺跡はこの幅が広くなった沖積低地のほぼ中央部に位置する。1961年、堤防の基部あたりで縄文時代晩期ないし弥生時代前期と推定されるほぼ完形の小型壺１点が表採されたことから、散布地として認知された。[注2] また、地元の方のお話しによると、河川敷でも多くの土器を表採できるという。今回は、竹野川左岸の水田上に上記道路が計画されたことから調査に至ったもので、鳥取橋遺跡としてははじめての調査となる。

調査期間中は、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会、京丹後市弥栄市民局をはじめとする関係諸機関、また弥栄町和田野・木橋・鳥取・井辺の各地元自治会からご教示・ご協力をいただいた。また、発掘調査および整理作業には多くの調査補助員・整理員・作業員の方々に参加いただいた。本報告は筒井が執筆した。

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸

調 査 担 当 者　調査第２課主幹調査第３係長事務取扱　石井清司

同　調査員　筒井崇史

調 査 場 所　京丹後市弥栄町和田野車田、井辺森山ほか

現地調査期間　平成22年５月12日～７月６日

調 査 面 積　850㎡

２．調査経過

鳥取橋遺跡周辺ではこれまで調査が行われたことがなく、遺跡の実態が知られていないため、まず、調査対象地内に７か所のトレンチを設置して、遺構・遺物の広がり等を確認することとした。

１～７トレンチは、それぞれ長さ15m、

第１図　調査地位置図および周辺主要遺跡分布図
（国土地理院　1/50,000　網野・宮津）

幅８ｍである。各トレンチからは、後述するように、遺物の出土はみたものの、顕著な遺構を検出することはできなかったが、比較的遺物が多く出土したトレンチを拡張して遺構の検出に努めた。さらに、１～４トレンチの間の空間が広いため、各トレンチの間に、新たに長さ10ｍ、幅５ｍのトレンチを３か所に設定して調査を実施した（８～10トレンチ）。以上の結果、最終的な調査面積は850㎡となった（第２図）。

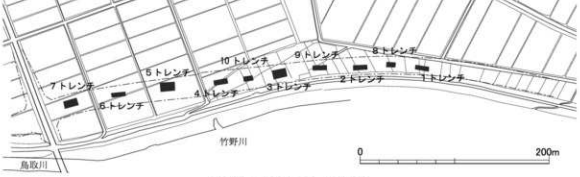
調査は平成22年５月12日から重機によるトレンチの掘削を開始した。調査にかかる作業はおおむね６月末までに終え、７月６日まで図面作成などの記録作業を行い、同日すべての機材を撤収し、調査を終了した。なお、調査期間中の６月25日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

３．検出遺構（第２～５図）

１トレンチ　調査対象地内の最も北に位置する。表土下約２ｍまで掘削したが、遺構面や遺物の出土は確認できなかった。そこで、トレンチの北端部で断ち割りを行ったが、断ち割り内でも遺構面は確認されなかった。トレンチ内の土層は、表土からおよそ1.2ｍまでは現在およびそれ以前の耕作土の堆積層（１～７層）、その直下に洪水砂の可能性がある茶黄色細砂層（８層）が認められた（第３図）。その下層には湿地状を呈する堆積層（11～13層）が認められ、その下層（標高10.2ｍより下）には河川堆積と思われる砂層や粗砂層、小礫層が認められた（14～16層）。河川堆積層から弥生土器や白磁などが出土した（第６図１～４）。

８トレンチ　１トレンチの南20ｍに位置する。表土下約1.7ｍまで掘削したが、遺構面などは確認できなかった。そこで、トレンチの北端部で断ち割りを行ったが、下層でも顕著な遺構面は確認できなかった。

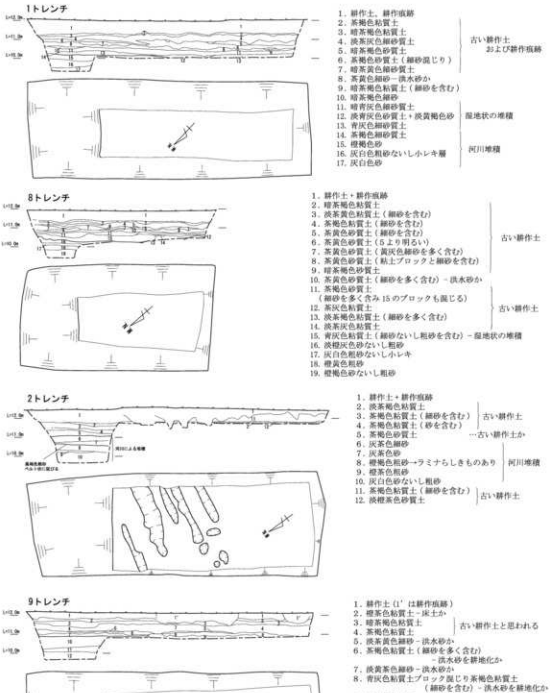
トレンチ内の堆積土層は、表土からおよそ1.3ｍまでは、現在およびそれ以前の耕作土の堆積層（１～14層）である（第３図）。このうち10層は細砂を多く含み、洪水砂の可能性がある。耕作土堆積層の下層には湿地状を呈する堆積層（15層）が認められる。その下層（標高10.3ｍより下）には



第２図　調査トレンチ配置図

河川堆積と思われる砂層や粗砂層、小礫層が認められた(16～19層)。河川堆積層から土師器や瓦質土器などが出土した(第６図５・６)。

２トレンチ　８トレンチの南20mに位置する。表土下約0.9mで、やや安定した地層（２層）を確認した。この上面で遺構検出をした結果、近･現代以降の耕作に伴う溝群を検出した(第３図)。



第３図　各調査トレンチ平面図・土層断面図(１)

また、トレンチの北端部で断ち割りを行ったが、この下層では遺構面を確認できなかった。

トレンチの堆積土層は、表土からおよそ1.3mまでは、現在およびそれ以前の耕作土の堆積層（1～5・11・12層）である。その下層（標高11.0mより下）には河川堆積と判断される細砂層や粗砂層が認められた（6～10層）。8層にはラミナ状の堆積痕跡がみられた。河川堆積層から弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器などが出土した（第6図7～11）。

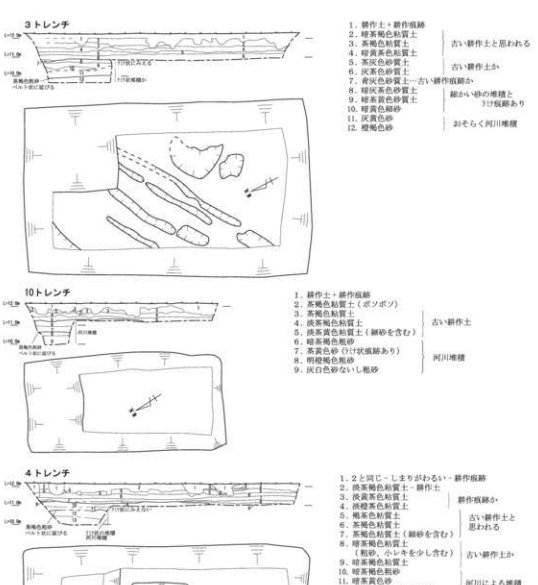
9トレンチ　2トレンチの南27mに位置する。表土下約1.4mまで掘削したが、遺構面は確認できなかった。そこで、トレンチの北端部で断ち割りを行ったが、顕著な遺構面は確認できなかった。トレンチ内の土層は、表土からおよそ1.2mまでは現在およびそれ以前の耕作土の堆積層（1～9層）で、洪水砂と思われる細砂を含む層が認められた（第3図）。それらの下層（標高10.9mより下）には河川堆積と思われる砂層や粗砂層が認められ（10～12層）、いずれもラミナ状の堆積痕跡がみられた。河川堆積層から土師器などが出土した（第6図12～14）。

3トレンチ　9トレンチの南27mに位置する。表土下約1.5mまで掘削したところ、2トレンチと同様、やや安定した地層（6層）を確認した（第4図）。そこでトレンチの幅を10mまで拡張し、この上面で遺構の検出に努めた結果、調査地周辺が耕地化した後の、耕作に伴う溝や小規模な落ち込みなどを検出した。時期はおおむね近世と推定される。また、トレンチの北端部で断ち割りを行い、土層の観察を行った。表土からおよそ1.4mまでは、現在およびそれ以前の耕作土の堆積層（1～7層）である。それらの下層（標高10.9mより下）には河川堆積と思われる砂質土層や砂層が認められた（8～12層）。河川堆積層から土師器・須恵器・青磁・白磁などが出土した。（第6図15～18）

10トレンチ　3トレンチの南20mに位置する。表土下約1.0mまで掘削したが遺構面等は確認できなかった。その後、トレンチの北端部で断ち割りを行ったものの、顕著な遺構は確認できなかった。トレンチ内の土層は、表土からおよそ1.0mまでは、現在およびそれ以前の耕作土の堆積層（1～5層）である（第4図）。その下層（標高11.2mより下）には河川堆積と思われる砂層や粗砂層が認められた（6～9層）。河川堆積層から弥生土器片などが出土した（第6図19）。

4トレンチ　10トレンチの南16mに位置する。表土下約1.3mまで掘削したが、遺構面等は確認できなかった。その後、トレンチの北端部で断ち割りを行ったが、下層でも顕著な遺構面は確認されなかった。トレンチ内の土層は、表土からおよそ1.2mまでは現在およびそれ以前の耕作土の堆積層（1～9層）である（第4図）。その下層（標高11.2mより下）には河川堆積と思われる砂層や粗砂層が認められた（10～13層）。河川堆積層から遺物はほとんど出土しなかった。

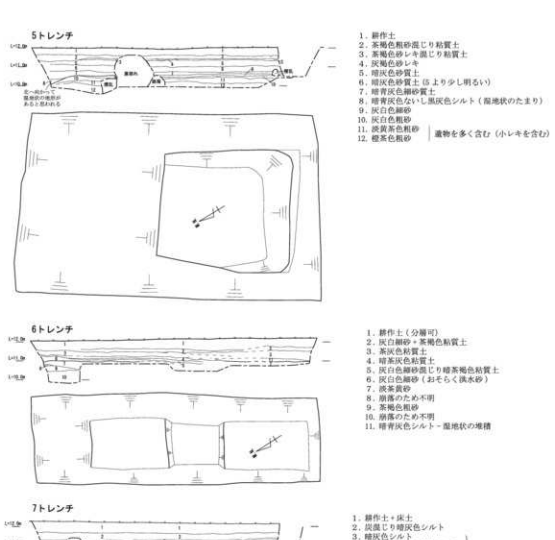
5トレンチ　4トレンチの南41mに位置する。表土下約1.6mまで掘削したが遺構面等は確認できなかった。その後、トレンチの北端部で断ち割りを行った。その際、10層ないし11層より弥生時代の遺物の出土が確認されたため、調査区の幅を10mまで拡張して、人力による掘削に切り替えた。その結果、遺物は河川堆積層と思われる砂層や粗砂層（9～12層）から出土していることが判明した。5トレンチでは人力によってこの河川堆積層の掘削を行い、最終的な深さは表土下2.2mまで達したものの、顕著な遺構は確認されず、遺構面を確認することもできなかった。



第４図　各調査トレンチ平面図・土層断面図（２）

トレンチ内の堆積層は、表土から1.5mまでは現在およびそれ以前の耕作土の堆積層（1～７層）である（第５図）。その下層（標高10.5mより下）には河川堆積と思われる細砂層や粗砂層が認められた（９～12層）。また、調査区の北端で湿地状の堆積層と思われる暗青灰色ないし黒灰色シルト層（８層）を確認した。河川堆積層からは、弥生土器・土師器・須恵器・白磁・青磁などが出土した（第６図20～第７図38）。

６トレンチ　５トレンチの南37mに位置する。表土下約0.5mで、やや安定した地層（３層）を確認した（第５図）。この上面で遺構検出に努めた結果、近・現代以降の耕作に伴う溝群を検出した。さらに表土下約1.5mまで掘削したが、遺構面は確認できなかった。その後、トレンチの北端部で断ち割りを行った。この断ち割り内でも顕著な遺構面は確認されなかった。



第５図　各調査トレンチ平面図・土層断面図（３）

トレンチの堆積土層は、表土からおよそ1.0mまでは現在およびそれ以前の耕作土の堆積層（１～５層）である。その下層は、トレンチの北半部では洪水砂と思われる灰白色細砂（６層）が、南半部では湿地状の堆積と思われる暗青灰色シルト層（11層）が認められた。これらの下層（標高11.0mより下）には河川堆積と思われる砂層や粗砂層などが認められた（７～10層）。河川堆積層から弥生土器や土師器などが出土した（第７図39・40）。

７トレンチ　６トレンチの南36mに位置する。表土下約1.6mまで掘削すると、８層ないし10

層から遺物が出土したため、トレンチの幅を８ｍまで拡張して遺構の検出に努めた。結果的に遺構は確認できず、遺物は河川堆積層と判断される砂層や粗砂層（８～14層）から出土した（第５図）。５トレンチと同様、人力によって河川堆積層の掘削を行い、深さは表土下2.2ｍまで達した（標高10.0ｍ）。最終的にトレンチの北端寄りで断ち割りを行い、下層の堆積土層を確認したが、土層の観察では顕著な遺構面を確認できなかった。

トレンチ内の土層は、表土からおよそ１ｍまでは、現在およびそれ以前の耕作土の堆積層（１・２層）である。その下層は0.5～0.7ｍほどの厚さの暗灰色や黒灰色のシルトや粗砂が認められた（３～７層）。湿地状の堆積層と思われる。さらにその下層に河川堆積と思われる砂層や細砂層が認められた（８～14層）。これらのうち標高10.0～10.7ｍに見られる10～14層はやや締まった細砂層で、近接して安定した地層が存在した可能性が高い。このことは、10～14層を中心に多数の弥生土器が出土したことからも裏付けられ（第７図41～59）、近くに弥生時代の遺構が存在した可能性が高い。このほかに砥石なども出土した（第７図60）。

４．出土遺物（第６・７図）

今回の調査で出土した遺物は整理箱で３箱である。以下、トレンチ毎に出土遺物を述べる。

１トレンチ（１～４）　１～３は弥生時代前期の土器である。１は壺の体部片で、肩部に２条の沈線が確認できる。２は甕の口縁部から体部にかけての破片で、沈線を５条施し、２条目と３条目の沈線の間に竹管文を密に施す。３は壺の底部と思われ、外面にミガキを施す。４は白磁の小椀の口縁である。中世のものである。

８トレンチ（５・６）　５は土師器の小皿、６は瓦質土器の羽釜である。中世のものであろう。

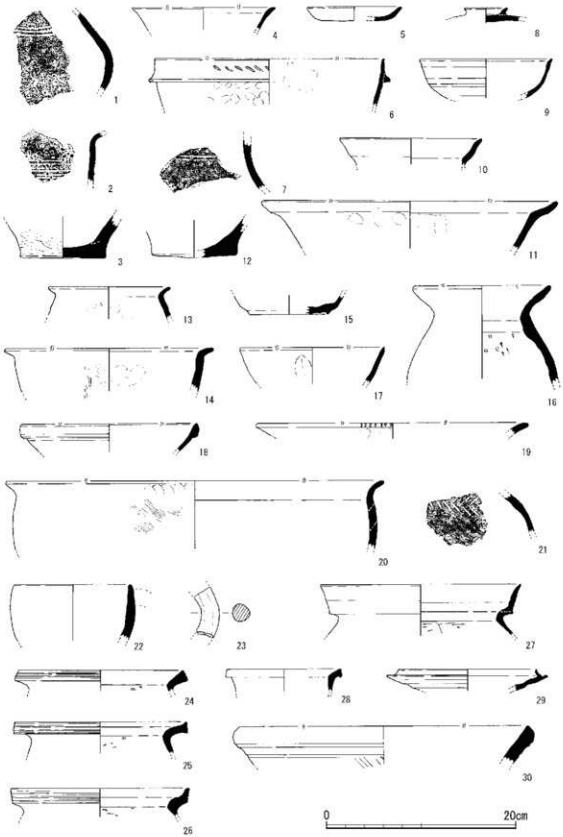
２トレンチ（７～11）　７は弥生土器で、壺の頸部から肩部にかけての破片である。沈線を２条施す。弥生時代前期のものであろう。８は須恵器蓋の環状のつまみで、奈良時代のものである。９は須恵器の無蓋高杯の杯部の破片である。10は土師器の壺ないし甕の口縁部である。９・10は古墳時代のものである。11は中世の瓦質土器の鍋である。

９トレンチ（12～14）　12は弥生土器の底部である。13は土師器の甕で、古墳時代のものであろう。14は弥生土器の鉢であろうか。

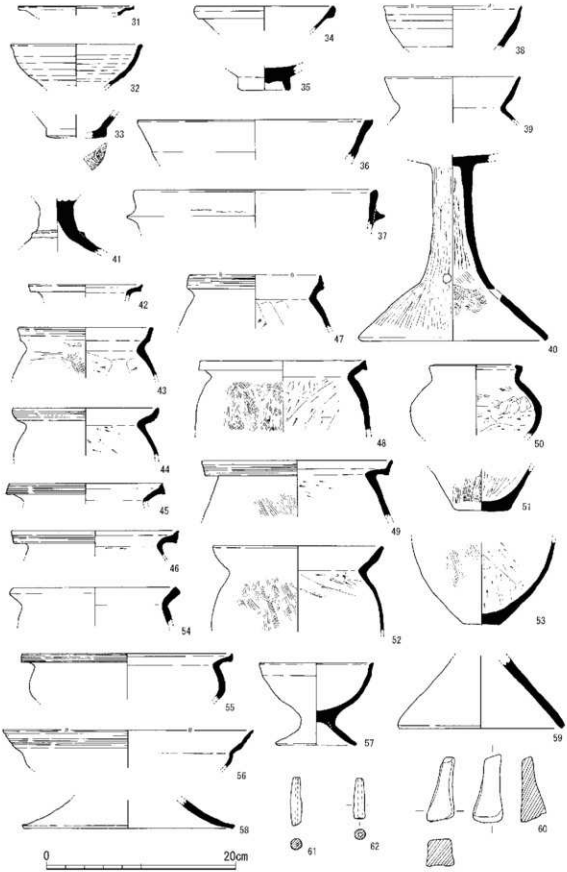
３トレンチ（15～18）　15は高台付の須恵器杯である。奈良時代のものであろう。16は土師器甕である。体部内面にヘラケズリ調整を施す。古墳時代のものであろう。17は青磁椀である。外面に蓮華文がみられる。18は玉縁状の口縁を有する白磁椀である。17・18は中世のものである。

10トレンチ（19）　19は前期の弥生土器の甕の口縁部である。口縁端部外面に刻み目を施す。

５トレンチ（20～38）　20～26は弥生土器で、20・21は前期、22・23は中期、24～26は後期と思われる。20はやや大型の甕である。21は壺の体部片で、綾杉状の刺突文を施す。22は把手付の鉢、23は水差しの把手と思われる。24～26はいずれも甕で、口縁部外面に擬凹線文を２～４条施す。27は山陰系の複合口縁を呈する土師器甕である。28は口縁端部を外方に屈曲させる土師器短頸壺の口縁部と思われる。27・28は古墳時代前期に位置づけられる。29は須恵器杯、30は須恵器甕の



第6図　出土遺物実測図(1)



第７図　出土遺物実測図（２）

破片である。30は外面に沈線と刺突文を施す。29・30は古墳時代後期に位置づけられる。31はいわゆる「て」の字状口縁を呈する土師器皿である。32・33は須恵器椀で、33は底部外面に糸切り痕がみられる。31～33は平安時代中頃のものであろう。34は白磁椀の口縁部、35は青磁椀の底部、36は陶器鉢の口縁部、37は瓦質土器の口縁部、38は天目茶椀の口縁部である。34～38は中世前半から後半にかけてのものと位置づけられる。

6トレンチ(39・40)　39は土師器の口頸部である。古墳時代のものであろう。40は高杯の脚部である。外面にミガキ調整を施す。円形の透孔を穿つが、数は不明である。底径19.4cm、残存高19.8cmである。

7トレンチ(41～60)　41は脚部に刻み目を施した突帯を有する。42は受け口状を呈する壺の口縁部と思われる。43～47・49はいずれも口縁部が複合口縁ないし受け口状を呈するもので、口縁部外面に擬凹線文を施す甕である。

48は口縁部外面に擬凹線文を施さない甕である。50は口縁端部が斜め上方に少し肥厚する短頸壺である。51は甕の底部であろう。42～51はおおむね弥生時代後期に位置づけられよう。52はゆるやかに複合口縁状を呈する甕である。53は甕の底部であろう。54は短い口縁部を有する甕または鉢であろう。55は鉢もしくは高杯の杯部と考えられる。口縁部は受け口状を呈し、外面に擬凹線文を施す。56は高杯の杯部で、浅い鉢状を呈する。口縁部外面に擬凹線文を施す。57は杯部が椀形を呈する高杯である。口径11.8cm、器高8.8cmである。58・59は高杯の脚部である。60は砥石である。

その他の遺物　61・62は土錘である。いずれも出土地点は不明である。

5．まとめ

今回の調査は鳥取橋遺跡ではじめての調査で、上述のように多数の遺物が出土したものの、顕著な遺構を確認することはできなかった。各トレンチにおける土層の堆積状況はおおむね似通っており、現地表下1.5～1.8mまでは茶褐色系の粘質土で、耕作に伴う堆積層と考えられる。その下部には砂・粗砂・小礫を主体とする堆積層がみられ、竹野川の河川堆積層と判断される。この河川堆積層から多数の遺物が出土した。これらの遺物は時期的に、弥生時代前期から中世末にかけてのものと考えられ、調査地点の周辺にこれらの時期の遺跡が広がっていることが予想される。

1961年に表採された小型壺の時期(縄文時代晩期～弥生時代前期)まで遡るものは今回の調査では確認できなかったが、小型壺が表採されたのは今回の調査地点よりも上流側ということなので、より上流側に縄文時代にさかのぼるような遺構・遺構の広がりがあるのかもしれない。

注　岡林峰夫「鳥取橋遺跡」(『京丹後市史資料編　京丹後市の考古資料』京丹後市　2010)

2.平成21・22年度平安京跡左京四条一坊六・十一町、壬生大路発掘調査報告

1．はじめに

この調査は、平成21年度および平成22年度京都府中京警察署(仮称)庁舎建設工事に係る平安京跡発掘調査として、京都府警察本部の依頼を受けて実施した。調査地は、京都市中京区壬生坊城町48番地16に位置する。平安京の条坊復原によると左京四条一坊六・十一町、壬生大路に想定される。周辺では多くの調査が実施され、弥生時代～中世にかけての多くの遺構・遺物が検出されている。(注1)

今回の調査地は、明治45年に開業、昭和47年１月に廃止された京都市電の壬生車庫が北側に、南側にはそれに伴う旧車庫煉瓦建物、昭和37年開業の京都市交通局の建物が存在していた地点にあたる。

平安京左京四条一坊六・十一町でのこれまでの調査例としては、1975年に市電壬生車庫跡地(左京四条一坊五・六・七町)で発掘調査が行われている。この調査では、六町域で平安時代から鎌

第１図　調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西北部・東北部)

倉時代の四条坊門小路の南北両側溝、平安時代前・中期末の井戸跡、中期から後期にかけての建物跡が検出されている。

今回の報告は、平成21年度と平成22年度の２か年にわたって実施した発掘調査の報告である。

平成21年度は平安京造営以後の遺構・遺物が削平されることなく存在するかどうかを確認することを目的として、庁舎建設予定地の一画に２か所の小規模なトレンチ(１・２トレンチ)を設けて実施した。平成22年度は平成21年度の調査成果を踏まえて、平成21年度の１トレンチを拡張するとともに、新たに２か所のトレンチ(３・４トレンチ)を設定して発掘調査を実施した。

現地調査には、京都府教育委員会、京都市教育委員会、(財)京都市埋蔵文化財研究所をはじめとする関係諸機関のご協力をいただいた。現地調査および整理作業には多くの方々の参加を得た。記して感謝したい。本調査報告は、出土遺物の土器類を当調査研究センター次席総括調査員伊野近富が、その他は増田孝彦が執筆した。

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸

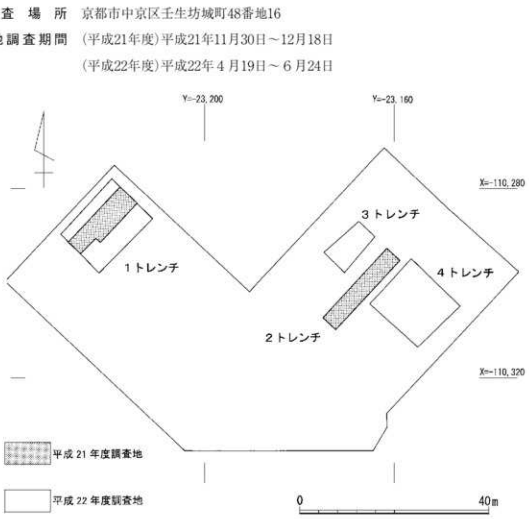
調 査 担 当 者　調査第２課主幹調査第３係長事務取扱　石井清司

同主任調査員　増田孝彦

調 査 場 所　京都市中京区壬生坊城町48番地16

現地調査期間　(平成21年度)平成21年11月30日～12月18日

(平成22年度)平成22年４月19日～６月24日



第２図　トレンチ配置図

調　査　面　積　(平成21年度)150㎡
(平成22年度)350㎡

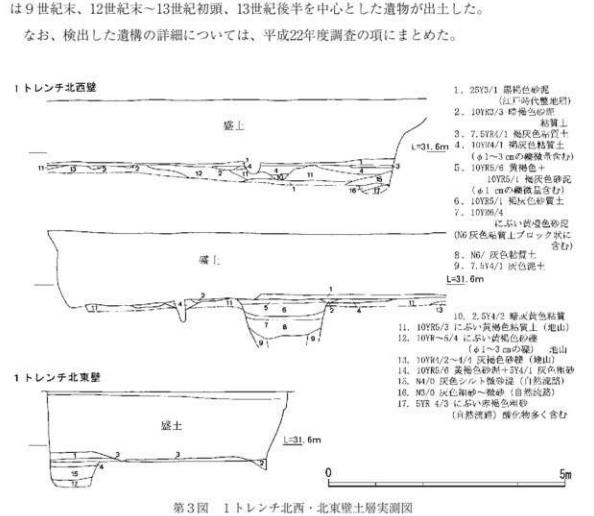
2．調査概要

1)平成21年度調査(第2図)

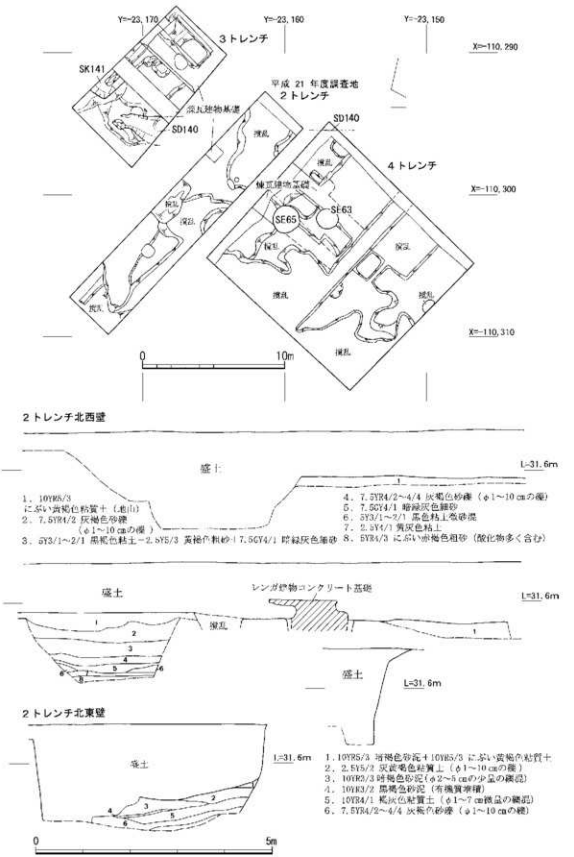
平成21年度の調査は、庁舎建設予定地の西側と東側の2か所に設定して実施した(1・2トレンチ)。1トレンチは左京四条一坊六町域、2トレンチは壬生大路の路面及びその東側溝、一部左京四条一坊十一町域にあたる。

1トレンチ(第3・6図、図版第1～3)　土層の堆積状況は、地表下1.3mまでは近・現代の盛土、明治時代以降の遺構の攪乱、近・現代の盛土が堆積しており、その下層で厚さ10～15cmの江戸時代の整地層(1層)を確認した。江戸時代の整地層直下は、基盤層である黄褐色粘質土(11層)の遺構検出面となり、平安京造営以後の真南北を意識した溝などを検出した。これらの遺構からは、中世を中心とした土師器・瓦器・陶磁器の細片が出土した。江戸時代に整地を受けたため、遺構は削平され浅いものとなっていた。検出した主な遺構は、中世と考えられる真東西方向の溝6条・真南北方向の溝15条、井戸跡1基、土坑5基、柱穴15か所である。これらの遺構からは9世紀末、12世紀末～13世紀初頭、13世紀後半を中心とした遺物が出土した。

なお、検出した遺構の詳細については、平成22年度調査の項にまとめた。



第3図　1トレンチ北西・北東壁土層実測図



第4図　2～4トレンチ遺構平面図、2トレンチ北西・北東壁土層実測図

２トレンチ（第４図、図版第３）　１トレンチと同様、地表下1.0mまでは近・現代の盛土が堆積し、明治時代以降の攪乱を多く受けていた。そのため、盛土直下が基盤層である黄褐色粘質土（１層）となっており、壬生大路東側溝・路面跡など明確な遺構はなく、あるいは壬生大路の路面部分にあたるためか、柱穴や井戸跡もなかった。なお、トレンチ北東角付近にわずかに残る江戸時代の整地層より平安時代以降、鎌倉時代を中心とした土師器・瓦・陶磁器の小片が出土した。

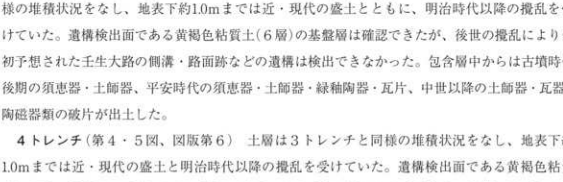
２）平成22年度調査（第４図）

平成21年度の調査結果を踏まえて、平安京造営以後の良好な遺構が検出された１トレンチを中心に北西・南東側にトレンチを拡張して発掘調査を実施するとともに、壬生大路に関連した遺構が存在している可能性を考えて、２トレンチの北西側に３トレンチ、南東側に４トレンチを新たに設定して発掘調査を実施した。

１トレンチ拡張部（第６図、図版第４）　平成21年度に実施した１トレンチを拡張したものであり、土層の堆積状況は、平成21年度の１トレンチと同様である。平成22年度の調査では新たに東西溝８条、南北溝12条、土坑３基、柱穴23か所、井戸跡１基を検出した。明治時代以降の攪乱土及びその直下の包含層中からは、古墳時代後期の須恵器・土師器、平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦片、中世以降の土師器・瓦器・陶磁器類の破片が出土した。

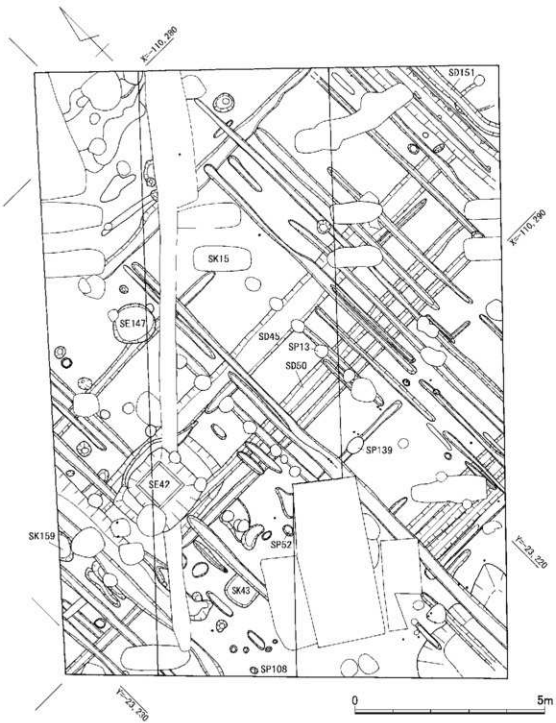
３トレンチ（第４・８図、図版第６）　２トレンチの北側に設定したトレンチで、２トレンチ同様の堆積状況をなし、地表下約1.0mまでは近・現代の盛土とともに、明治時代以降の攪乱を受けていた。遺構検出面である黄褐色粘質土（６層）の基盤層は確認できたが、後世の攪乱により当初予想された壬生大路の側溝・路面跡などの遺構は検出できなかった。包含層中からは古墳時代後期の須恵器・土師器、平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦片、中世以降の土師器・瓦器・陶磁器類の破片が出土した。

４トレンチ（第４・５図、図版第６）　土層は３トレンチと同様の堆積状況をなし、地表下約1.0mまでは近・現代の盛土と明治時代以降の攪乱を受けていた。遺構検出面である黄褐色粘質土（７層）の基盤層は確認したが、後世の攪乱により当初予想された壬生大路の側溝・路面跡など



第５図　４トレンチ北西壁土層実測図

の遺構は検出できなかった。検出された遺構は、３トレンチの溝ＳＤ140の延長部の溝南側の肩部と考えられるものと、近代以降の井戸２基を検出した。包含層中からは、古墳時代後期の須恵器・土師器、平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦片、中世以降の土師器・瓦器・陶磁器類の破片が出土した。



第６図　１トレンチ遺構平面図

3．検出遺構

1）1トレンチ（第6図、図版第4）

井戸跡ＳＥ42（第7図、図版第5）　トレンチ中央付近西側で検出したもので、一辺約1.7mの方形の掘形をなし、検出面からの深さ約2mを測る。井戸の底部分には、一本の柱材を中央で二分割し、さらにそれを横に半切して転用した0.9m四方の井戸枠が残存していた。縦板等の井戸部材の大半は抜き取られており、井戸の中位付近で抜きとりの際に残されたと考えられる縦板が少量残存していた。これにより三枚組接方形縦板組横桟どめの井戸であることが明らかとなった。底面の標高は29.2mで、検出面から約1.5m付近が自然流路の砂礫層であるため湧水が著しく、井戸壁面が一部崩落した状態であった。埋土は青灰色泥土（礫混じり）で、土師器、陶磁器、瓦、木製品（題籤軸・箸・曲げ物の底など）が出土した。出土遺物から12世紀末～13世紀初頭と考えられる。

井戸跡ＳＥ147（第7図、図版第5）　井戸跡ＳＥ42の北東側で検出した。円形の掘形をなし、直径約1m、検出面からの深さ2.1mを測る。井戸枠は検出されなかった。底面の標高は29.2mで、検出面より1m付近で砂礫層となり湧水が著しく、井戸の壁が崩落したためか、下部へ行くほどに袋状に広がっていた。埋土中からは、土師器、須恵器、瓦器、常滑甕、東播系甕・鉢、中国製青磁壺・白磁壺などとともに、木製品（箸・曲げ物の底など）、金銅製玉などが出土した。出土遺物は12世紀後半を中心としたものである。

溝ＳＤ45　トレンチ中央部で検出した東西方向の溝で、検出長16.2m、幅0.65～0.9m、深さ7～8cmを測る。埋土は暗褐色砂泥粘質土で、細片化した土師器・須恵器・瓦器片が出土した。

そのほかの小溝　東西・南北方向の小溝を多数検出した。小溝だけでみた場合、遺構の切り合い関係から東西方向の小溝が先行する。この小溝は井戸ＳＥ42・147と切り合い関係を有し、井戸は東西方向の溝に後出し、南北方向の溝に先行する。東西方向の小溝は幅0.2～0.4m、深さ3～7cmを測る。南北方向の小溝は幅0.2～0.3m、深さ4～5cmを測り、最大のものでは検出長14.2m、幅0.45m、深さ4～5cmを測る。

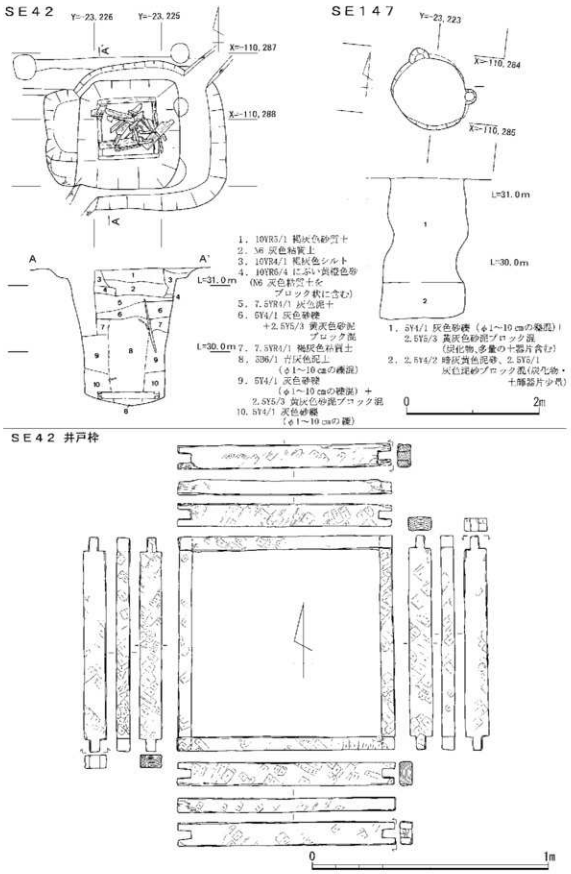
土坑ＳＫ43　ＳＥ42の南側に位置し、一辺0.8m×0.9mの方形の掘形を有し、深さ28.7cmを測る。北東隅の底面より曲げ物の底板が出土した。

柱穴ＳＰ52（図版第3）　中央部やや南西側にあり、長径0.35m、短径0.25m、深さ5cmを測る。根石代わりに破損した二種類の平瓦片を底面に敷いている。

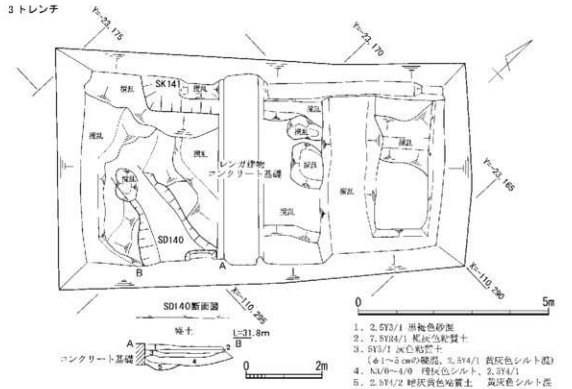
2）3トレンチ（第8図、図版第6）

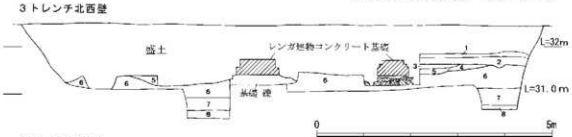
検出された遺構として、トレンチ西端において推定壬生大路路面上を東西に走る溝1条（ＳＤ140）を検出した。

溝ＳＤ140（図版第7）　トレンチの南端にあり、最大幅約2m、最小幅約1m、深さ0.2mで、長さ3mにわたり検出した。浅いレンズ状の断面をなし、細片化した土師器皿が出土した。溝ＳＤ140の東延長部は2トレンチにかかる位置にあるが、明治時代以降の攪乱により削平されたようで検出されなかった。2トレンチの東に隣接する4トレンチでは溝ＳＤ140の南肩の一部が検



第7図　井戸跡ＳＥ42・147実測図、ＳＥ42井戸枠実測図





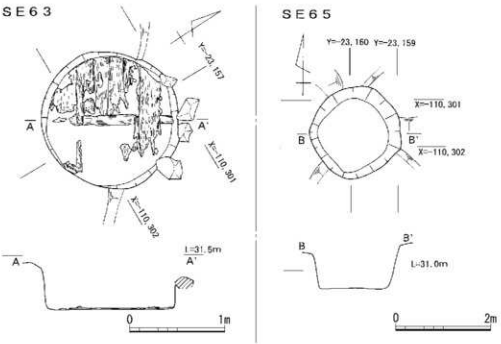
第８図　３トレンチ遺構平面図、３トレンチ北西・北東壁土層実測図

出できた。出土遺物から13世紀後半と考えられる。なお、トレンチ東壁に面した溝底で、長径0.9m、深さ0.2mの柱穴状の掘り込みが検出したが、遺物が出土しなかったため時期は不明である。

土坑ＳＫ141　溝ＳＤ140の北側、トレンチ北西壁で検出したもので、大半がトレンチ外になる。検出長２m、同幅0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は一層からなり、細片化した土師器皿が出土した。出土遺物から鎌倉時代前期と考えられる。

3）4トレンチ（第４図、図版第６）

井戸跡ＳＥ63（第９図、図版第７）　トレンチ中央部よりやや北西壁寄りで検出した。市電壬生車庫時代の煉瓦建物基礎により削平を受ける。円形の掘形を有し、直径1.45～1.5m、深さ0.5mの規模を測る。底面の標高は30.6mである。底面に薄い底板が見られ、埋土中より樽の側板片



第９図　井戸跡ＳＥ63・65実測図

が出土しており、樽をそのまま井戸枠としていたと考えられる。底板の直径は約1.35mで掘形底面の直径と樽の直径はほとんど同じで、きっちりとはめ込まれていたようである。埋土中より陶磁器の破片が出土している。出土遺物から江戸時代後期と考えられる。

井戸跡ＳＥ65（第９図）　井戸跡ＳＥ63の西側２ｍのところで検出した。円形の掘形を有し、直径1.85m、深さ0.94mを測る。底面の標高は30.6mである。井戸側板等は存在しなかった。井戸跡ＳＥ63同様、埋土中より陶磁器の破片が出土している。出土遺物から江戸時代後期と考えられる。

溝ＳＤ140（図版第７）　３トレンチで検出した溝の延長部と考えられるもので、溝南側の肩部の一部が確認できた。検出長1.1m、深さ0.15mを測る。埋土中より鎌倉時代前期と考えられる土師器皿が出土した。

（増田孝彦）

４．出土遺物（第10～18図、図版第８～10）

遺物は整理箱15箱分出土した。種類は土師器、須恵器、瓦器、黒色土器、国産陶磁器（灰釉陶器・緑釉陶器・常滑焼き・唐津焼きなど）、瓦、輸入陶磁器（中国製白磁・青磁・褐釉陶器）、石製品、木製品などである。

１トレンチ井戸ＳＥ42出土遺物（第10・15図、図版第10）

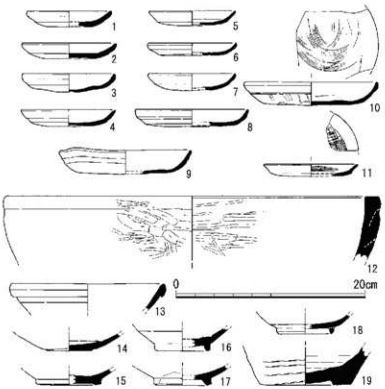
1～19・88～94は井戸ＳＥ42から出土した。１～10は土師器皿である。１～７は小皿、８～10は中皿である。２～４・６・８・９は口縁部を二段ナデで調整している。１は口径8.8cm、器高1.6cmである。色調は淡褐色である。口縁端部をヨコナデし、体部上半もヨコナデしている。９

は口径14.0cm、器高2.4cmである。色調は淡褐色である。口縁端部をヨコナデし、面取りしている。10は内側に板状のものでハケを施している。この技法や大きさから12世紀中葉から後葉と考えられる。

11は瓦器皿である。口径9.8cm、器高1.2cmである。色調は黒色である。

12は瓦質の盤である。内面にミガキを施す。口径39.6cm、現存高6cmである。

13～17・19は中国製白磁椀である。13は口縁部が肥厚した、いわゆる玉縁状口縁のもので、15はその底部である。



第10図　出土遺物実測図(1)

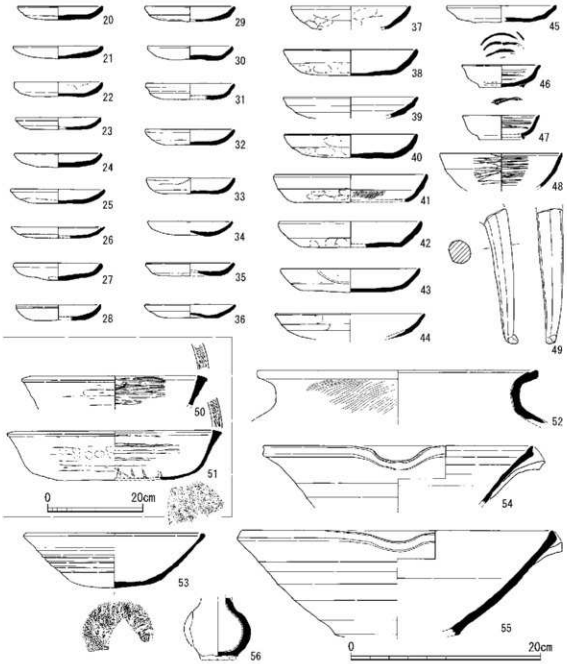
大宰府分類の白磁椀Ⅳ類に相当する。14は体部の内外面とも施釉しており、釉色はうすい灰緑色である。底部外面は露胎である。破片全面が焼けており、橙褐色と灰色で、煤が付着している。16・17は高い高台をもつもので、大宰府分類の白磁椀Ⅴ類に相当する。内面は施釉しているものの、外面は露胎である。19は中国越州窯青磁水注の底部である。59と同一個体である。外面に緑灰色の釉を施す。内面にも同様の釉が認められる。底部内面には煤が付着している。畳付けは露胎である。削り出し高台である。内外面ともロクロで成形している。断面は橙褐色と灰白色である。13～17・19は12世紀末から13世紀初めに相当する。

18は無釉だが、器形から判断すれば灰釉陶器である。ただし、現存部分に釉はない。くちばし状の高台をもつもので、K90(黒笹90号窯式)段階に相当する。9世紀末である。

88～94は木製品で、88は題籤軸で完形品である。全長33.3cm、題籤部分は長さ5.8cm、幅2cm、厚さ0.45cm。両面に墨書が認められるが一面のみ判読できた。『保延六年(1140)返抄』とあり、返抄は律令制における領収書であるが、反対面が判読できないため何を指すものかは不明である。

89は不明木製品で片側に2段にわたり抉りがつく。全長23.8cm、幅0.9cm。90は棒状のもので、全長18.3cmを測る。幅広の先端部分中央には径3mmの穴、基部にはホゾが認められることから、何らかの本体に差し込まれていたようである。

91は箸である。92はしゃもじで、取っ手先端を欠損するが、残存長14.9cmを測る。93は全長7cm、幅0.5cmの丸い棒状のものである。



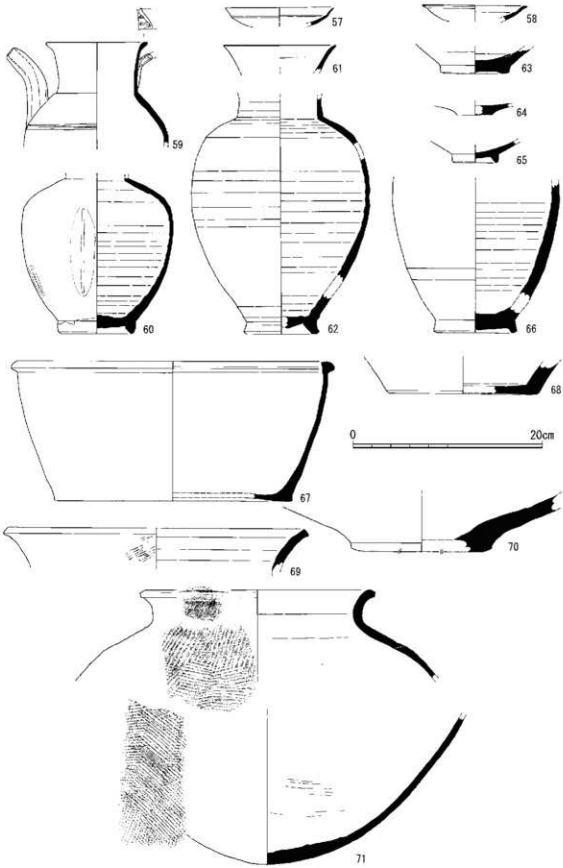
第11図　出土遺物実測図（２）

94は曲物底板で約1/2が残存。側面に３か所木釘が残る。材はスギで、柾目である。

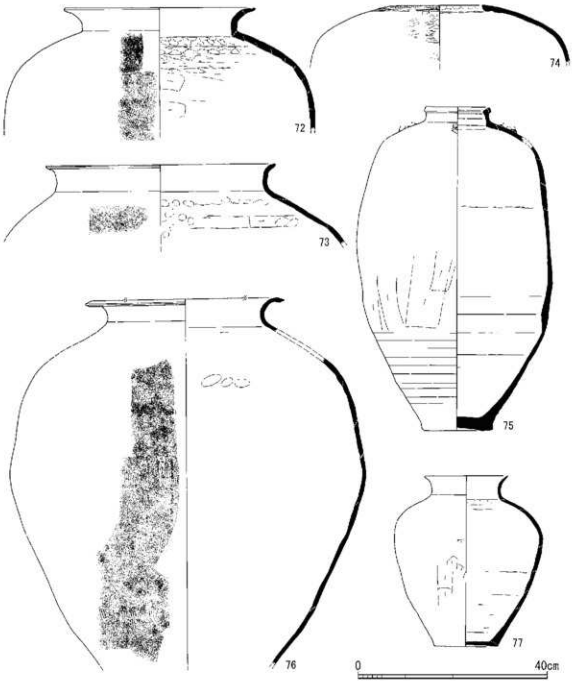
１トレンチ井戸ＳＥ147出土遺物（第11～15図、図版第８～10）

20～82・83～87・95・96は井戸ＳＥ147から出土した。20～45は土師器皿である。20～36は小皿、37～45は中皿である。20は口径8.8cm、器高1.2cmである。色調は淡褐色である。口縁部は一段ナデで調整している。23・30などは端部を強くヨコナデし、面取り技法を施している。ＳＥ147出土の土師器皿は、一段ナデのものが主体で、二段ナデのものが少なく、ＳＥ42出土品より新しく、12世紀後葉から13世紀はじめのものが中心である。

64は白色土器の杯である。底部は糸切りである。



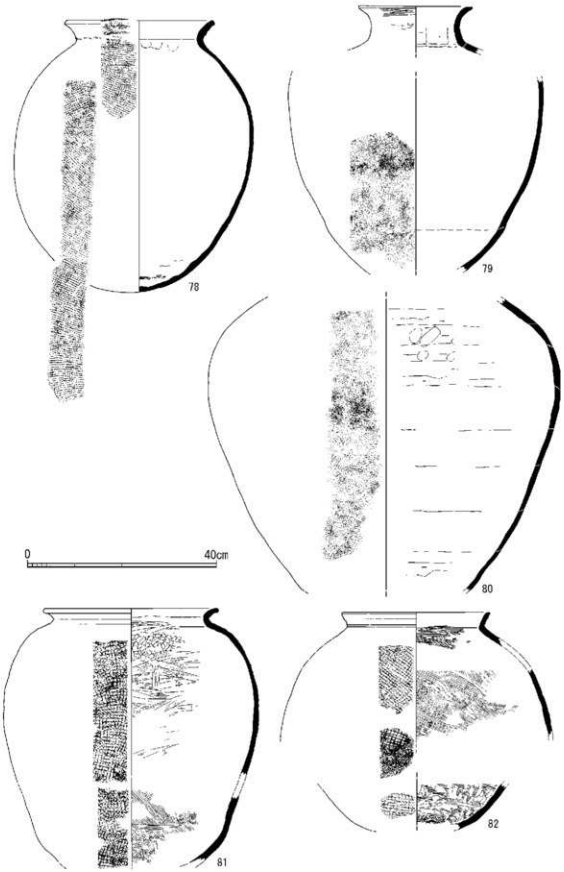
第12図　出土遺物実測図（3）



第13図　出土遺物実測図（4）

46～51は瓦器である。46・47は小杯、48は椀である。49は鼎（かなえ）の脚、50・51は盤である。46は口径8.0cm、器高2.4cmである。色調は黒色である。内面にミガキを施す。48は口径12.8cm、器高4.0cmである。色調は黒色である。内外面ともミガキを施している。口縁部内側は少し窪ませて段があり、大和型の瓦器椀である。12世紀代である。50・51は内面にミガキを施し、外面の上半分はユビオサエである。

52～55、69～71・78～82は須恵器である。52は甕で、口径29.6cm、残存高は5.6cmである。東播系、おそらく魚住産と思われる。53～55は片口の鉢である。53は口径18.8cm、器高6.0cmである。

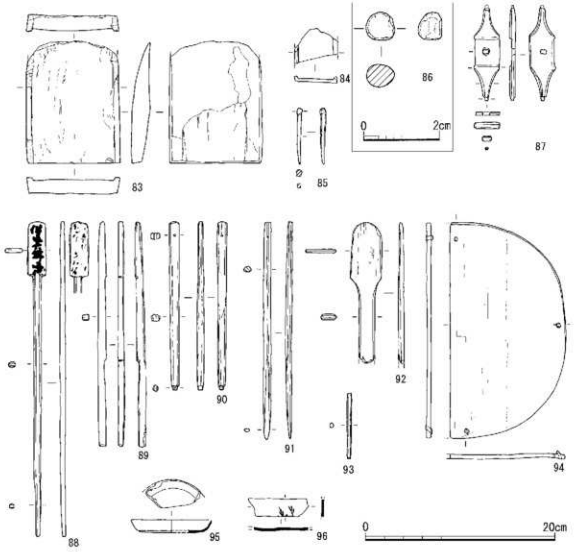


第14図　出土遺物実測図（5）

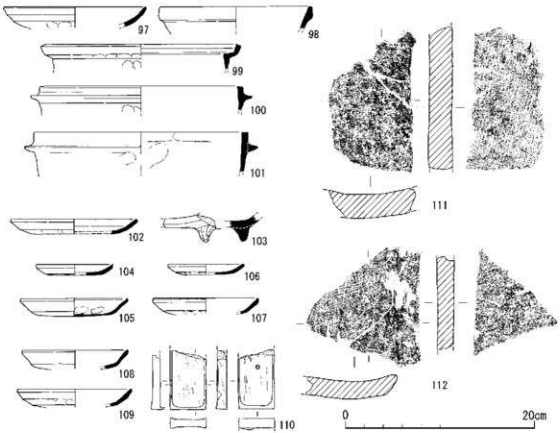
54は口径24.4cm、器高6.0cmである。色調は青灰色である。69～71・78～82は須恵器甕である。70は底部である。内面には自然釉が遺存している。71は「く」の字状の単純口縁で、体部外面には格子タタキを施している。底部は丸底である。口径22cmである。78～82は卵形の体部である。78は口径30.4cm、器高58.4cmである。体部外面には平行タタキを施している。81は口縁部の立ち上がりが短いもので、さらに、体部外面には格子タタキを施している。78～82は12世紀後半を中心としたものである。

56は瓦質壺である。丸胴のもので、体部下半はヘラケズリを施す。胴径6.8cm、残存高は6.4cmである。高台がとれており、元は仏花瓶であったと思われる。

57～63・65～68・75は中国製陶磁器である。57・58は白磁皿である。57は口径11.2cm、残存高は1.6cmである。体部中位は屈折している。59は青磁水注である。口径10.4cm、残存高10.8cmである。広口で、口縁端部は小さく外反している。注ぎ口は先が細くなる円筒形で、ヘラにより面取りしている。把手は細い中実の粘土紐を使用している。体部上半に２条の沈線を施している。



第15図　出土遺物実測図（６）



第16図　出土遺物実測図（7）

色調は灰色の混じった茶色であり、その特徴から中国越州窯青磁の新しい段階のものと考えられる。60・62・66は白磁壺である。いずれも口縁部は欠損している。内外面ともロクロナデである。底部はいずれも削り出し高台である。60は胴径16cm、残存高16.6cm、体部中位の現存部に縦方向の窪みを３か所（完形ならば４か所）施し、いわゆる瓜形の胴部をしている。61は白磁椀である。63は白磁椀第Ⅳ類である。65は白磁椀である。67は黄釉盤である。口径32cm、器高14.8cmである。内外面とも施釉しており、釉色は灰緑色である。口縁部は外側に肥厚したものである。体部の内外面は施釉しているが、底部外面のみ露胎で、砂を含んだ粗い胎土である。68は白磁壺の底部である。外面は灰緑色の釉で、断面は灰色である。ロクロナデで成形している。75は中国製褐釉壺である。外面は茶褐色の釉がかかる。ヨコナデで調整している。内面はナデで調整している。下半には上から垂れた茶褐色釉がかかっている。口径12.8cm、復元高68.8cmである。底部は平底で、長胴の体部に小さな口縁部が付くものである。口縁端部は外側に肥厚している。この形状から12世紀のものと考えられる。

72～74・76・77は常滑甕である。いずれも口縁部は単純な「L」の字状である。体部外面にタタキを施す。72は口径38.4cmである。口縁端部は尖り、「逆ハ」の字状に引き出されており、この形態から常滑編年の１ｂ-２期に相当し、12世紀第２～３四半期のものと考えられる。76の口縁部は大きく屈曲しており、常滑編年では２期に相当し、12世紀第３四半期である。73は一段階新しく３期に相当し、12世紀第４四半期である。77は小型で、口径16.8cm、器高36cmである。

体部外面上半は茶色、下半は灰色である。

83・84は石製の硯である。83は大形品で幅9.8cm、残存長12.95cm。84は小形品で幅4.6cm、残存長3.65cmを測る。85は鉄釘で頭部を巻頭形に巻き込むものである。全長5.9cmを測る。86は金銅製品が溶解して玉状に固まったと思われるもので、表面に部分的に金色が残る。87は糸巻きで全長9.8cm。材はスギで、板目である。95は漆器の薄手の皿と考えられる。全体に黒漆が塗られ、不明文様部分には赤漆が塗られる。96は漆器不明製品で、板状の部分品で96、同様、黒漆が塗られ松葉状の文様は赤漆が塗られる。

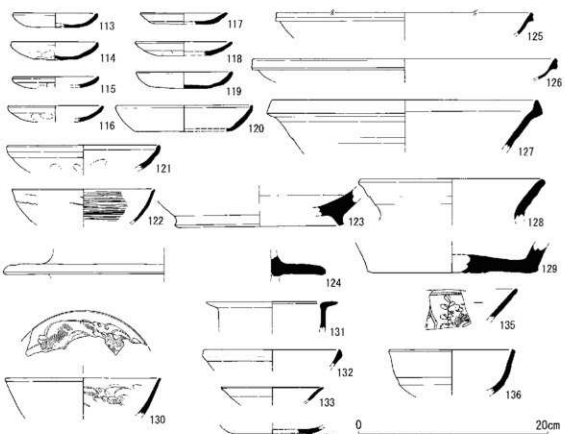
１トレンチＳＰ52出土遺物（第16図）　111・112はＳＰ52から出土した瓦である。いずれも内面には布目、外面には縄タタキが施されている。

３トレンチＳＫ141出土遺物（第16図）

102・103は３トレンチＳＫ141から出土した。102は土師器皿である。口縁端部は面取りしている。口縁部は一段ナデである。13世紀前半である。103は瓦質鉢の脚である。

３トレンチＳＤ140出土遺物（第16図）

104～107は３トレンチＳＤ140から出土した。すべて、土師器皿である。104・106は小皿、105・107は中皿である。104は口径7.8cm、器高1.0cmである。色調は淡褐色である。口縁端部は面取りしている。口縁部は一段ナデである。105は口径11.2cm、器高2.0cm、色調は淡褐色である。



第17図　出土遺物実測図（８）

これらは13世紀後半のものである。

1トレンチ包含層出土遺物(第16・17図、図版第8)

97～101・110・113～136は包含層から出土した。97は土師器皿である。口縁部は二段ナデである。12世紀末から13世紀初めである。98は中国製白磁椀である。口縁部は玉縁状である。大宰府分類の白磁椀Ⅳ類である。時期は12世紀後半から13世紀初めのものである。99は瓦器鍋である。口縁部は「く」の字に屈折している。13世紀のものである。100・101は瓦器羽釜である。箱型の体部に小さな鍔を付けている。13～14世紀前半の所産である。

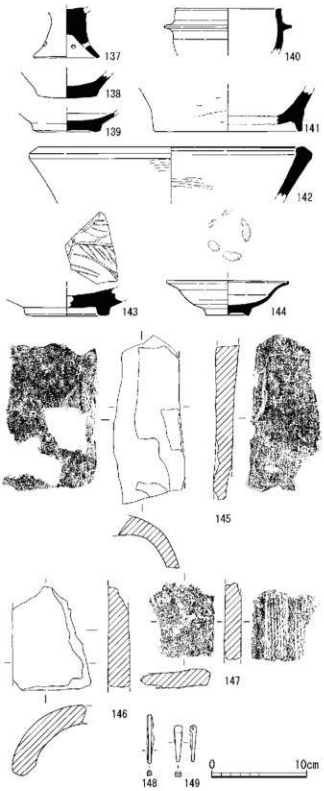
110はＳＫ63付近で出土した、石製の硯である。長方形で、幅４cm、現存長6.8cmである。

113～121は土師器皿である。120は深皿で14世紀代である。

122は瓦器椀である。内面に密なミガキを施す。外面は一部のみミガキを施す。口縁端部内面に窪みがある。大和型である。124は瓦器羽釜である。128は瓦質甕である。色調は灰色である。

123は東海地方の灰器系の鉢である。いわゆる山茶碗と同じ胎土で、砂粒を含む。125～127は東播系の須恵器鉢である。口縁部を肥厚させたもので、125・126は小さく肥厚させていることから12世紀後半から13世紀前半のものである。127は口縁部を分厚く肥厚させていることから13世紀後半から14世紀前半のものである。129は須恵器甕の底部である。

130は中国龍泉窯青磁椀である。内面にヘラで雲竜文を描いている。131は中国龍泉窯青磁香炉である。内外面とも施釉している。釉は明るい緑灰色である。



第18図　出土遺物実測図(9)

132は中国製白磁椀である。玉縁状口縁で、大宰府分類のⅣ類である。133は白磁皿である。口縁端部内面は釉をかきとっており、いわゆる口禿げの皿である。釉は灰白色である。134は中国製白磁皿である。口縁部が端反りになるタイプである。釉は灰白色である。畳付けは露胎である。16世紀代である。

135は中国製赤絵磁器である。内面に花紋を施している。もともとは赤色であったが、ほとんど色はくすんで黒色に変化している。外面の釉は青灰色である。136は唐津椀である。

２・３トレンチ包含層及び攪乱層出土遺物（第18図）

137は土師器高杯である。底部に円形の透かしを施す。138は黒色をした壺底部である。139は中国製白磁椀底部である。大宰府分類のⅣ類である。140は須恵器羽釜である。141は東海地方の瓷器系の鉢の底部である。内面は使用により磨耗している。142は備前鉢である。口径28cm、残存高5.2cmである。143は中国製青白磁椀である。内面にヘラによる刻花を施す。全面施釉であるが、畳付けのみ露胎である。144は唐津鉢である。内面には５か所に目跡がある。16世紀前半のものである。145～147は瓦である。内面に布目、外面に縄タタキを施す。178･149は鉄釘である。

（伊野近富・増田孝彦）

５.まとめ

今回の調査地は、明治時代の市電車庫、京都市交通局の建物跡によって攪乱を受けている部分も存在したが、北側の１トレンチで中世の溝・井戸跡などを検出した。また、南側の２トレンチでは壬生大路の路面にあたるためか、建物跡・井戸跡などは存在せず、道路側溝も攪乱により検出できなかったが、３トレンチでは鎌倉時代前期の土坑ＳＫ141、路面を東西に横切る鎌倉時代後期の溝ＳＤ140が検出された。４トレンチにおいてもその延長部分と考えられる溝の南肩部分が検出された。

平安時代後期の左京四条一坊六町域は白河法皇の近臣であった内蔵頭藤原国明の大邸宅があった場所とされており、井戸跡ＳＥ147より出土した中国製陶磁器との関連が注目される。また平安時代後期の1137～1185年には邸宅周辺で大火が発生しており[注2]、邸宅内の一部が火災を受けた可能性もある。井戸内より出土した貯蔵具である多数の甕類に火を受けた痕跡が見られることから、この大火との関係も注目される。これよりやや古い井戸跡ＳＥ42から出土した題籤軸『保延六年(1140)返抄』など、当該地の歴史的背景を考える上で重要な資料となるものである。

（増田孝彦）

注１　伊藤　潔・近藤章子「平安京左京四条一坊十三町跡」（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告2006－10』財団法人　京都市埋蔵文化財研究所）2006
　　大立目　一「平安京左京四条一坊十二・十三町跡」（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告2006－33』財団法人　京都市埋蔵文化財研究所）2007

注２　古代学協会・古代学研究所『平安京堤要』角川書店　1994
　　金田章裕『平安京―京都　都市図と都市構造』京都大学学術出版会　2007

3.長岡京跡右京第995次(7ANKSM-16地区)・開田遺跡・開田古墳群発掘調査報告

1．はじめに

今回の調査は、御陵山崎線地方交付金(街路)業務委託に係る埋蔵文化財発掘調査等であり、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査地は、長岡京新条坊では右京六条一坊十五町の北西部に該当する。長岡京期跡のほかに、縄文時代から中世に至る集落跡と知られる開田遺跡の北東端部にあり、古墳時代後期に築かれた開田古墳群の南端部に位置する(第１図)。

調査地周辺では、長岡京期の井戸跡や鎌倉時代以前と推定される掘立柱建物跡などが調査された右京第781次調査(注1)、六条条間小路両側溝などを検出した右京第863次調査(注2)などが実施されている(第２図)。今回の調査地は、右京第781次調査地点の北１トレンチの北延長部に位置する。

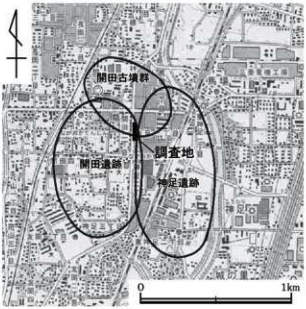
トレンチは、生活道路の確保、上・下水道などの埋設管を考慮し、調査対象地内を３か所に分けて設定した。トレンチ名は、南から順に１～３の番号を付けた。

各トレンチの基本層序は、上から現代の造成土、暗黒褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、黒灰色粘質土の順で堆積しており、遺構を検出した面は、淡黄灰色粘質土(砂礫を多く含む)の直上となる(第６図)。

現地調査は、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会ならびに(財)長岡京市埋蔵文化財センター、地元自治会ほか、近隣住民の方々のご指導・ご協力を得た。記して感謝したい。

当報告は村田和弘が執筆した。なお、本報告記載の国土座標値については、日本測地系を用いた。

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸
調査担当者　調査第２課主幹調査第３係長事務取扱　石井清司
同　調査員　村田和弘
調査場所　長岡京市開田２丁目
現地調査期間　平成22年４月26日～６月２日
調査面積　146㎡

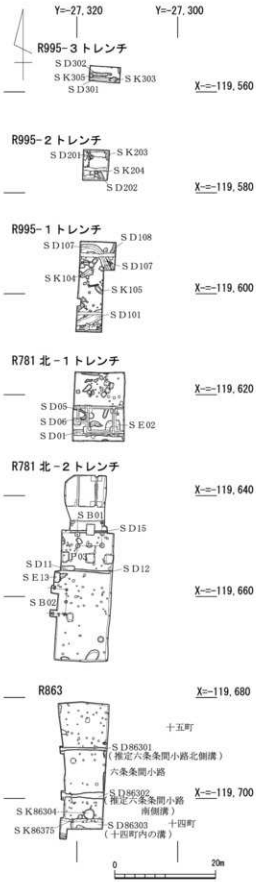


第１図　調査地周辺主要遺跡分布図
(国土地理院　1/25,000　京都西南部)

2．検出遺構

1)１トレンチ(第３・４・６図)

１トレンチでは、現地表面から深さ約0.7ｍで遺構を検出した。掘削土置き場の都合上、南側半分の調査を先行して行い、調査



第２図　調査トレンチと近隣調査地配置図

終了後に埋め戻しを行い、北側半分の調査を行った。

検出した遺構は、古墳の周溝と判断される溝や時期不明の溝（ＳＤ103～105・108）、土坑（ＳＫ102・106）、ピットがある（第３図）。

方墳ＳＸ109　溝ＳＤ101と溝ＳＤ107で構成される方墳である。規模は、最長で約12mを測る。墳丘および埋葬施設は、後世に削平を受けており残っていなかった。長岡京市教育委員会により開田古墳群東羅支群[注3]第11号墳と命名された。

溝ＳＤ101　トレンチ南部で検出した上面幅約1.7m、深さ約0.2～0.4mを測る斜行する溝で、方墳ＳＸ109の南辺の溝と考えられる。溝が埋まった時期は不明である。遺物は、遺構内埋土の上層である暗黒灰色粘性土層から須恵器甕の口縁部が出土した。溝底の淡黒灰色粘性砂質土層から土師器の小型甕３点がほぼ完形品の状態で出土した（第４図）。

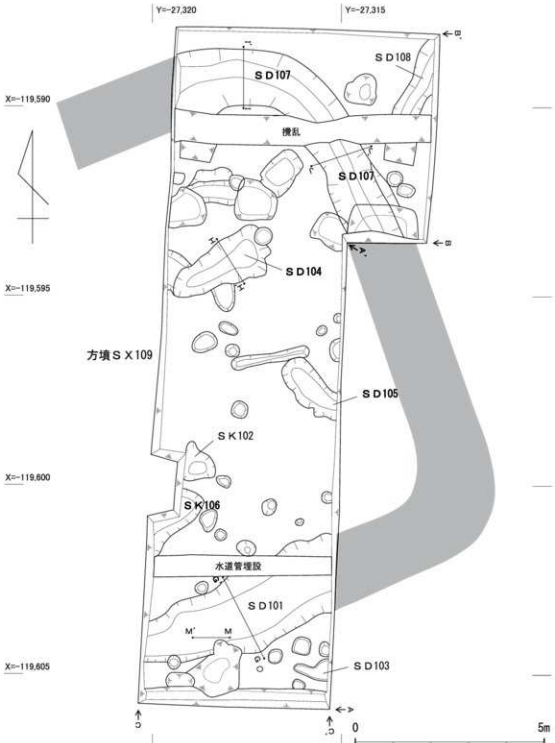
溝ＳＤ107　トレンチ北部で検出した溝で、南北方向に延びる溝が北端部で西へ屈曲する。上面幅約1.5m、深さ約0.5mを測り、溝の断面形は逆台形を呈する。方墳ＳＸ109の北辺から東辺にあたる。溝内からは、古墳時代の遺物しか出土していない。暗黄灰色粘質土層または暗黒褐色粘性砂質土層から須恵器の杯身・杯蓋、土師器の小型甕が出土した。

溝ＳＤ103　最大幅約0.6m、深さ約0.2mを測る溝である。検出した長さは約0.9mである。遺物の出土はなく、時期は不明である。

溝ＳＤ104　幅約1.2m、長さ約３m、最も深いところで約0.6mを測る。西側で浅くなり、北西へ曲がる。遺物の出土はなく、時期は不明である。

溝ＳＤ105　幅約0.8m、検出した長さは約1.9m、深さ約0.5mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

溝ＳＤ108　トレンチ北東隅で検出した。幅約0.6m、検出した長さは約２m、深さ約0.7mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

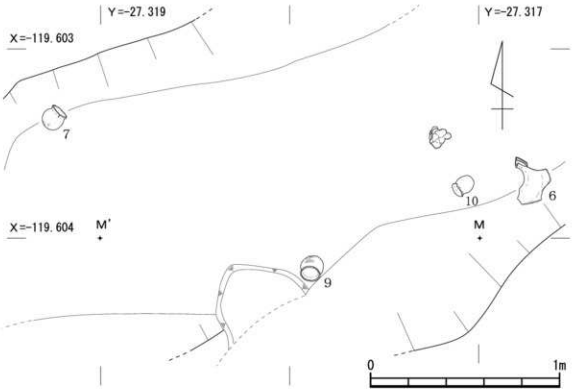


第3図　1トレンチ遺構平面図

土坑SK102　東西約0.8m、南北約1mを測る不定形な土坑で、深さは0.3mを測る。遺物の出土はなく、時期は不明である。

土坑SK106　最大の長さが約2m、深さ約0.4mを測る土坑である。遺物は江戸時代と判断される陶器小片が出土した。

ピット群　25基のピットを検出したが、深さが5～10cmと浅く、柱痕跡はない。出土遺物が



第４図　溝ＳＤ101遺物出土状況図

ないため、遺構の時期は不明である。

２）２トレンチ（第５・６図）

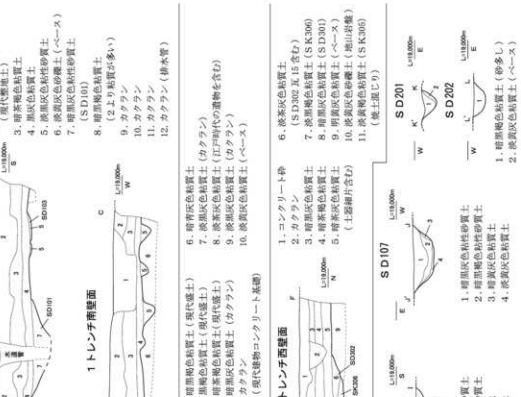
中央部に設定したトレンチで、現地表面から約0.4mで現代のコンクリート片が混じる攪乱や江戸時代の遺物を含む包含層を確認し、現地表面より約0.6mの深さで遺構面を検出した。北半分については、近代および現代の建物の基礎などによる攪乱が著しかった。北半には江戸時代の遺物包含層（淡茶灰色粘質土）があり、多くの遺物が混入しており、土製の鈴や寛永通寶、煙管の雁首部分などが出土した。遺物包含層を除去したところで斜め方向の溝や時期不明の土坑などを検出した。

第５図　２トレンチ遺構平面図

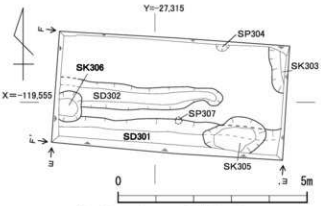
溝ＳＤ201　トレンチの北西隅部で検出した斜め方向の溝で、幅約0.5m、深さ約0.25mを測る。埋土からの出土遺物はなく、時期は不明である。

溝ＳＤ202　トレンチの南東隅部分で検出した斜め方向の溝で、幅約0.8m、深さ約0.4mを測る。溝ＳＤ201と同一方向であり、溝の埋土も同じであることから、同一の溝であったと判断される。出土遺物はない。

土坑ＳＫ203　　トレンチの北東隅で検



第6図　トレンチ土層断面図



第７図　３トレンチ遺構平面図

出した不定形の土坑である。埋土から古墳時代のものと判断される須恵器杯の破片が出土した。南北２ｍにわたって検出したが、大半は調査地外に延びる。古墳時代と思われる須恵器片が出土していることから、同一面で検出している遺構は古墳時代の遺構の可能性も考えられるが、確証を得たわけではない。

土坑ＳＫ204　東西幅0.7ｍ以上、南北幅は0.6ｍ、深さは0.4ｍを測る。土師器の破片が出土しているが小片のため、時期は不明である。

ピット群　３基検出したが、遺物の出土はなく、時期は不明である。

３）３トレンチ（第６・７図）

北端に設定したトレンチで、現地表から約0.7ｍで遺構面を検出した。検出した遺構は、東西方向の溝２条のほか土坑、ピットなどがある。

溝ＳＤ301　トレンチ南辺で検出した東西方向の溝で上面幅は0.6ｍ以上、深さは0.25ｍを測る。遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。

溝ＳＤ302　溝ＳＤ301の北側に並行して検出した溝で、東側で途切れている。上面幅は約0.6ｍ、深さ約0.1ｍを測る。埋土から近世の陶器片のほかに布目痕が残る平瓦の破片が１点出土した。

土坑ＳＫ303　南北１ｍ、幅0.4ｍ、深さ0.2ｍを測る土坑である。

土坑ＳＫ305　トレンチの南東隅部分の溝ＳＤ301下層で検出した楕円形を呈する土坑で、南北軸1.0ｍ以上、東西軸約1.6ｍ、深さ約0.25ｍを測る。土坑の埋土内には焼けた土や炭片などが混入し、長岡京期の須恵器蓋、土師器皿や甕の口縁部の破片が出土した。

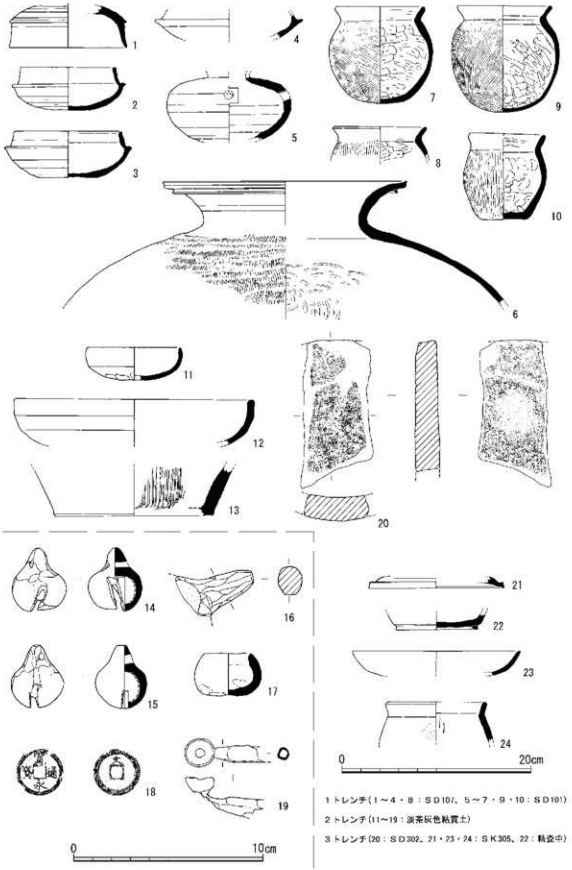
土坑ＳＫ306　トレンチ西側で溝ＳＤ301・302より新しい時期に掘り込まれた土坑である。遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。

ピット　ＳＰ304・307を検出したが、深さが５cm程度しかなく、遺物の出土もみなかった。

３．出土遺物（第８図）

１トレンチでは、古墳時代の遺物が中心で、方墳ＳＸ109の周溝ＳＤ101・107から出土している。２トレンチでは、コンクリート基礎などによる後世の攪乱層などから江戸時代の遺物が出土した。３トレンチでは長岡京期の瓦などの遺物が出土している。出土遺物は整理箱にして２箱である。

１～10は１トレンチで出土した。１～４・８がＳＤ107から、その他がＳＤ101から出土したものである。１は須恵器杯蓋で、口径12.3cm、器高4.45cmを測る。調整は、外面はヘラケズリ、口縁部は回転ナデが施されている。２は須恵器杯身で、口径9.9cm、器高4.55cmを測る。外面底部にヘラケズリ、口縁部は回転ナデが施されている。３は須恵器の杯身である。口径11.2cm、器高4.95cm、調整は外面底部にヘラケズリ、口縁部は回転ナデが施されている。４は須恵器杯身で


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
0
10cm
0
20cm
1トレンチ(1～4・8：SD107、5～7・9・10：SD101)
2トレンチ(11～19：淡茶灰色粘質土)
3トレンチ(20：SD302、21・23・24：SK305、22：斜査中)

第8図　出土遺物実測図

ある。5は須恵器甕の体部で、口縁部および底部が欠損している。6は須恵器甕の口縁から肩部にかけての破片である。口径26cmを測る。7は土師器甕で、口径9.4cm、器高10.4cmを測る。外面はハケメ、内面はヘラケズリがみられる。8は土師器甕の口頸部で、口径9.9cmを測る。9は土師器甕で、口径10cm、器高11.4cmを測る。外面にハケメ、内面はヘラケズリがみられる。10は土師器小型壺で、口径8.1cm、器高9.1cmを測る。外面にハケメ、内面はヘラケズリがみられる。須恵器の杯蓋・杯身（1～3）は、陶邑編年ＴＫ23～47並行期に属すると考えられる。また、土師器の小型甕（7～10）は5世紀後半から5世紀末頃と判断される。

2トレンチで出土した遺物は11～19の江戸時代の陶器や土師質土器、土製品、銭貨、銅製品がある。11～13は第6図第8層除去後の遺構精査中に出土した。14～19は第8層の淡茶灰色粘質土（江戸時代の遺物包含層）から出土した。11は土師質皿で、口径9.9cm、器高3.4cmを測る。12は土師質大皿の口縁部片で、口径25.6cmを測る。13は陶器の擂鉢の底部片である。14・15は土製鈴で、内部には音を鳴らすための玉が入っている。16は土製人形の破片と思われる。17は手づくねのミニチュア土器である。18は寛永通寶で、19は銅製の煙管の雁首部分である。

3トレンチで出土した遺物は20～24である。20は溝ＳＤ302出土の平瓦の破片であるが、近世の遺物と混在して出土している。内外面に布目の調整がみられる。21～24は土坑SK305から出土した。21は須恵器蓋、22は須恵器杯Ｂで高台径は8.8cmを測る。23は土師器皿の口縁部で、24は土師器甕の口縁部片である。内外面ともに磨滅が激しいが、外面の一部にハケメがみられる。

4．まとめ

今回の調査は、調査対象地内に3か所のトレンチを設定して発掘調査を実施した。1トレンチでは長岡京期と断定できる遺構・遺物がなく、後世に削平を受けた可能性が考えられる。一方、長岡京造営以前の古墳時代中期と判断される2条の溝ＳＤ101・107を検出し、この2条の溝から一辺約12mの方墳を復原することができる。墳丘および埋葬施設は既に削平されたが、深く掘り込まれた周溝だけが残っていたものである。出土遺物から5世紀後半から5世紀末頃と考えられる。調査地周辺では開田古墳群の存在が知られており、そのなかの1基と捉えることができるため、開田古墳群東羅支群11号墳と命名された。

今回の調査成果により、古墳時代中期と考えられる古墳が新たに確認できたため、周辺に同時期の古墳が存在する可能性が高くなった。

注1　松井忠春ほか「長岡京跡右京第781次・神足遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第112冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2004

注2　戸原和人「長岡京跡右京第863次（7ANKSM-15地区）・開田遺跡・神足遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第119冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2006

注3　同古墳群の調査には以下のものがある。
岩崎誠「長岡京跡右京第496次東羅古墳群発掘調査報告」（『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第7集（財）長岡京市埋蔵文化財センター）1996

4.長岡京跡右京第996次(7ANGHK-3地区)・上里遺跡発掘調査報告

1．はじめに

今回の調査は、外環状線第５工区地方道路交付金(街路)業務委託に係わり、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。調査地は、長岡京跡では右京二条三坊三町と西二坊大路路面の推定地にあり、上里遺跡の南東端に位置する。周辺の調査では、近年、京都市西京区上里遺跡の調査で、縄文時代晩期の竪穴式住居跡群や土器棺墓及び弥生時代前期の竪穴式住居跡群などが検出され、弥生文化受容期の様相を解明する大きな成果が得られている。また、本調査地の北西の長岡京市立第十小学校建設に伴う右京第22・25次調査では、縄文時代後期や弥生時代前期の土坑が検出され、隣接する右京第986次調査では弥生時代前期～中期とみられる流路が確認されている。前述した右京第22・25次調査では、古墳時代の旧流路を検出しているほか、杭で護岸された溝群により区画された奈良時代の水田・畠地と推定される遺構が確認され、「弟国」と書かれた墨書土器が出土した。さらに、同調査では、四町規模の宅地から長岡京期の遺構としては最大級の規模の南北に廂がつく掘立柱建物跡が検出され、また当調査地北側の右京第547次調査では、「安麻呂此□」と人名が墨書された須恵器が出土している。

本報告は、高野が執筆した。なお、国土座標の表示は、日本測地系の第Ⅵ座標系を用い、長岡京の条坊表記は、山中章氏が提示した条坊表記によるものである。(注1)

調査にあたっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、地元自治会をはじめ多くの方々にご指導・ご協力をいただいた。記して、謝意を表する。

現地調査責任者　調査第２課長
肥後弘幸

調査担当者　調査第２課主幹調査第３係長事務取扱

第１図　調査地周辺主要遺跡分布図
(国土地理院　1/25,000　京都西南部)

石井清司

同　調査員　高野陽子

調　査　場　所　長岡京市井ノ内上印田地内

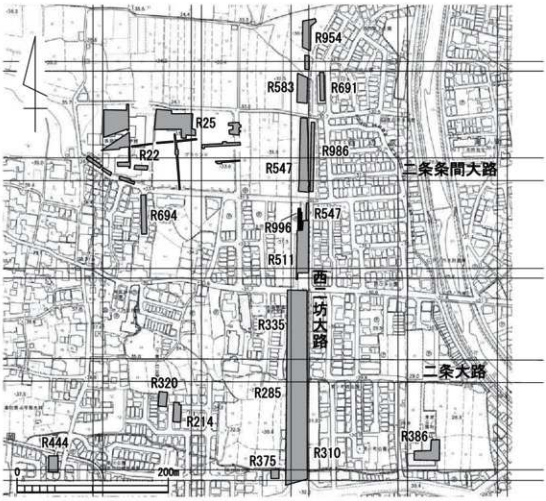
現地調査期間　平成22年４月26日～６月５日

調　査　面　積　125㎡

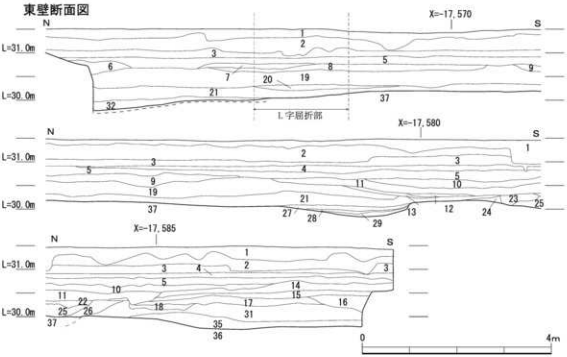
２、土層（第３図）

本調査では、昨年度調査された右京第986次調査の南隣接地にあたる路線区内に、南北に長い調査区を設定した。調査区は、長岡京跡では西二坊大路と二条条間大路の交差点をやや南に下がる地点である（第２図）。調査は、客土を中心とした表土および旧耕作土を重機により除去したのち、人力で掘削・精査を行った。

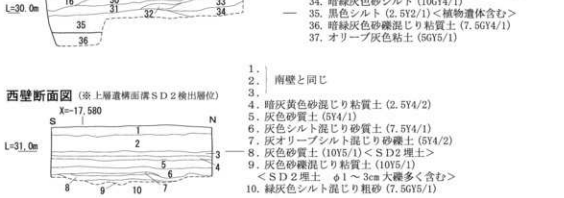
調査区は、北部から南部に向かってわずかに下がる地形である。客土を除去したのち、地表下約0.4m、標高約31m前後で、旧耕作土とみられる灰色粘質土（第３層）を検出した。基準層位は、その下層に黄褐色粘質土（第５層）、暗オリーブ灰色砂混じり粘質土（第10層）が約20cmの厚さで堆積する。南部を中心に、さらに、標高約30.3～30.5mでは、オリーブ黒色砂質土（第14層）が堆



第２図　調査地周辺調査トレンチ配置図



1．灰色砂礫土＜客土 砕石含む＞
2．黄褐色砂礫土（2.5Y5/4）＜φ2～5cm 大の礫＞
3．灰色粘質土（旧耕作土）（7.5Y4/1）
4．にぶい黄褐色粘質土（2.5Y6/4）
5．黄褐色粘質土（2.5Y5/3）
6．黄灰色砂礫土（2.5Y4/1）＜φ2～3cm 大の礫＞
7．灰色オリーブシルト混じり砂質土
8．黄灰色中砂（2.5Y5/1）
9．灰色砂礫土（7.5Y4/1）
10．暗オリーブ灰色砂混じり粘質土（2.5GY4/1）
11．オリーブ黒色砂混じり粘質土（5Y3/2）
12．黒色シルト（2.5Y6/4）
13．暗オリーブ色（5Y4/3）
14．オリーブ黒色砂質土（5Y3/2）
15．灰オリーブ砂礫混じり粘質土（7.5Y4/2）
＜鉄分多く含む＞
16．灰色砂礫土（7.5Y4/1）＜φ2～5cm 大の礫＞
17．オリーブ黒色シルト混じり中砂（7.5Y4/1）
18．暗オリーブ灰色砂礫土（2.5GY4/1）
19．灰色粗砂（5Y4/1）＋オリーブ褐色（2.5Y4/4）
20．暗オリーブ褐色砂礫土（2.5Y3/3）
＜φ1～2cm 大の礫＞
21．オリーブ黒色シルト（5Y3/2）
22．暗オリーブ灰色シルト混じり砂質土（5GY4/1）
23．オリーブ灰色砂混じり砂質土（5GY5/1）
24．暗オリーブ灰色細砂（2.5GY4/1）
25．暗オリーブ灰色シルト混じり砂質土（5GY4/1）
26．オリーブ黒色細砂（5Y3/2）
27．黒色シルト（10YR2/1）
28．黒褐色粘質土（10YR3/2）＜植物遺体多く含む＞
29．黒褐色粘質土（10YR2/2）＜植物遺体多く含む＞



30．暗緑灰色粗砂（10G4/1）
31．灰色砂礫土（7.5Y4/1）
＜φ礫2～3cm 大の礫＞
32．黒色シルト（2.5Y2/1）＜植物遺体多量に含む＞
33．暗緑灰色シルト混じり砂質土（7.5GY4/1）
34．暗緑灰色砂シルト（10GY4/1）
35．黒色シルト（2.5Y2/1）＜植物遺体含む＞
36．暗緑灰色砂礫混じり粘質土（7.5GY4/1）
37．オリーブ灰色粘土（5GY5/1）

1．
2．　南壁と同じ
3．
4．暗灰黄色砂混じり粘質土（2.5Y4/2）
5．灰色砂質土（5Y4/1）
6．灰色シルト混じり砂質土（7.5Y4/1）
7．灰オリーブシルト混じり砂礫土（5Y4/2）
8．灰色砂質土（10Y5/1）＜ＳＤ２埋土＞
9．灰色砂礫混じり粘質土（10YS/1）
＜ＳＤ２埋土　φ1～3cm 大礫多く含む＞
10．緑灰色シルト混じり粗砂（7.5GY5/1）

第３図　調査地土層断面図

積し、奈良時代以降の上層遺構の基盤面として、灰色粗砂（第19層）を約40cmの厚さで確認した。さらに、下層では、オリーブ黒色シルト（第21層）を20～30cmの厚さで確認し、次いで植物遺体を多く含む黒色シルト（第32層）を検出した。黒色シルトは、北部では下層堆積土の基盤となるオリーブ灰色粘土（第37層）の直上に形成されている。

暗オリーブ灰色砂混じり粘質土（第10層）は、中世の包含層であり、瓦器片が出土した。その下層のオリーブ黒色砂質土には瓦器片は含まれず、奈良時代から平安時代前期とみられる須恵器片が出土している。この層位には、古墳時代後期の須恵器、さらに弥生時代前期の長原式とみられる深鉢小片も出土している。

3．検出遺構

主な検出遺構は、上層遺構では、奈良時代に掘削されたとみられる溝ＳＤ１・ＳＤ３のほか、奈良～平安時代と推定される土坑ＳＫ７・ＳＫ６、砂礫の集積である整地面ＳＸ５、中世以降の自然流路とみられる流路ＳＤ２・ＳＤ８などがあげられる。さらに、こうした上層遺構の基盤である灰色粗砂を除去した下層で、流路ＳＤ10、落ち込みＳＸ11等を検出した。下層面では、後述のように遺構内を含めて遺物の出土はなく、時期は不明である。

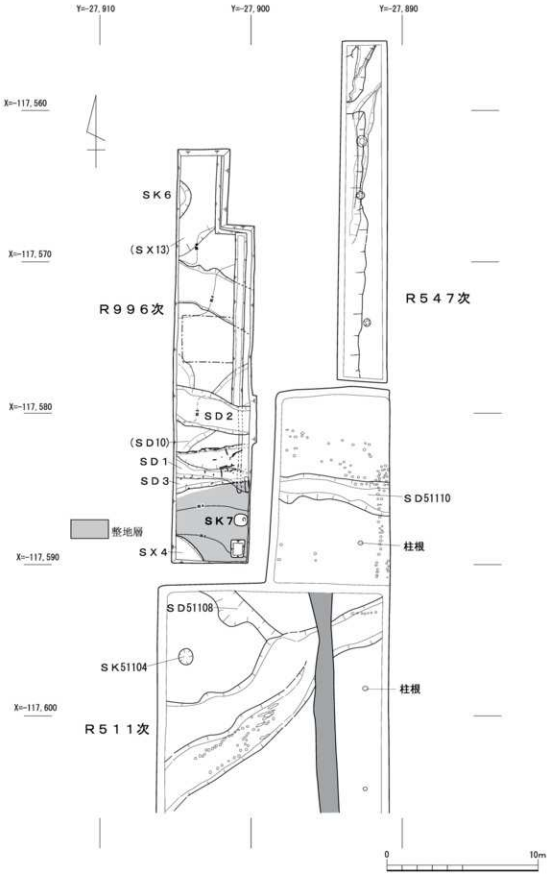
１）下層遺構（第５図右）

流路ＳＤ10・落ち込みＳＸ11　下層面の中央で検出した。検出面の標高は約30.0mである。ＳＤ10は、幅2.5～2.7m、深さ0.2～0.3mを測る。ＳＤ10は、西へ向けて落ち込み状に広がり、この部分をＳＸ11とした。ＳＸ11は、南北方向の流路の可能性がある。溝内からは加工された杭の可能性がある木製品１点が出土したが、土器が含まれていないため、時期は不明である。時期判定の参考資料とするため溝内の炭化物を加速器による放射性炭素年代測定を実施したところ、おおよそ縄文時代晩期前葉頃の測定年代を得ている。(注2)

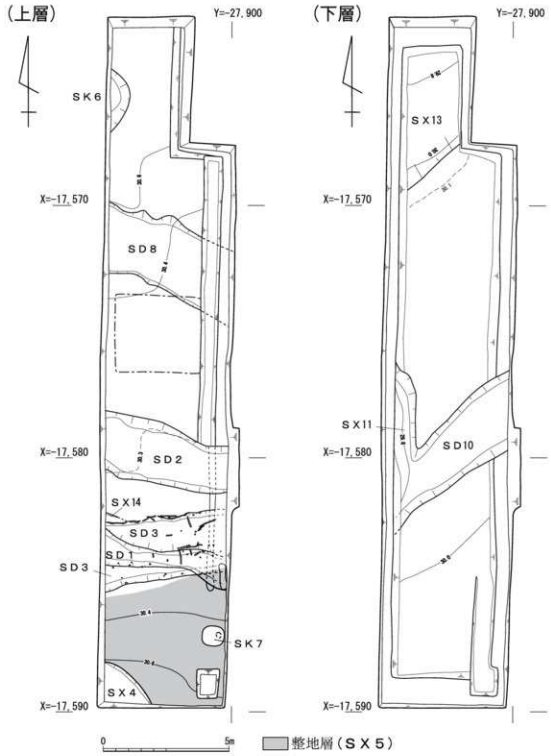
落ち込みＳＸ13　調査区北部で検出した落ち込みである。北へ向けて緩やかに傾斜し、調査区外へ延びるとみられる。遺物は出土せず、時期は不明である。

２）上層遺構（第５図左）

溝ＳＤ３　調査区南部で検出した東西方向の溝である。幅2.4～2.5m、深さ約0.5mを測る。東西方向に均等な溝幅をもって掘削され、溝の両側では杭列を検出したが、一部横板材や棒材が確認できることから、これらを側板として護岸したとみられる。南辺は、２段状に緩やかに立ち上がり、それぞれ杭列を確認した。南側の杭列は数本が遺存するにすぎないが、建設当初の溝幅のラインを示すものであろう。溝幅はやや小さく改修され、北側杭列が設けられたとみられる。杭には、角材や丸太材が用いられている。溝の北辺では、北西隅で木杭により固定された槽が出土した。木製槽は半裁され、把手を東側に残したもので、設置点を取水口として、その水量の調整に用いたと推定される（木組遺構ＳＸ14）。出土遺物はいずれも細片で時期の確定は難しいが、おおよそ奈良時代に帰属する須恵器・土師器片が出土している。過去の周辺の調査では、右京第22・25次調査で同様の構造をもつ奈良時代の溝群が検出されていることから、長岡京造営の前段



第４図　調査地周辺主要遺構分布図

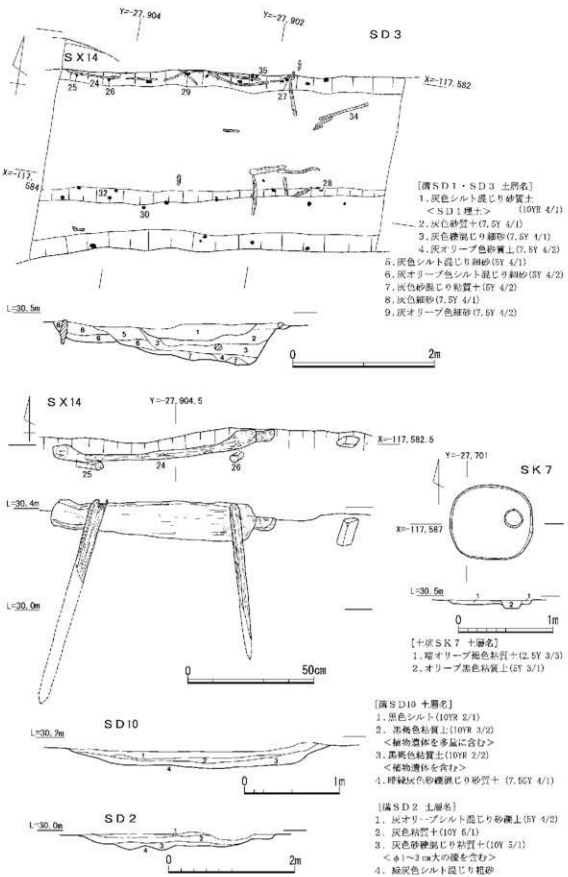


第５図　調査地検出遺構配置図

階に掘削された溝である可能性が高い。

溝ＳＤ１　ＳＤ３と重複して検出した幅0.6～1.2m、深さ約0.2mの浅い溝である。東に隣接する右京第511次調査で検出したＳＤ51110に繋がるとみられる（第４図）。溝内からは、わずかながら須恵器片が出土し、溝ＳＤ３が埋没する過程で形成された溝とみられる。

土坑ＳＫ７　南部で検出した方形の浅い土坑である。一辺約0.8m、深さ約0.1mを測る。柱穴



第6図 溝SD1・2・3・10土層実測図、土坑SK7・溝SD3内護岸施設実測図

の可能性があるが、隣接地の調査を含め関連する遺構は確認されていない。

土坑ＳＫ６　調査区北部の西壁に接して検出した土坑である。半円形状に一部を検出し、直径2.4m、深さ0.2mを測る。土坑内から、須恵器片が出土している。

落ち込みＳＸ４　調査区南西隅で検出した。南西に向け傾斜するが、調査範囲内では立ち上がりを確認していない。右京第511次調査のＳＤ51108の延長部にあり、その一部と推定される。

砂礫集積ＳＸ５　調査区南部で検出した砂礫層の広がりである。φ３～５cm前後の多量の砂礫を含む粘質土層の広がりで、堅く平坦な面を形成し、整地された層とみられる。調査区南端から約5.3mにわたって、調査区幅（５m）で検出している。ＳＤ１南部上層にも一部堆積し、溝の廃絶後に整地されたとみられる。この整地面直上では、布目瓦片３点や瓦器片が出土し、平安時代後期から鎌倉時代にかけて形成された整地層と推定される。

流路ＳＤ２　調査区中央で検出した。幅1.6～1.9m、深さは約0.15mを測る。遺物は出土していないが、層位的に中世以降に形成された自然流路とみられる。

流路ＳＤ８　北部で検出した幅2.5～3.0m、深さ約0.1mの流路である。ＳＤ２よりもさらに上層でされることから、中近世の自然流路と推定される。

４．出土遺物

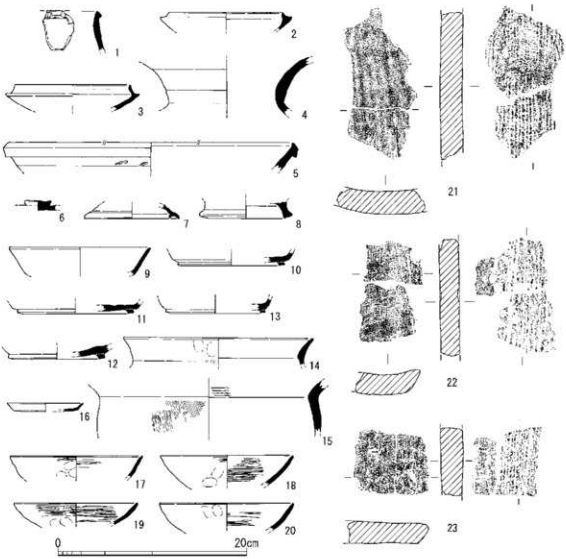
１）土器・瓦（第７図）

出土遺物は整理箱にして、３箱である。

１～12・14・15は、杭列のある溝ＳＤ３から出土した。１～５は、ＳＤ３が形成される以前の時期のもので、いわゆる混じり込みの遺物である。１は、突帯文土器の小片で、口縁部上端に突帯がめぐる弥生時代前期の長原式の深鉢の口縁部とみられる。２・３は、古墳時代の須恵器杯身である。杯身は立ち上がりが低いもの（２）と高いもの（３）があり、おおよそ陶邑窯ＴＫ43～209型式に帰属する。４・５は、須恵器甕の口頸部で、５の甕には外面に刺穴痕がみられる。

ＳＤ３に伴う土器群は、６～12・14・15であり、いずれも小片ではあるが、おおよそ奈良時代に帰属する資料である。６～12はいずれも須恵器で、６は杯Ｂ蓋の宝珠つまみの一部であり、７は内面に返りをもつ杯蓋である。口径10.0cmを測る。８は、壺脚部とみられる。９は杯Ａの口縁部で、口径15.0cmを測る。10・11は高台付きの杯Ｂの底部である。10は底径約11.3cm、11は12.3cmを測る。12は高台付きの壺底部とみられ、底径10.2cmを測る。14の土師器甕は、口径20.0cmを測る。15の土師器甕は、口縁端部を欠くが、口縁内面に粗いハケ調整が認められる。

13・16・17～20は、包含層中から出土した。13は、調査区南部から出土した。須恵器杯Ｂの底部とみられ、おおよそ長岡京期から平安時代前期に帰属する。16は、調査区南部上層で出土した中世後期の土師器皿である。口径8.0cmを測る。17は、北部の上層遺構の精査中に出土した瓦器椀で、14.0cmを測る。18は、砂礫集積（整地層）ＳＸ５の上面で出土した瓦器椀で、口縁端部に段をなし、内面のミガキは密に施されるもので、12世紀前半の所産とみられる。19・20の瓦器椀はいずれも南部包含層中から出土した。



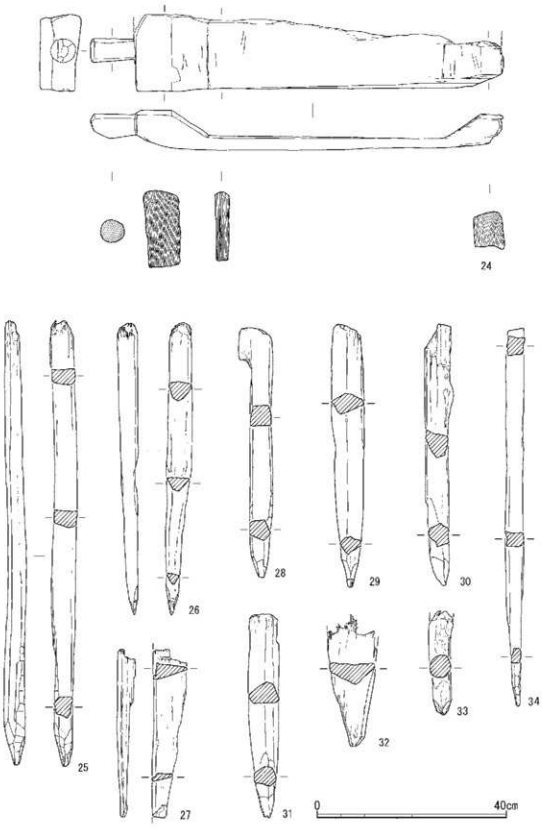
1～12・14・15．ＳＤ３　17．ＳＫ６　18．ＳＸ５　13・16・19・20．包含層

第７図　出土遺物実測図（１）

21～23の瓦は、砂礫集積（整地層）ＳＸ５の検出面で出土した平瓦である。凸面に縦縄目タタキが施され、内面には布目圧痕がみとめられる。22・23の周縁と端面は、ケズリ調整して仕上げている。いずれも２次的な焼成を受けた痕跡がみられる。

２）木製品（第８図）

木製品には、槽１点と杭がある。24～34は、いずれも溝ＳＤ３および木組遺構ＳＸ14から出土した。１は、横木取りの材を刳り抜いて作られた槽の一部である。刳り物として作られた容器であるが、その中央を裁断して、細長い長方形の材として整え、溝の取水口に転用材として用いられていた。長辺の両側面のうち、片面は鋭利な刃物によって裁断されているが、もう一方は、破損および腐食が進行している。短辺の片側には把手が作り出され、把手部を含めた全長は86.5cm、残存幅は16.0mを測る。槽は内外面とも底部は平坦に薄く作られ、厚さ3.0cmを測る。また短辺側の周縁部は厚く仕上げられ、厚さ7.2cmを測る。把手の断面は径約５cmの円形を呈し、



第8図　出土遺物実測図（2）

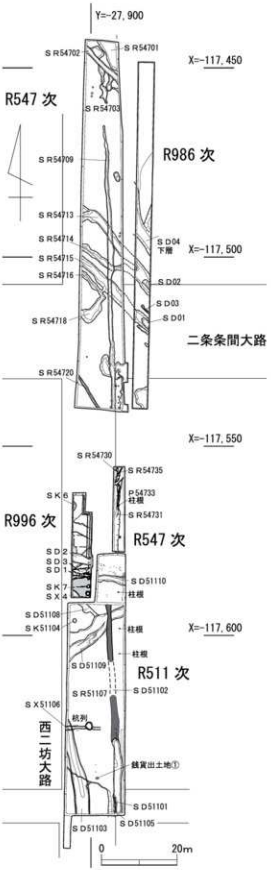
基部側が先端部に比べ細く削り出されている。内面周縁部には、工具による加工痕がみとめられる。

杭は約35点が出土し、このうち10点を図化した。杭のうち、25・26の杭は、槽を固定していた杭である。25は、断面が方形の角材で、長さ94cmを測る。26は、断面が扇形をなし、丸太材を縦割りしたもので、長さ62cmを測る。27～34の杭は、いずれもＳＤ３の杭列を構成するものである。杭列に用いられていた杭は、約８割以上が丸太材を縦割りした断面扇形の杭（29・30・31・32）であるが、一部に丸太杭（33）や、断面方形に加工された角杭（34）のほか、引戸の敷居の一部を転用した杭（27）がある。

５．まとめ

今回の調査では、杭を打ち込み護岸した奈良時代と推定される溝や、平安～鎌倉時代にかけての土坑や流路、砂礫が集積した整地面などを確認した。また、下層調査では、植物遺体を多く含む流路跡を検出した。

調査地は、上里遺跡の遺跡範囲の南東隅にあたる。京都市域にあたる上里遺跡北部を中心とした近年の調査では、縄文時代晩期から弥生時代前期の竪穴式住居跡や土坑等の遺構が相次いで調査され、本調査地北西約250mの地点の右京第22・25次調査でも縄文時代後期と弥生時代前期の遺構や遺物が確認されている。また調査地北に隣接する右京第986次調査では、縄文時代晩期の土器、弥生時代前期から中期初頭の流路や土器が確認され、東に隣接する右京第547次調査でも、若干の土器を含む弥生時代前期と推定される流路が検出されている。今回の調査で検出した下層遺構の流路ＳＤ10は、右京第547次調査の北東から名正方向に検出された流路の南西延長部となる可能性が高い。出土遺物は、植物遺体のなかに、加工した杭の可能性



第９図　周辺調査地主要遺構分布図

があるもの１点が出土したにとどまるが、溝ＳＤ03からは弥生時代前期の長原式の突帯文土器が出土している。こうしたことから、流路ＳＤ10については弥生時代前期の溝の可能性が高いと考えられる。ちなみに、流路内に堆積する黒色シルト土壌内の炭化物を対象とした加速器による放射性炭素年代分析では、縄文時代晩期前葉頃の測定年代が出ている。(注3)

歴史時代の遺構では、杭列で護岸した東西方向の溝ＳＤ３は特に注目される遺構である。溝内から出土した土器は、わずかであるがおおよそ８世紀代に帰属するものが多い。この溝と構造的に類似する杭列で護岸された溝は、本調査地の北西約250mの右京第22次・25次調査の溝ＳＤ2514～ＳＤ2519があり、本調査地の南約40m地点の第511次調査において検出された東西方向の杭列ＳＸ51106も同様の溝の護岸とみられる。後者は、遺物は乏しいながらも長岡京期から平安時代前期の遺構とされるが、前者は奈良時代の溝と確認されているものである。調査地周辺では、調査地南約200mの右京第310次調査の更ノ町遺跡では、二条大路と西二坊大路の交差点で奈良時代の石敷施設を伴う井戸が検出され、木簡、「園司」・「園宅」・「園」などの墨書土器がまとまって出土し、一帯が天皇家供御の薬園である「乙訓園」に関係すると推定されている。(注4) 前述した右京第22次・25次調査の杭列溝群は、長方形に区画された水田や畠地を区画する溝とされ、「乙訓園」に関係する生産遺構の可能性が指摘されている。(注5) 本調査で検出した溝ＳＤ３も、出土遺物は細片であり時期の詳細な把握は難しいが、多くはおおよそ奈良時代に帰属するとみられ、長岡京造営の前段階に掘削された同様の性格をもつ溝となる可能性が高いものである。

今回の調査では、長岡京期の確実な遺構は確認していない。調査地は、東西条坊路である二条条間大路と南北条坊路である西二坊大路との交差点の南にあたる。二条条間大路は、右京域ではこれまで確認されていないが、西二坊大路は、調査地南方約50mの地点で、右京第511次調査において、東側溝と推定される溝が検出され（第９図ＳＤ51105）、右京第335次・310次調査などでも確認されている。他の大路が約24mであるのに対して路面幅は狭く、13～19mほどの規模とされる。調査区は、この路面範囲のなかにおさまると推定される（第９図）。調査区南部では、砂礫が集積する整地層を確認しているが、整地面直上から瓦器片が出土したことから、平安時代後期以降に造成された整地面と推定され、長岡京期の路面に対応する遺構は確認できなかった。調査区周辺は、小畑川に向かって下降する扇状地の先端にあり、条坊路の路面は、周辺調査でも確認された洪水層や後世の遺構により削平されたと推定される。

注１　山中章「古代条坊制論」（『考古学研究』第38巻第４号）1992

注２　分析は㈱加速器分析研究所に委託し、C^{14}年代は、2980±30yrBPの測定値を得た（1311calBC－1211calBC 95.4 %）。おおよそ縄文時代晩期前葉頃に相当する。

注３　注２に同じ

注４　石尾政信・土橋誠「長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第45冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1991

注５　山本輝雄『長岡京跡右京第22・25次調査報告書－長岡京跡右京二条三坊二・七町、上里遺跡－』（財）長岡京市埋蔵文化財センター　1997

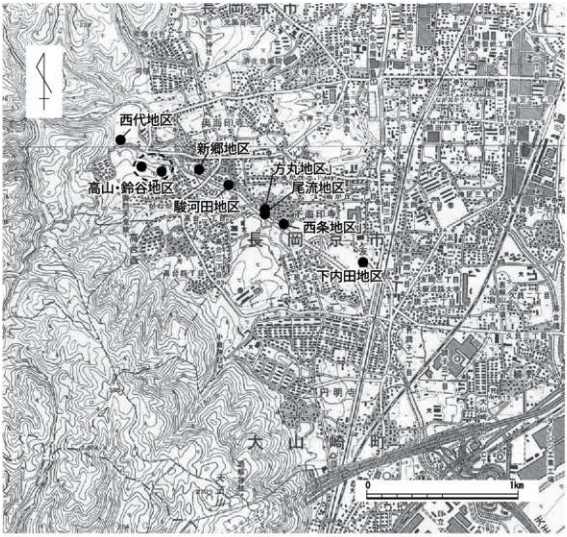
5.京都第二外環状道路関係遺跡
平成21年度発掘調査報告

長岡京跡右京第973次・下海印寺遺跡、西代遺跡、
奥海印寺遺跡、下海印寺遺跡

1．はじめに

今回の発掘調査は、京都第二外環状道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査で、国土交通省近畿地方整備局の依頼によって実施したものである。京都第二外環状道路は京都西南部の渋滞を緩和する目的で計画され、長岡京市域では、長岡京市南部を東西に流れる小泉川にそって山間部に至るルートが予定されている。

小泉川は現在、河川改修によって直線状に流路が変更されているが、本来は大きく蛇行しなが



第１図　調査地位置図(国土地理院　1/25,000　京都西南部・淀)

ら流れていた。そのため河川の氾濫によってすでに遺構面が削平されている可能性も想定できた。一方、このルートは桓武天皇によって造営された長岡京の南部に当たる地域を横切ることになる。10年しか存続していなかった長岡京の宮域から最も離れた南部の様子を明らかにすることによって、都造営の状況を明らかにすることも期待された。

発掘調査の必要なか所を特定することを目的に、平成15年から部分的な調査を先行して、調査可能な地域から順次行うと共に、面的な調査が必要な地域には発掘調査を実施してきた（岩松ほか2005、岩松ほか2006、岩松ほか2007、戸原・岩松・竹井2008、中川・大本2009、中川・戸原・岡崎ほか2009）。

調査対象地域は長岡京市調子から奥海印寺の広範囲にわたり、平成21年度には10地点を対象に調査を実施した。これらの地点は長岡京跡のほか、伊賀寺遺跡、下海印寺遺跡、奥海印寺遺跡、鈴谷遺跡、西代遺跡にも該当する。本報告書は長岡京跡右京第973次調査・下海印寺遺跡および西代遺跡、奥海印寺遺跡、下海印寺遺跡に関するものである。

平成21年度には、第970・983・988次調査も実施したが、別途報告する予定である。鈴谷遺跡の調査分は、平成22年度調査とあわせて平成23年度に報告する予定である。調査費用は国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所が負担した。なお、京都第二外環状道路に伴う発掘調査は、別途、西日本高速道路株式会社及び京都府負担でも実施している。

本報告書は戸原・増田・中川・竹井・黒坪・木村が執筆し、執筆か所については文末に明示した。遺物写真については当調査研究センター調査第１課資料係田中彰が撮影した。本報告書で使用した国土座標は現地記録も含め第Ⅵ系（日本測地系）を使用した。土層および遺物の色調は農林

付表　調査地一覧

番号	長岡京右京次数	地区名	所　在　地	調査期間	調査面積	長岡京以外の遺跡	備　考
1	970	西条地区 OSJ-5	長岡京市下海印寺西条	H21.4.8 ～ 22.2.19	4000㎡	下海印寺遺跡	別途報告
2	973	尾流地区 OOR-9	長岡京市下海印寺尾流	H21.6.2 ～ 10.13	1000㎡	下海印寺遺跡	
3		方丸地区 OHR-15	長岡京市下海印寺方丸	H21.6.8 ～ 10.13	540㎡		
4	京外	新郷地区 PNG-4	長岡京市奥海印寺新郷	H21.6.3 ～ 6.19	150㎡	奥海印寺遺跡	
5	京外	駿河田地区 PSG-3	長岡京市奥海印寺駿河田	H21.8.18 ～ 8.24	30㎡	下海印寺遺跡	
6	京外	西代地区 PNI-2	長岡京市奥海印寺西代	H21.10.5 ～ 10.23	370㎡	西代遺跡	
7	983	下内田地区 OOD-11	長岡京市下海印寺下内田	H21.9.8 ～ 10.13	100㎡	伊賀寺遺跡	別途報告
8	988	下内田地区 OOD-12	長岡京市下海印寺下内田	H21.10.22 ～ 22.1.22	800㎡	伊賀寺遺跡	別途報告
9	京外	高山地区 PTY-2	長岡京市奥海印寺高山	H21.10.19 ～ 12.22	600㎡	鈴谷遺跡	別途報告
10	京外	鈴谷地区 PSN-1	長岡京市奥海印寺鈴谷	H22.1.18 ～ 2.25	250㎡	鈴谷遺跡	別途報告

水産技術会議監修の『新版標準土色帖』を用いた。

現地調査・報告に当たっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター職員のご指導とご助言をいただいた。地元下海印寺、奥海印寺の各自治会をはじめ地元の方々から多大なご協力を得ました。記してお礼申し上げます。

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸

調 査 担 当 者　調査第２課第２係長　森　正

主任調査員　引原茂治・戸原和人・竹原一彦・増田孝彦・中川和哉・森島康雄

専門調査員　竹井治雄・黒坪一樹・岡崎研一

主査調査員　柴　暁彦

調査員　奈良康正・村田和弘

調　査　場　所　付表参照

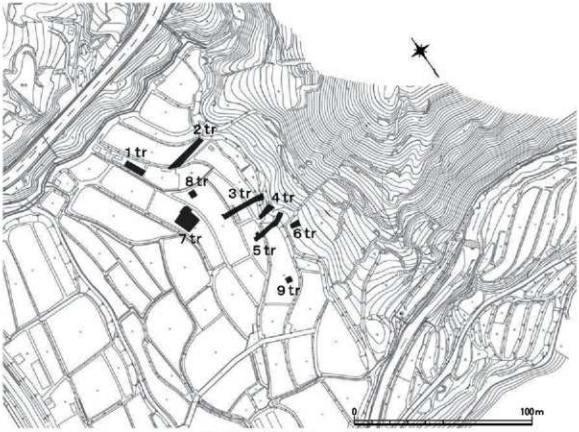
現地調査期間　付表参照

調　査　面　積　付表参照

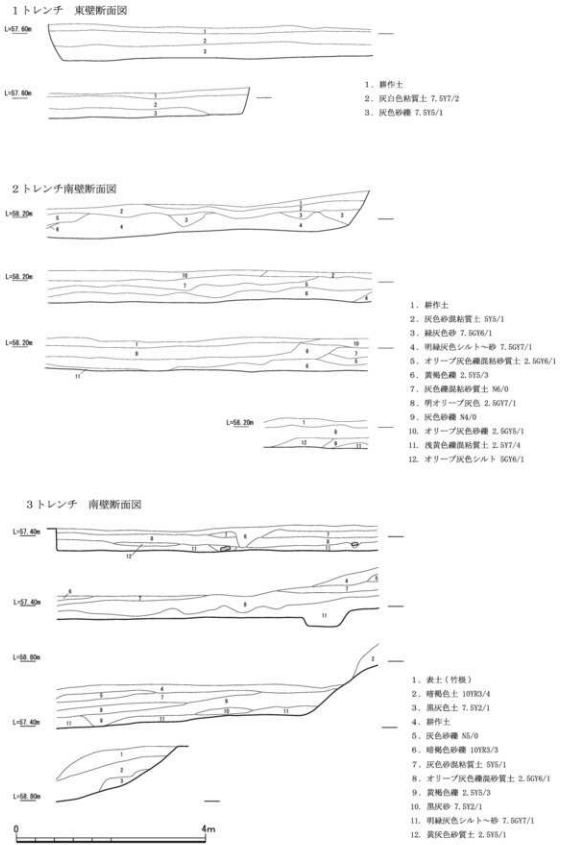
２．西代遺跡(西代地区)

１)はじめに

西代遺跡は、長岡京市奥海印寺西代に所在する遺跡で、長岡京市教育委員会による試掘調査(木

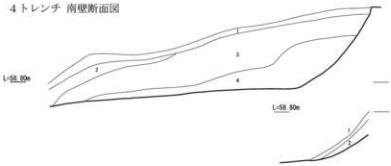


第２図　西代地区トレンチ配置図



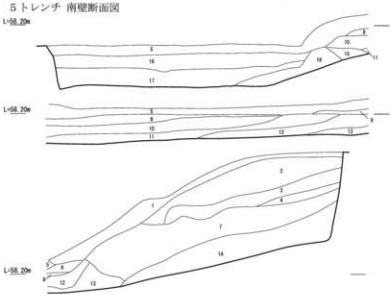
第３図　西代地区１～３トレンチ土層断面図

4トレンチ 南壁断面図



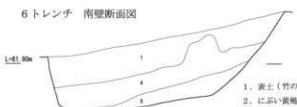
1．表土
2．灰黄褐色礫混り土 10YR6/2
3．黄褐色土 10YR5/6
4．暗灰黄色土 2.5Y4/2

5トレンチ 南壁断面図



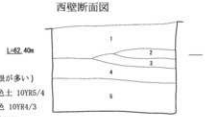
1．表土
2．暗褐色礫混り土 10YR3/3
3．褐灰色土 10YR4/1
4．浅黄橙色土 10YR8/3
5．耕作土
6．にぶい黄褐色土 10YR4/3
7．暗灰黄色土 2.5Y4/1
8．にぶい黄橙色土 10YR6/3
9．淡黄色粘質土 2.5YR8/3
10．暗灰黄色礫混り土 2.5Y4/2
（表面マンガン）
11．黒褐色礫混り土 10YR3/1
12．灰褐色礫混り土 10YR4/1
13．黄褐色礫混り土 2.5Y5/1
14．黒褐色土 2.5Y3/1
15．黄灰色土 2.5Y4/1
16．褐灰色土 10YR5/1
17．褐灰色土 10YR4/1
18．暗オリーブ灰色土 5GY4/1

6トレンチ 南壁断面図

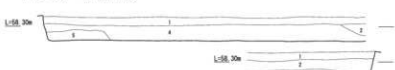


1．表土（竹の根が多い）
2．にぶい黄褐色土 10YR5/4
3．にぶい黄褐色 10YR4/3
4．黄褐色土 10YR5/6
5．明黄褐色土 10YR7/6

西壁断面図



7トレンチ 東壁断面図

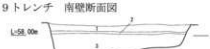


7トレンチ 東壁断面図
1．耕作土
2．明黄褐色灰混り土 10YR6/6
3．褐灰色土 10YR6/1
4．明黄褐色粘質土 10YR6/6
5．暗褐灰色土 10YR4/1
6．明黄褐色粘質土 10YR6/8

8トレンチ 南壁断面図

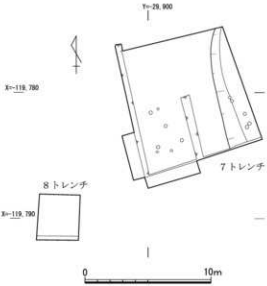
8トレンチ 南壁断面図
1．耕作土
2．明黄褐色粘質土（灰色混り）10YR6/8

9トレンチ 南壁断面図



9トレンチ 南壁断面図
1．耕作土
2．床土
3．灰黄褐色土（上面マンガン）10YR4/2

第4図 西代地区4～9トレンチ土層断面図



第５図　西代地区７・８トレンチ平面図

村2010）によって、古代から近世にかけての遺物が出土する遺跡として周知されている。その位置は、長岡京市の平野部では最西部、西山の丘陵との境部にあたり、比較的平坦な緩斜面を呈していた。小泉川右岸に位置し、現状は水田として利用されていた。平地と縁辺の山裾部分が、南北方向に直線状であるところが見てとれることから、人工的な土地の改変が想定された。

２）調査概要（図版第１～３）

今回の調査は、工事計画範囲内において９か所のトレンチを設定して実施した。掘削順に１～９トレンチと名づけた。調査地は水田として利用されている緩斜面と、段を形成して竹藪として利用されている丘陵部分に分かれる。３～６トレンチの丘陵部では、近世以降の竹藪盛土が厚く堆積していた。水田に利用されていた部分では、耕作土および床土を除去した直下で、更新世に堆積した大阪層群の水性粘土を検出した。大阪層群の上面は平坦で、その上に床土・耕作土が水平に堆積していることから、水田の開墾に伴って大阪層群まで削平されたと考えられる。

調査の結果、９か所のトレンチのうち４・５・７・８トレンチの４か所については、古代から近世にかけての土器片（須恵器・土師器・瓦器等）が出土したが、いずれも本来の地層や遺構からの出土ではなかった。

また、７トレンチにおいては水田耕作土の直下が地山であり、ここで複数の柱穴を検出した。柱穴の広がりを確認するためにトレンチの拡張を行ったものの、それ以上の柱穴の広がりは認められなかった。柱穴の深さは約５cm程度と浅いことから、本来の遺構面はかなりの厚さにわたって削平を受けているものと判断される。遺物の出土はなく、時期は不明である。

３）小結

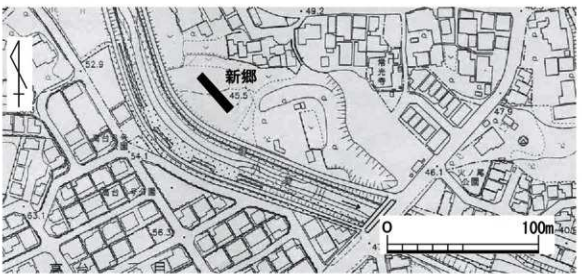
当該地点の調査では、古代から近世にかけての土器類が出土したが、農地造成のため旧来の地表面（遺構面）が大きく削平を受けており、若干の柱穴を確認するにとどまった。また、丘陵斜面の盛土中からも遺物が出土していることから、かつては丘陵部分から緩斜面部まで何らかの遺構が存在していたと想定できる。なお、当地域の遺構面を大きく削平させたと推定される大規模な農地造成については、現在の耕作者の記憶にはない、とのことである。

３．奥海印寺遺跡（新郷地区）

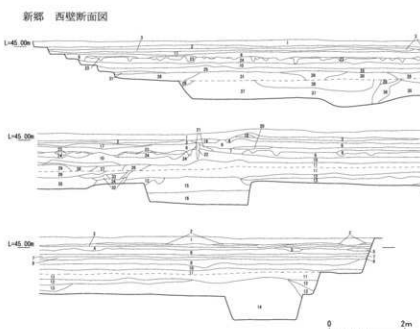
１）はじめに

調査地は、長岡京市奥海印寺新郷に所在する。小泉川左岸に立地し、標高約45.5mである。周辺の地形から旧流路と考えられるくぼみ等が観察できた。調査前は水田として利用されていた。

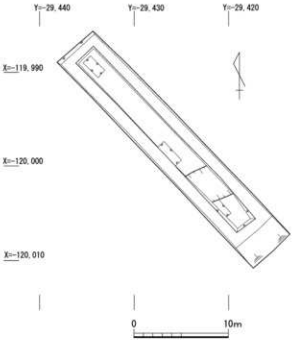
新郷地区は奥海印寺遺跡に近接した地域にあり、良好な遺構が遺存している可能性が想定された。一方、小泉川に近接しているために遺構面が流出している可能性も想定され、まず、遺構面の有無を確認することを目的にトレンチを設定した。



第６図　新郷地区トレンチ配置図



第７図　新郷地区トレンチ土層断面図



第８図　新郷地区トレンチ平面図

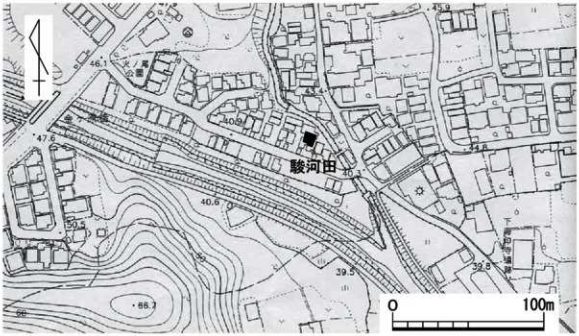
新郷地区では短辺５ｍ、長辺30ｍの長方形のトレンチを設定し、平成21年６月３日から同年６月19日まで現地調査を実施した。

２）調査概要（図版第４）

地表下50cmまでは耕作や整地に伴う水平堆積層で、それ以下はラミナ状の堆積を示す礫・砂を主体とする河川堆積物であった。調査トレンチは面的には地表下1.8mまで掘削し、部分的に2.7mまで掘り下げたが安定した地層は検出できなかった。第８図に示した河川跡はある時期の１つの流路（第７図37・38層に対応）であるが、遺物は含まれていなかった。耕作土および床土から染付の茶椀片が出土したが、河川堆積層からの遺物の出土はなく、堆積時期は不明である。

３）小結

新郷地区では耕作関連の土層のすぐ下に河川の氾濫による堆積土があり、良好な遺構面を検出できなかった。土層の堆積状況からは、水田耕作に伴う堆積土を除くと、この地区が離水していた可能性は極めて低いと考えられる。



第９図　駿河田地区トレンチ配置図

4．下海印寺遺跡（駿河田地区）

1）はじめに

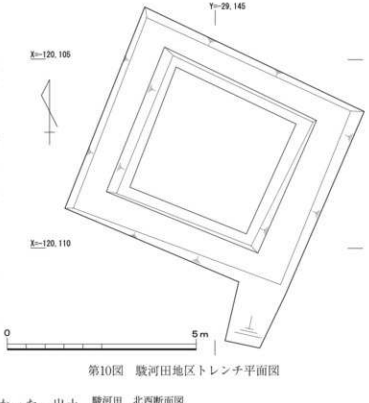
駿河田地区の発掘調査地は、小泉川左岸の長岡京市奥海印寺駿河田に所在する。調査前は宅地であった。5ｍ×6ｍのトレンチを設定し、30㎡の発掘調査を平成21年8月18日から同年8月24日まで実施した。

2）調査概要（図版第4）

地表下80cmまでは宅地造成に伴う盛土層で、次に数枚の砂質土～粘砂質土層が続き、地表下1.3mで河川堆積と判断される砂礫層に到達した。砂礫層を50cmほど掘り下げたが、層相に変化は認められなかった。出土遺物はない。

3）小結

駿河田地区では、包含層および遺構面は確認できなかった。この地域は小泉川とその支流に囲まれた地域であることから、川の氾濫による堆積物と考えられ、安定した遺構面や遺物が確認できなかったものと推測される。



第10図　駿河田地区トレンチ平面図

第11図　駿河田地区トレンチ土層断面図

（中川和哉）

5．長岡京跡右京第973次（7ANOOR-9・OHR-15地区）・下海印寺遺跡（尾流・方丸地区）

1）はじめに

調査は、小泉川の河岸段丘上に位置する尾流地区と、その北側に広がる低位段丘上の縁辺部の方丸地区で実施した。この両地区の間は道路により隔たれており、最大3ｍの段差がある。両地区とも、縄文時代～近世にかけての集落跡である下海印寺遺跡に含まれている。周辺では多くの調査が行われ、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が多数検出されている。また、長岡京条坊復原によると、尾流地区のみが京内にあたり、右京七条四坊および西四坊大路が想定されるところである。

本調査報告は、現地調査担当者が分担して執筆し、文末に文責を記した。また、出土遺物のうち、縄文土器については京都大学大学院生木村啓章が、石器については当調査研究センター専門

調査員黒坪一樹が執筆した。

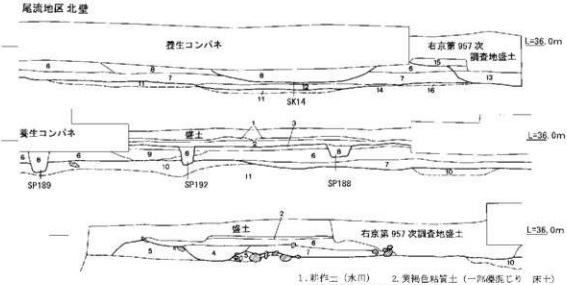
（増田孝彦）

2）尾流地区（第12・13図、図版第５）

（1）はじめに

尾流地区では、調査地北側の平成20年度に実施した右京第957次調査で、縄文時代後期の土坑５基、弥生時代後期の竪穴式住居跡１基、古墳時代後期の土坑１基、奈良時代の掘立柱建物跡３棟、土坑１基が検出されている。南東側は右京第862・870次調査が実施されている。隣接して実施したこれらの調査トレンチに接続するように、今回のトレンチを設定した。現地調査は平成21年６月２日から10月23日までを要した。調査面積は1000㎡である。

第12図　尾流・方丸地区調査トレンチ配置図



第13図　尾流地区トレンチ北壁土層断面図

調査地の現況は水田であり、小泉川の河岸段丘上に立地し、北側の高位部分と南側の一段やや低い水田部からなる。耕作土の下には薄い床土（第２層黄褐色粘質土）、その下層は遺物包含層である第４層黒褐色砂質土が約10cm堆積し、これを除去すると基盤層である第６層の灰褐色砂質土となり、この層の上面で弥生時代・古墳時代の遺構を検出した。トレンチ中央の北壁で検出したＳＢ184は、遺物包含層である第４層の黒褐色砂質土より柱穴が掘り込まれていた。

弥生時代・古墳時代遺構面の下層は、縄文土器を含む第６層灰褐色砂質土の遺物包含層を全面で確認し、河岸段丘南端部付近で基盤層となる第７層暗茶褐色礫混じり砂質土ないし第５層暗灰褐色粗砂礫（河川堆積）より縄文時代後期の土坑・柱穴を検出した。５層の暗灰褐色粗砂礫（河川堆積）は、西側から流れ込んできたような堆積状況であり、層が波をうって堆積し、その凹み部分には淡茶褐色ないし灰褐色の砂質土が縄文土器とともに堆積していた。

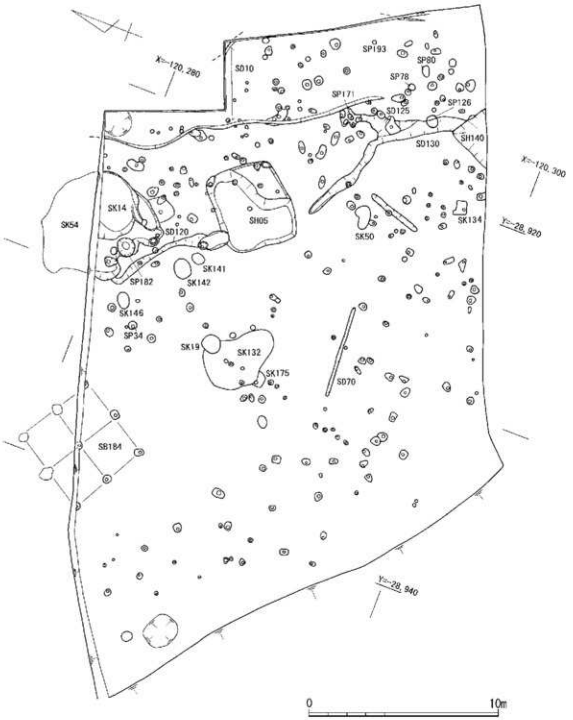
（増田孝彦）

(2) 検出遺構

①弥生時代～奈良時代（第14図、図版第５）

検出した遺構は、竪穴式住居跡２基、溝３条、土坑８基、その周辺で多くの柱穴を検出したが、掘立柱建物跡は１棟しか復原することができなかった。

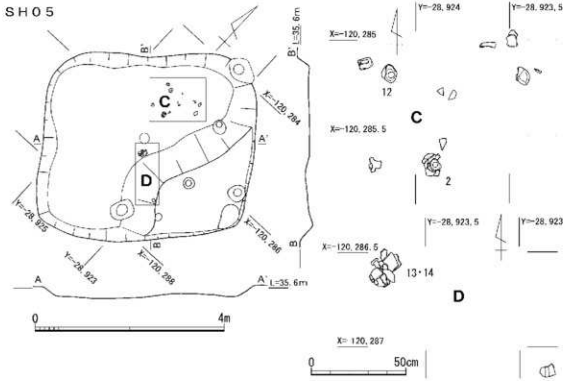
竪穴式住居跡ＳＨ05（第15図、図版第５）　トレンチ中央やや北東側で検出した。土坑である可能性も残るが竪穴式住居跡と判断した。方形の平面形をなし長辺4.2m×短辺3.8m、深さ0.25m



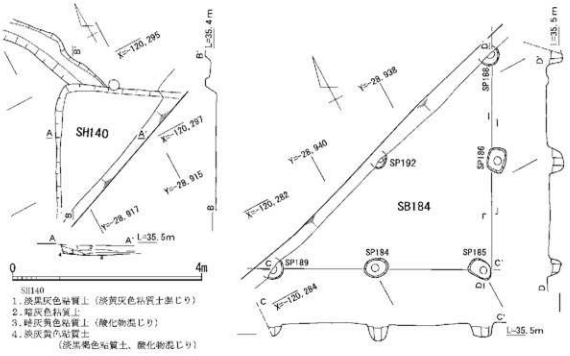
第14図　尾流地区上層遺構平面図

を測る。住居東側約1/3はベッド状に一段高くなる。検出面においては、多くの礫が混入しており、この礫は床面直上にまで及ぶ部分もある。礫を除去した段階で多くの小片化した弥生土器甕・高杯類が床面上で出土した。床面には柱穴等は認められなかった。弥生時代後期に位置づけられる。

竪穴式住居跡ＳＨ140（第16図、図版第６）　調査地東南端、右京第862次調査地との境付近で検出した。溝ＳＤ130と切り合い関係を有し、この住居跡が先行する。住居北角付近のみを検出したもので、南西辺３ｍ×北東辺２ｍ、深さ0.22ｍを検出した。右京第862次調査地ではこの住



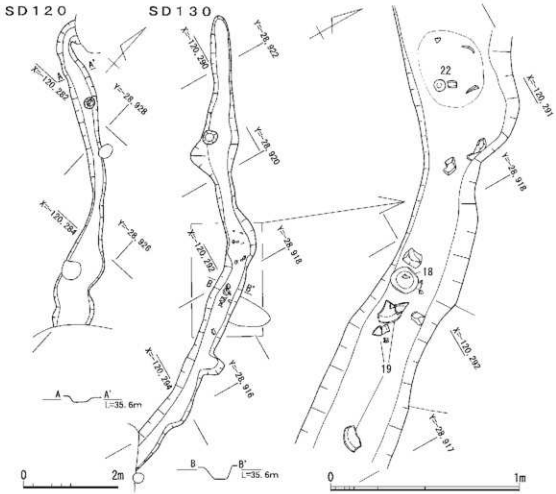
第15図　尾流地区竪穴式住居跡ＳＨ05実測図及び遺物出土状況図



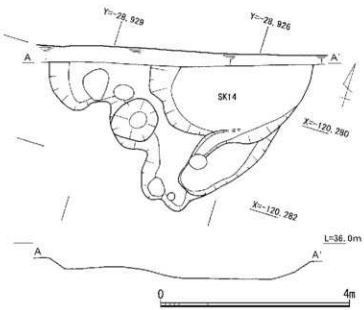
第16図　尾流地区竪穴式住居跡ＳＨ140・掘立柱建物跡ＳＢ184実測図

居の延長部が検出されていないので、水田の開墾や耕作等により削平されたものと考えられる。柱穴は、残存している範囲の中では検出されなかった。内部より小片化した須恵器片・土師器片が少量出土した。古墳時代後期に位置付られる。

掘立柱建物跡ＳＢ184（第16図、図版第６）　４トレンチ中央部の北西壁寄りで検出した。建物



第17図　尾流地区溝ＳＤ120・ＳＤ130実測図及びＳＤ130遺物出土状況図

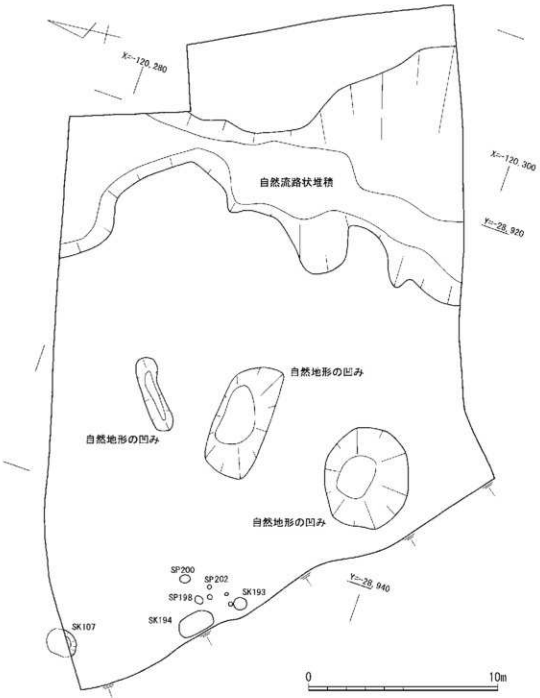


第18図　尾流地区土坑ＳＫ14実測図

の約半分は、右京第957次調査地で柱穴が検出されている。建物は２間×２間の規模を持ち、柱間間隔は2.2～2.3mである。柱穴の掘形は楕円形ないし方形に近いもので、長径ないし長辺0.5m×短径ないし短辺0.4m、深さ0.3～0.35mを測る。柱穴内より小片化した須恵器・土師器が出土した。古墳時代後期に位置付づられる。

土坑ＳＫ14（第18図、図版第６）

右京第957次調査地で検出されていたＳＫ54の延長部分に当たる。溝ＳＤ120と切り合い関係を



第19図　尾流地区下層遺構平面図

有し、先行する。検出長5.5m、幅2.8mを測り、中央部分が長さ2.4m、幅1.6mにわたり、0.19mの深さで一段低くなる。検出面からの深さは、最深部で0.36mを測る。埋土中より縄文土器、石錐・滑石製管玉、須恵器・土師器の小片などの遺物が出土した。古墳時代後期に属すると考えられる。

土坑ＳＫ50　竪穴式住居跡ＳＨ05の南西側で検出した。楕円形の平面形を呈し、長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。土師器・須恵器の小片が出土し、古墳時代後期と判断される。

土坑ＳＫ132　竪穴式住居跡ＳＨ05の西側で検出した。いびつな楕円形の土坑で、長軸4.1m、

短軸2.5m、深さ0.1mの浅い土坑である。遺物の出土は土師器・須恵器の小片のみで、古墳時代後期と判断される。

溝ＳＤ120・130（第17図、図版第７）　土坑ＳＫ14から竪穴式住居跡ＳＨ05の北辺付近にまで通じ、そこでいったん途絶える。ＳＨ05の南辺の南側で溝の掘削が認められ、そこから竪穴式住居跡ＳＨ140まで延びる。埋土及び断面形状などから一連の溝と考えられる。切り合い関係で見るとＳＨ140・ＳＫ14に後出する。竪穴式住居跡ＳＨ05より西側は検出長6.5m、溝幅0.3～0.8m、深さ0.18mを測る。東側は検出長10m、幅0.4～0.6m、深さ0.25mを測る。東側で検出した溝中央部付近で須恵器(18・19)、土師器(22)がまとまって出土している。古墳時代後期に属する。

溝ＳＤ10　トレンチ北東側、台地の裾部分に沿って検出した浅い溝である。検出長17m、幅５m、深さ0.2m。溝東端では、ほとんど痕跡が認められなくなる。縄文土器・須恵器・土師器など小片化した遺物とともに須恵器杯蓋(16・17)が出土した。段丘の裾を巡る位置にあるが、その性格は不明である。

溝ＳＤ70　トレンチ中央部で検出した浅い東西溝である。溝幅0.3m、深さ0.07m、検出長５mで埋土中より須恵器杯(15)が出土した。奈良時代の遺構と考えられる。

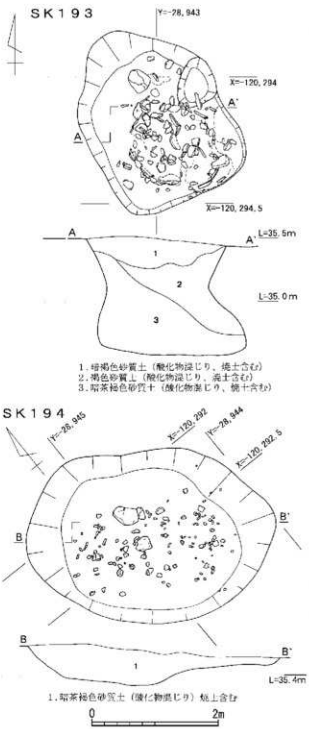
②縄文時代（第19図、図版第７・８）

下層遺構面では、縄文時代後期の土坑２基、その周辺で柱穴６か所を検出した。

土坑ＳＫ193（第20図、図版第８・９）

南西端で検出したもので、長軸0.8m、短軸0.68mの楕円形を呈し、検出面からの深さ0.45mを測る。検出面から底面まで多くの縄文土器片が出土するとともに、底面より石皿・敲石が出土した。縄文時代後期に属する。

土坑ＳＫ194（第20図、図版第９）　土坑ＳＫ193の西側で検出した。いびつな方形



第20図　尾流地区土坑ＳＫ193・194実測図

の平面形を呈し、検出長２m、同幅1.2m、土坑北寄りは一段深くなる。検出面からの深さ58.2cmを測る。壁面の観察により、水田の開墾時に大きく削平を受けている。土坑ＳＫ193同様、検出面から底面まで縄文土器小片が出土した。縄文時代後期に属する。

柱穴群　調査トレンチの西辺で検出したもので、径20～50cm、深さ10～20cmの規模を有する。埋土中から、縄文土器小片が出土している。

（増田孝彦）

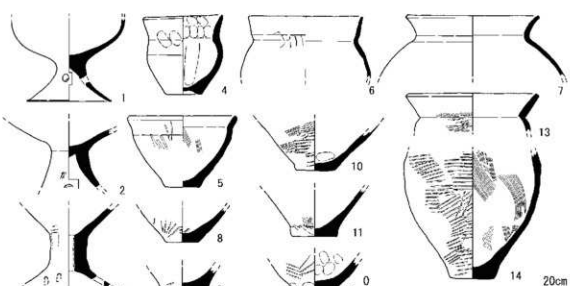
(3)出土遺物（第21～27図、図版第13～16）

調査では、縄文時代の土坑、弥生時代の竪穴式住居跡、古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝、奈良時代頃の溝などの遺構から遺物が出土するとともに、包含層中からも多くの遺物が出土した。出土遺物の総量は、整理箱で13箱である。

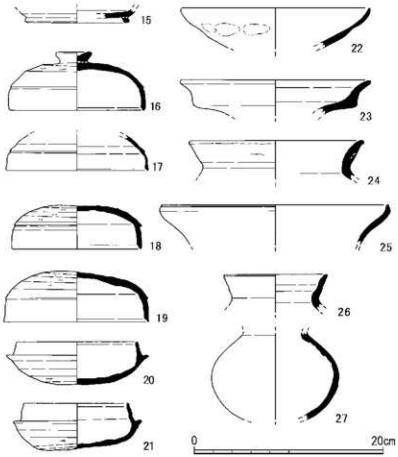
①弥生時代～奈良時代（第21～23図、図版第13）

１～14は、竪穴式住居跡ＳＨ05から出土した土器である。１・２は高杯である。脚部に円形の透かし穴がある。３は器台である。脚部に連続した円形の透かし穴が認められる。４は小型の壺で、口径8.15cm、器高8.35cmを測る。口縁内面と頸部外面に指オサエの痕跡が残る。５は「く」の字状口縁をもつ小型の鉢である。６は口縁部が屈曲してやや直立気味に立ち上がる甕で、口径11cm測る。７は「く」の字状に外反する口縁部をもつ。８～12は壺・甕の底部である。８～10・12は外面にタタキを施す。11は外面はハケ調整である。13・14は同一個体と考えられるもので、13は口径15.4cm、頸部外面に横方向のタタキ、口縁部はハケ調整を施す。14は、体部下半部は斜め方向のタタキを施し、上半部は横方向のタタキを施す。

15は須恵器杯Ｂである。輪状の高台が底部端近くに付される。ＳＤ70より出土した。16・17はＳＤ10より出土した。16はツマミの付く須恵器有蓋高杯の蓋である。口径14.1cm、器高6.2cmを測る。焼成が良好で淡灰色を呈する。17は須恵器杯蓋である。天井部がやや丸みを帯び、口縁基

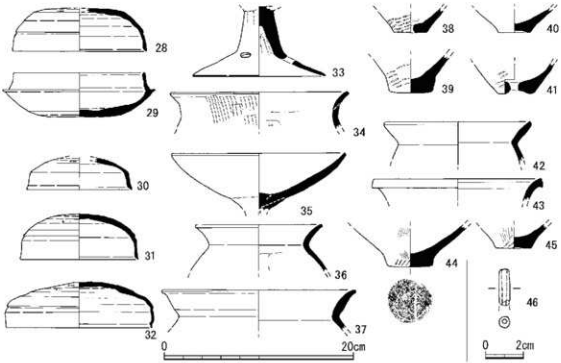


第21図　尾流地区出土遺物実測図（１）



第22図　尾流地区出土遺物実測図（2）

部に一条の凹線が巡る。18～23、25～27はＳＤ130より出土した。18・19は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。口縁基部に一条の凹線が巡る。19はやや大型で口径15.1cm、器高5.4cmを測る。天井部中央付近にヘラ記号「⊗」が認められる。20・21は須恵器杯身である。丸みを帯びた底部と内側上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面はヘラ削りを施す。22は土師器杯で、口径19.8cmを測る。23は土師器高杯の杯部である。口縁が



第23図　尾流地区出土遺物実測図（3）

大きく外反する。口径19.8cmを測る。25は甕で、口縁端部を上方につまみ上げる。26・27は土師器の丸底壺である。26は口径10.8cmを測る。24は甕で、「く」の字状に外反する口縁部をもちＳＫ142より出土した。

28・29はＳＫ14より出土した。28は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。口縁基部に一条の凹線が巡る。口径14cm、器高4.6cmを測る。29は須恵器杯身である。丸みを帯びた底部と内側上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面はヘラ削りを施す。口径13.6cm、器高4.7cmを測る。30～32は須恵器杯蓋である。口縁基部に一条の凹線が巡る。32は大型のもので口径15.2cm、器高4.85cmを測る。30はＳＰ34、31はＳＰ171、32はＳＰ126から出土した。33は土師器高杯脚部である。脚部に円形の透かし穴が認められる。ＳＫ14より出土した。34は土師器甕である。頸部から口縁部にかけてハケ調整で、ＳＫ14より出土した。35は高杯杯部である。口径18.1cmを測り、ＳＰ193より出土した。36・37・42は「く」の字状に外反する口縁部をもつ甕である。36はＳＰ193、37はＳＫ142より出土した。38～40、44・45は弥生土器壺・甕の底部である。38・39は外面に斜め方向のタタキを施し、44は外面底部付近はタタキ、上方はハケ調整を施す。45は外面底部付近はタタキ、上方はミガキ調整を施す。41は有孔鉢底部片である。42は弥生土器甕である。43は弥生土器大型壺の口縁部である。口径35.4cmを測る。38はＳＫ14、39はＳＫ132、40はＳＰ80、41はＳＰ78、42～45は包含層中より出土したものである。46はＳＫ14より出土した緑色凝灰岩製管玉で灰白色を呈し、残存長1.9cm、最大孔径2.7mmを測る。片側穿孔である。

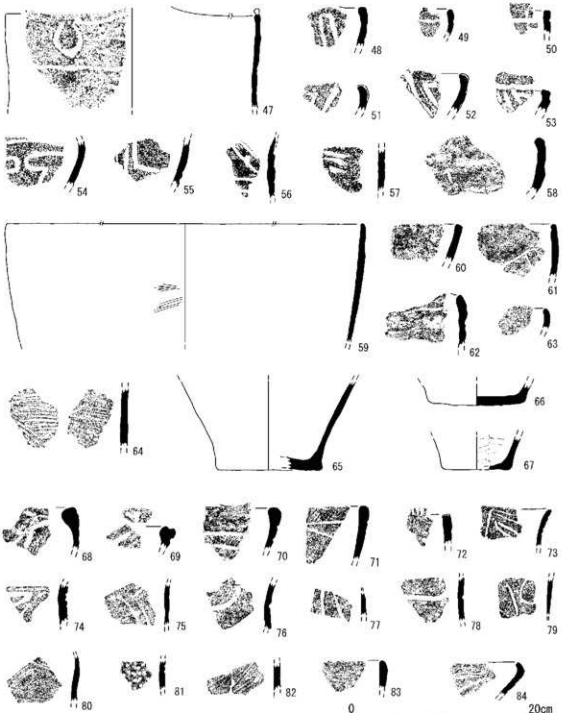
（増田孝彦）

②**縄文土器**（第24・25図、図版第14・15）

本遺跡で出土した縄文土器はその特徴から後期中津式から四ツ池式が中心であると考えられる。一部包含層から後期以前の遺物が出土している。全体的に摩滅を受けた遺物が多く詳細が明瞭に分かる遺物は少なかった。

土坑ＳＫ193　ＳＫ193出土土器は後期初頭中津式の所産であると考えられる。47～53は深鉢の口縁部である。47は口縁部に文様帯を持つ。ゆるい波状口縁を持ち、口縁に沿って二本の沈線で区画され、波底部に「U」字型のような文様を持つ。48は口縁が内湾し、ゆるい波状口縁となるものである。49は平縁のもので、口縁が内湾している。口端に沿って横走する一条の沈線を持ち、その下部にＲＬ縄文が充填されている。50も平縁のもので、口端部が面取りされている。49と同様、口端下に一条の沈線が横走し、その下部にＲＬ縄文が充填される。51～53は口縁が内湾し、非常に緩く波状口縁になっているものである。２～３条の斜行沈線によって文様が描かれていると考えられる。51・52は沈線間に縄文が充填されている。54～57は深鉢の胴部である。54はスペード形が垂下した文様を持っており、縄文が充填されている。中津式の特徴を持つものと考えられる。55は２条の沈線によって区画された文様を持つものと考えられ、２沈線間に縄文が充填されている。56は２条以上の沈線によって描かれたものであり、斜行線と横走線を組み合わせた文様となっている。57は文様がはっきりしないが、３本の短い沈線が描かれている。58～62は無文

の深鉢である。58は波状口縁の無文土器である。口縁から一段下がった所に薄くナデの痕跡を残す。成形・調整時の指痕を残し、器面に凹凸がある。59は角閃石を多量に含む胎土である。62は波状口縁の無文深鉢である。器面は巻貝条痕により調整され、58と同様、成形・調整時の指痕により器面に凹凸がある。63は口縁が内湾する無文の鉢であると考えられる。64は無文深鉢の胴部片である。外面は巻貝条痕を顕著に残す。内面は条痕調整後にナデが施される。65～67は深鉢の

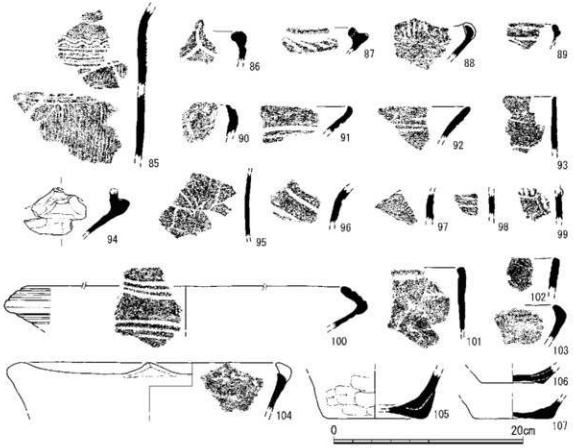


第24図　尾流地区出土遺物実測図（4）

底部である。

土坑ＳＫ194　ＳＫ194出土土器はおおよそ後期初頭中津式の所産であると考えられる。68～73は深鉢の口縁部である。68は口縁内側が肥厚するもので、波状の口縁となる。69は波状口縁の波頂部の一部と考えられ、波頂部内側に短い沈線が描かれる。70は口縁部が肥厚し、口端から一段下がったところに横走する２条以上の沈線が描かれるものである。71は口縁部がやや肥厚し口端から一段下がったところに沈線が巡り、その間にＬＲ縄文が充填される。72は口端部に刻みを持つものである。73は直線の沈線の区画内に弧状の沈線２条が描かれる。74～79は有文深鉢の胴部片であり、沈線によって文様が描かれているものである。74は２条以上の沈線によって描かれる弧状の文様と、横走する沈線を組み合わせた文様と推定される。75は２条の弧状の沈線と斜行する沈線が描かれていると考えられる。76・77は弧状の沈線が描かれる。沈線間に縄文が充填されている。80～83は深鉢の胴部である。80は深鉢の胴部片である。外面に条線が施されている。81は刺突が施されている。摩滅が著しい。82は巻貝条痕を器面に残すものである。83は無文深鉢の口縁である。口縁部がやや肥厚している。84は口縁が内湾する浅鉢の口縁部片である。沈線による文様が描かれている。

包含層　中期～後期にかけての土器が出土している。85は里木Ⅱ式の深鉢胴部である。波状文の下に多条の直線文が描かれる。器面は摩滅しているが撚糸文が施されていると考えられる。86



第25図　尾流地区出土遺物実測図（５）

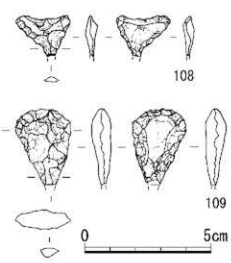
は波状口縁の波頂部である。口縁部に沿って沈線が描かれその下に縄文が充填されている。中津式であると考えられる。

87～90は四ツ池式の口縁部片であると考えられる。87は口唇部が内外に肥厚している。端部に凹線が巡っており、外側に斜刻が施される。88は波状口縁であり、口縁が内屈して肥厚する。波頂部に５条の縦方向の短沈線が描かれる。89は口縁部が肥厚するものである。90は摩滅が著しいが、緩い波状口縁の一部であると考えられる。波頂部の刺突とそこから延びる弧状の沈線によって描かれているものと考えられる。91～94は深鉢の口縁部である。91・92は平縁の深鉢であり、口端から一段下がったところに、３条の沈線が横走しているものである。福田KⅡ式か。93は沈線によって文様が描かれているものである。94は「く」字状に内屈する口縁を持ち、橋状の把手を持つものと考えられるが、一部欠損している。外面は無文である。95～99は深鉢の胴部片である。95は斜行した３条の沈線に、同心円状の３条の沈線が連結したものであると考えられる。他の土器に比べ沈線が細いものとなっている。96は斜行する沈線が描かれている。97は多重の条線が施されているものである。98は縦長の節の繊維痕の粗い縄文が施文されているものである。船元Ⅰ～Ⅱ式の特徴を持つものである。99は粘土紐を貼り付けたものに刻みを施したものである。100は「く」字型に内屈する口縁を持つ浅鉢である。口縁に沿って三本の沈線、また屈曲部から下がったところに三本の沈線が描かれている。福田KⅡ式であると考えられる。101～104は無文深鉢の口縁部片である。101・102は広口の深鉢である。101は口縁内面に凹線のようなナデが巡っている。103はやや口縁が肥厚し内湾している。104は波状口縁の無文深鉢である。105～107は底部である。106には一部７～８mmほどの礫が土器胎土に含まれている。107は角閃石を多量に含む胎土である。無文土器、底部もおよそ後期前半に含まれるものと考えられる。

（木村啓章）

③石器（第26図、図版第16）

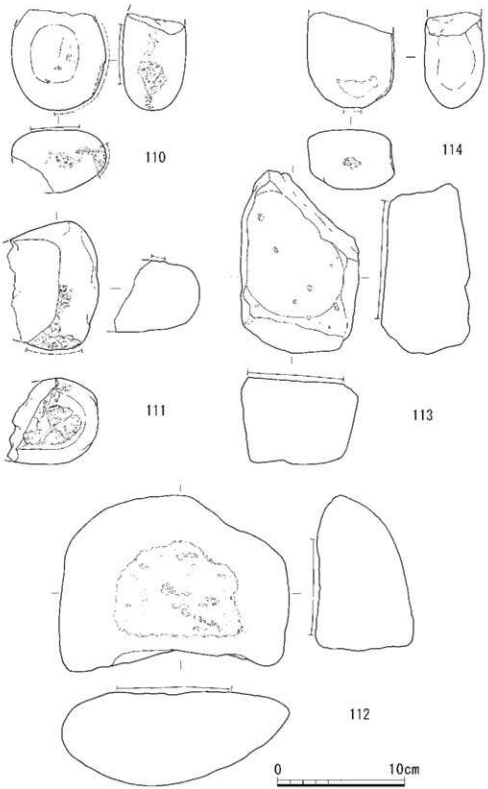
出土した石器の器種は、石錐２点、敲石類３点、台石または石皿２点である。



第26図　尾流地区出土遺物実測図（６）

刺突具である石錐（第26図108・109）は、いずれも先端部を欠損している。108は、三角形に整形されたつまみ部で、先端に向かう両側縁部を入念に調整している。残存長1.6cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm、重さ1.3ｇを測る。石材はサヌカイトである。109は、片面および周縁部を細かく剥離し、端部は丸く整形している。先端部に向かってひときわ細かな調整が認められる。残存長３cm、幅2.2cm、厚さ0.8cm、重さ4.8ｇである。石材はサヌカイトである。108はＳＫ14、109は包含層より出土した。

ここでの敲石類とは、打撃による敲打痕・剥離痕、打裂痕などをもつ敲石と、磨痕をもつ磨石を総称し



第27図　尾流地区出土遺物実測図(7)

ている(第27図110～112)。111・112はＳＫ193、110・113はＳＫ194、114は縄文土器包含層から出土した。110は、肉厚の楕円形礫を素材とする。片側表面にわずかな範囲に磨面が、さらに下端から右側縁にかけて小さく何度も打撃されたあばた状の潰れ痕がみられる。残存長7.7cm、幅

7.4cm、厚さ5cmを測り、重さ580gである。石材は砂岩である。111は、表面左側を大きく破損しているが、表面中央部に打撃による明瞭な凹みと、下端部にはさらに激しい打撃による剝落痕および潰れ痕が広く認められる。長さ10.3cm、幅6.8cm、厚さ6.7cm、重さ370gを測る。石材は礫岩である。114は、肉厚の素材で上半部を欠損している。下端部に比較的軽微な敲打痕（1×1.5cm）および右側面に滑らかな磨面をとどめている。残存長7.5cm、幅6.8cm、厚さ4.8cm、重さ340gである。石材は砂岩。

112は台石または石皿で、やや不整形な隅丸四角形を呈し、片側表面にのみ中央部がわずかにへこむ使用痕をとどめている。磨った形跡はなく、敲打によるものである。長軸17.9cm、短軸12.1cm、厚さ7.3cm、重さ2,240gである。石材は花崗岩である。113は台石または石皿で、厚みのある不定形な礫を素材に、上端は大きく打裂している。片側表面にのみ、磨ったり敲いたりして使用した可能性もあるが、明瞭ではない。残存長14.5cm、幅9.2cm、厚さ6.9cmを測り、重さ1,420gである。石材は砂岩である。

敲石類および台石または石皿の特徴から、石器製作などの工具的色彩が濃厚である。

（黒坪一樹）

(4)小結

尾流地区の調査では、縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代後期の遺構・遺物、奈良時代の溝・遺物を確認できた。縄文時代後期の土坑は、右京第957次調査でも確認している。縄文時代の下海印寺遺跡では、背後の台地上だけでなく河岸段丘上でも早くから生活の場として営まれており、その集落域が現在の小泉川付近まで広がっていることが明らかとなった。

長岡京期に関しては、確実に長岡京に比定できる遺構は検出されなかった。しかし、ＳＤ70からは奈良時代の遺物がわずかながらも出土したことから、周辺に長岡京期の遺構が存在する可能性がある。今回の調査は、各時代の集落の形成と場所、広がりを考えていく上で重要なものとなる。

（増田孝彦）

3）方丸地区

(1)はじめに（第28図、図版第10～12）

方丸地区の調査地は長岡京市下海印寺方丸に所在し、縄文遺跡として著名な下海印寺遺跡に含まれる。この地区では平成20年度に右京第947・956次調査を実施しており、第947次調査では縄文土器の出土する包含層および段丘の落ち込みを確認し、第956次調査では平安時代の土坑・溝を検出し、石製の跨帯（巡方）と馬と考えられる獣骨などが出土した。

今回の調査対象地は、里道等により調査地が３分割されているため、Ａ～Ｃトレンチを設定し調査を実施した。Ａ～Ｃトレンチは、第947・956次の調査トレンチを拡張する形で設定した。

調査対象地の現況は宅地跡であり、尾流地区よりも道路を挟んで4.5m上方の低位段丘縁辺部に位置する。調査は、まず、住宅の造成による盛土を重機により掘削した後、手掘りによる掘削を行った。現地調査の期間は平成21年６月８日～平成21年10月13日までを要し、調査面積は540

㎡である。調査には、調査第２課調査第２係係長森正と同主任調査員戸原和人、同増田孝彦、専門調査員竹井治雄があたった。

なお、各トレンチで検出した溝跡は同じ溝であると判断し、同一の遺構番号を付している。

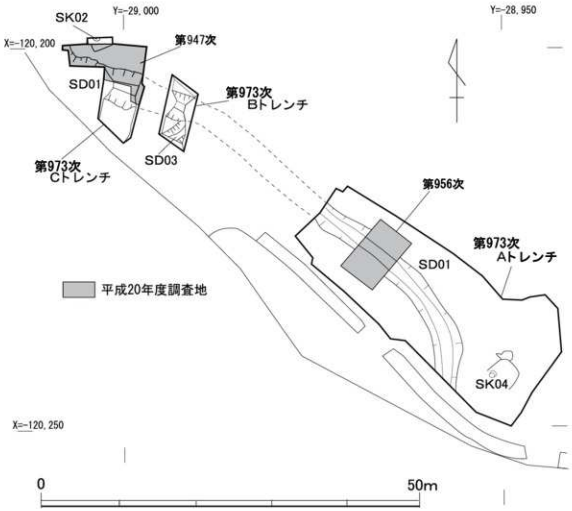
（戸原和人）

(2) 検出遺構

①Ａトレンチ（第28図、図版第10）

表土（盛土）下約50cmで基盤層である褐色砂礫土となり、この上面が遺構検出面となる。検出した遺構は、台地縁辺部に沿って西北西から東南東方向に延びる溝ＳＤ01、溝ＳＤ01の南端東側で土坑ＳＫ04を検出した。周辺ではピットを検出したものの、第956次調査で出土した跨帯や獣骨に関する遺構や遺物は検出しなかった。

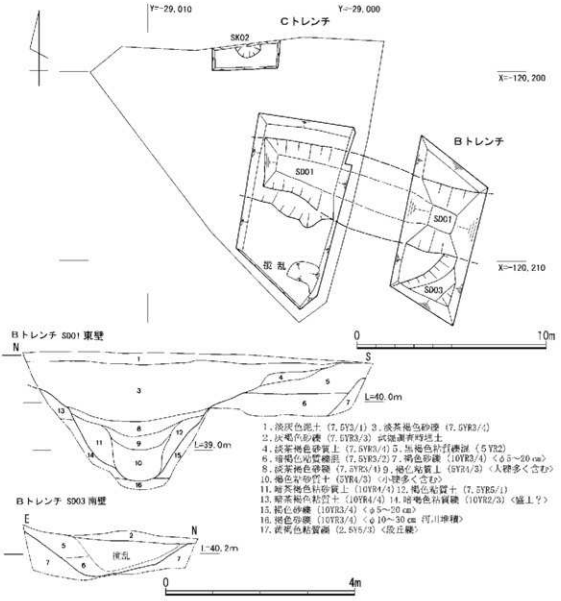
溝ＳＤ01（図版第10）　Ａ～Ｃトレンチのそれぞれで検出した溝で、同一の溝と判断されるものである。丘陵部の地形に沿って西北西から東南東に伸びており、Ａトレンチ南端部で南に屈曲する。総延長66mを検出した。また、Ｃトレンチ北西部では地形に沿って北方向に曲がると考え



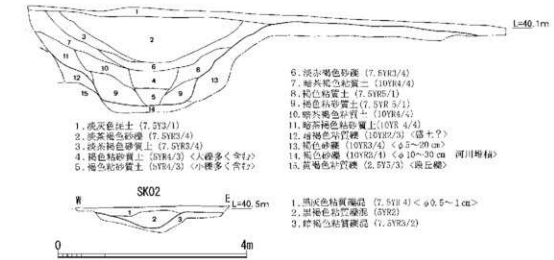
第28図　方丸地区トレンチ配置図

られる。溝の幅は遺構の遺存状態の最も良いBトレンチで3.5m、検出した深さは約1.7mを測るが、後述のように溝肩部は崩落した状況であることから、本来はさらに深いものであったと考えられる。

第29図のBトレンチで見ると、溝内は第3・4・8～12層の7層の土砂で埋まっている。ただし、最上層の第3層淡茶褐色砂礫は、近年まで凹み状に残っていたものを造成により埋めたものである。土層の観察より、第5・6・13～16層をベースに最初の溝が掘られ、丘陵側の第13層が溝内で再堆積した第11層と平野部側の第12層で、溝がある程度埋まった段階で第8～10層の部分が掘り直されている状況が認められた。第12層の褐色粘質土層からはAトレンチで完形の瓦器椀(116)が出土している。第10層の下面では水の流れていた砂粒や水が溜まっていたことを示す泥土などは一切認められず、少なくともこの溝が掘り直されて埋まるまでの間は常時、水をたたえ



第29図　方丸地区B・Cトレンチ平面図、Bトレンチ東・南壁土層断面図



第30図　方丸地区Ｃトレンチ東壁・土坑ＳＫ02土層断面図

ることはなかったようである。このことから、最終段階では第10～８層の順で一気に埋め戻しを行っているものと思われる。これらの埋土より瓦器椀、白磁・青磁片が出土している。

Ｃトレンチでは Ｂトレンチとは異なり、第２層の砂礫により埋められるまで丘陵側、平野部側からの土砂の流れ込みが認められる（第30図）。ただ、第８～10層までの堆積があった後、第４・５層の部分が掘り直されていることはＢトレンチ同様である。第12層は溝掘削以前の堆積層と判断されるが、遺物の出土はない。Ａトレンチ部分の埋土下層より、土師器皿(115)、瓦器椀(116)が、上層より瓦器椀(117)、無釉陶器(119)、須恵器底部(120)が出土した。

土坑ＳＫ04（図版第11）　直径0.6m、深さ0.1mの規模を測り、埋土中より須恵器杯身(122)、土師器高杯(123)が出土した。周辺の検出状況より、竪穴式住居跡に伴う貯蔵穴の可能性もあるが遺存状態が悪く、明確な遺構として認識できない。

②Ｂトレンチ（第29図、図版第11・12）

Ｃトレンチの東側2.7mに設けたトレンチで、4.0×7.6mの調査区を設定した。トレンチのほぼ全域が溝ＳＤ01にあたり、東南隅で南西から北東に延びるＳＤ03を検出した。溝ＳＤ01と切り合い関係を有し、下層遺構となる。

溝ＳＤ03　幅1.7m以上、検出長約３mで、深さ約80cmを測る。後世の攪乱により遺構の大半が失われている（第29図Ｂトレンチ ＳＤ03南壁土層図）が、溝内部には２層の埋土が認められる。第５層から弥生土器(125)、第６層から縄文土器(129)、須恵器杯蓋(121)が出土した。周辺でこの溝の延長部分は確認されていない。

③Ｃトレンチ（第30図、図版第12）

方丸地区の西端に設けたトレンチである。昨年度に調査を行った第947次調査では、トレンチ南側で段丘の落ち込みを検出したが、その落ち込みがＳＤ01の肩部になることが予想されたため、昨年度のトレンチを南側に拡張した。

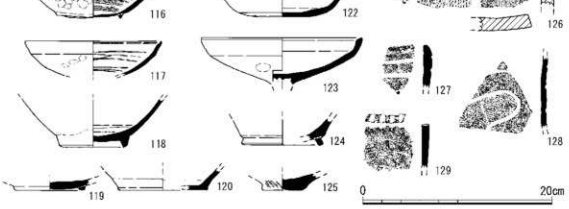
土坑ＳＫ02（第29・30図）　第947次調査で土器の小片が見つかったことによりサブトレンチを

設け調査を実施した。調査の結果、上層の第１層中より長岡京期と考えられる土馬の小片が出土し、土坑状の凹みの第２層より縄文土器片（128）が出土した。土坑は北半部が調査地外であり、隅丸方形を呈する。規模は、東西1.4m、南北（現存）0.6m、深さ0.35mを測る。

(3)出土遺物（第31図・図版第16）

方丸地区で出土した遺物は、整理箱にして２箱である。

115はAトレンチＳD01出土の土師器皿で、口径12cm、器高２cmを測る。116はAトレンチＳD01から出土した瓦器椀で、口径14.6cm、器高5.0cmを測る。口縁部内面に丁寧な横方向の暗文を施し、口唇部内面にヘラによる沈線文を施す。外面は指押さえによる成形がなされている。117は同じく瓦器椀で、A・BトレンチのＳD01から出土したものが接合した。口径14.4cm、残存高3.4cmを測る。口縁部内面に粗い横方向の暗文を施し、口唇部内面にヘラによる沈線文を施す。118はAトレンチＳD01から出土した白磁椀である。高台内面に墨痕が認められるが読み取れない。119はAトレンチＳD01より出土した無釉陶器底部である。底部径7.4cmを測る。120はAトレンチＳD01から出土した須恵器の壺もしくは甕の底部である。底部径9.2cmを測る。121・122は古墳時代の須恵器杯蓋・杯身である。121はBトレンチＳD03の上面で出土し、口径14.8cmを測る。122・123はAトレンチＳK04の出土で、122は口径10.6cm、器高4.2cmを測る。123は土師器高杯である。杯部の口径16.9cm、器高5.0cmを測る。124はAトレンチの包含層から出土した須恵器の底部である。125はBトレンチＳD03下面より出土した弥生土器甕の底部である。底部外面にタタキが施されている。126はAトレンチＳD01から出土した平瓦である。凸面に縄タタキ、凹面にナデ調整を施す。127～129は、後期初頭の中津式と考えられる縄文土器である。127はAトレンチの包含層から出土した。口縁部一段下がったところに２条の横走する沈線が描かれ、縄文が充填される。128はCトレンチＳK03下層から出土したもので、蛇行した沈線により区画された文様が描かれ、その内部に縄文が充填されている。129はBトレンチＳD03の第６層から出



第31図　方丸地区出土遺物実測図

土した無文深鉢の口縁部片である。口縁部端部に刻みをもつ。

(4)小結

A～Cトレンチで検出した溝ＳＤ01は、出土した遺物から12世紀後半以前に掘削されたと考えられる。この溝は周辺の調査でも確認されておらず、下海印寺集落が成立したであろう時代の状況・景観を考える上で重要な発見と言える。

(戸原和人・竹井治雄)

6．まとめ

今回報告した調査は、奥海印寺から下海印寺地域にわたる約1.3kmの範囲において、４地区で実施したものである。

西代遺跡は東向きの緩斜面で、居住に適していると考えられる地域に立地している。平成21年度の長岡京市の発掘調査によって古墳時代から中世までの包含層が発見され、周知の遺跡として認識された。長岡京市教育委員会の調査地点は、当調査研究センターの調査地点に比べ川に近く、高度の低い段丘面上に位置しており、段丘礫と考えられる礫層が検出されている。今回の調査では９か所のトレンチを設定したが、すべてのトレンチで大阪層群の緻密な粘土層を基盤層として検出した。耕作土中からは若干の遺物が出土しているが、原位置をとどめたものはなかった。段丘礫も検出できなかったことから、段丘に接続する丘陵地を中世以後に開削し、現在の水田面が成立したものと考えられる。

新郷地区では、近世以後の耕作関連土層の下で河川堆積物を検出した。遺構・遺物は検出できなかった。

駿河田地区では、住宅建設に伴う盛土、旧耕作土を掘り下げたが明確な遺構面は検出できなかった。地表下約２ｍまで掘削し、河川堆積物の連続を確認したにとどまった。

長岡京跡右京第973次・下海印寺遺跡の調査は、尾流地区と方丸地区で実施した。

尾流地区では２間×２間の総柱の掘立柱建物跡１棟、弥生時代後期の竪穴式住居跡１棟、古墳時代後期の竪穴式住居１棟、縄文時代後期の土坑２基等を検出した。今回の調査地点は河川に近く、調査地西側は近世の河川によって削られており、沖積面の広がり方から見て、今回の調査地も旧小泉川に近接した場所であることがわかり、下海印寺遺跡の末端に位置することがわかった。

方丸地区では、A～Cトレンチの３か所の調査を実施した。いずれのトレンチでも幅４ｍ程度の等高線に並行する中世の溝を検出することができ、その規模・方向から、同一の溝であると判断した。土地の区画を目的にしたものと想定できるが、その性格については不明である。

今回の一連の調査によって、これまで必ずしも明確でなかった長岡京市域南西部の遺跡の性格や広がりの一端を明らかにすることができた。

(中川和哉)

参考文献

岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005

岩松保ほか「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡報告書」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009

岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006

岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第124冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2007

岡崎研一ほか「京都第二外環状道路関連遺跡平成20年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査概報』第137冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010

木村泰彦「西代遺跡第1次調査(4LNPNI-1地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第55冊　長岡京市教育委員会)2010

中川和哉「京都第二外環状道路関係遺跡長岡京跡(長岡京跡右京第927次)・伊賀寺遺跡」(『京都府遺跡調査報告集』第136冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010

中川和哉・高野陽子ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第131冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009

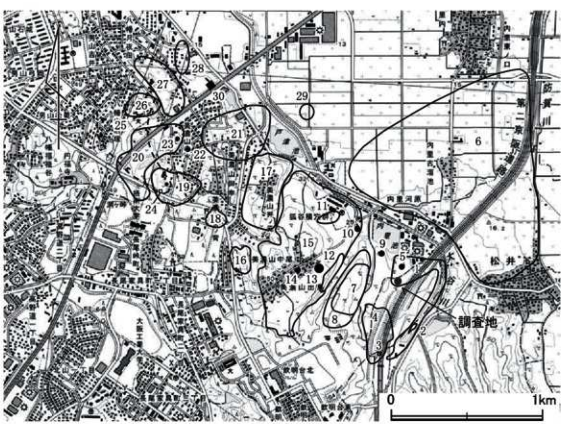
中川和哉・戸原和人「京都第二外環状道路関係遺跡平成18年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第126冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008

増田孝彦「長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5・NNT-3地区)・941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009

6.女谷・荒坂横穴群第11・12次
発掘調査報告

1．はじめに

今回の発掘調査は、平成21年度および平成22年度新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社（ＮＥＸＣＯ西日本）関西支社京都工事事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、八幡市の南側、京田辺市との境界に近い丘陵地に位置する。付近には多くの横穴が分布しており、女谷・荒坂横穴群もその一つである。横穴は、丘陵斜面に横穴を掘り込んで作られた墓で、今回の調査地の東側では、第２京阪道の建設に伴う調査で、52基の横穴が検出されている。(注1) これらの横穴は、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて造られている。数基の横穴からは人骨が出土している。また、鉄地金銅張の胡籙金具も出土している。これまで、女谷地区ではＡ～Ｃの３か所の支



1 女谷・荒坂横穴群
2 御毛通遺跡
3 御毛通古墳
4 荒坂遺跡
5 荒坂古墳
6 新田遺跡
7 美濃山廃寺
8 美濃山廃寺下層遺跡
9 内里池南古墳
10 柿谷古墳
11 狐谷横穴群
12 美濃山横穴群
13 王塚古墳
14 小塚古墳
15 美濃山遺跡
16 宮ノ背西遺跡
17 金右衛門垣内遺跡
18 宮ノ背遺跡
19 西ノ口遺跡
20 備前遺跡
21 幸水遺跡
22 東二子塚古墳
23 西二子塚古墳
24 西山廃寺（足立寺跡）
25 南山古墳群
26 南山遺跡
27 山田遺跡
28 山田東遺跡
29 五反田遺跡
30 ヒル塚古墳

第１図　調査地及び周辺遺跡分布図（国土地理院　1/25,000　淀）

群が確認されており、今回検出した横穴群は女谷D支群となる。

今回の調査では、京都府教育委員会や八幡市教育委員会、地元美濃山、内里地区のそれぞれの自治会などにご協力いただいた。また、現地調査にあたっては、各大学の学生諸君や地元有志の方々の参加があった。感謝したい。

（引原茂治）

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸

調 査 担 当 者　第11次調査　調査第２課主幹調査第３係長事務取扱　石井清司
課長補佐兼調査第１係長　小池　寛
次席総括調査員　伊野近富
主任調査員　引原茂治
主査調査員　柴　暁彦
同　調査員　松尾史子
第12次調査　課長補佐兼調査第１係長　小池 寛
主任調査員　引原茂治
同　調査員　松尾史子

調 査 場 所　八幡市美濃山荒坂65－２

現地調査期間　第11次調査　平成21年７月９日～平成22年２月25日
第12次調査　平成22年５月13日～６月11日

調 査 面 積　第11次調査　2,000㎡
第12次調査　400㎡

２．位置と環境

女谷・荒坂横穴群の所在する八幡市は、京都府南部の山城盆地西部に位置する。市の西側には、大阪府との境となる男山丘陵、美濃山丘陵が南北に横たわる。東及び北側には、木津川が湾曲して流れる。この美濃山丘陵の南東側斜面に女谷・荒坂横穴群は営まれている。

八幡市における旧石器時代の遺跡としては、ナイフ形石器が出土した金右衛門垣内遺跡や荒坂遺跡、宮ノ背遺跡がある。縄文時代の遺跡としては、金衛門垣内遺跡や晩期の土器が出土した内里八丁遺跡がある。

弥生時代以降は、遺跡の確認例が増える。弥生時代中期では、集落跡として内里八丁遺跡、金衛門垣内遺跡、方形周溝墓群として幸水遺跡がある。弥生時代後期では、幣原遺跡、西ノ口遺跡、宮ノ背遺跡、中の山遺跡、木津川河床遺跡、内里八丁遺跡などがある。

古墳時代前期から中期にかけては、男山丘陵周辺に、石不動古墳、茶臼山古墳、西車塚古墳、東車塚古墳などの前方後円墳、前方後方墳が築造される。また、ヒル塚古墳は一辺52mで、粘土槨を主体部とし、方格規矩鏡や武器類を副葬する。女谷・荒坂横穴群の付近に位置する美濃山王塚古墳は、最近の調査で、葺石や埴輪をもつ、古墳時代前期末から中期初頭頃に築造された前方

後円墳であることが判明した。このほか、柿谷古墳などが、付近に位置する。後期には、横穴墓が美濃山丘陵を中心に多数営まれる。女谷・荒坂横穴群や狐谷横穴群などである。

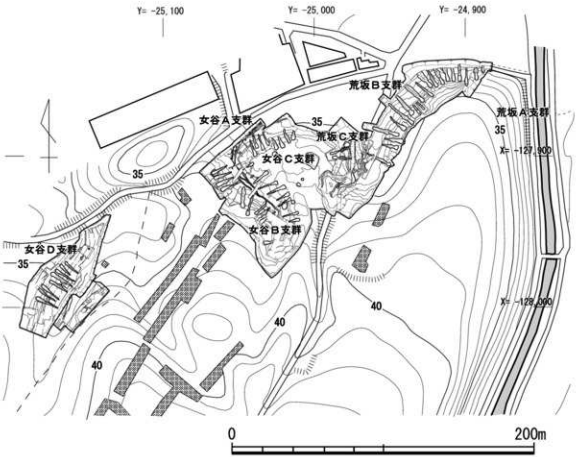
志水廃寺、西山廃寺では、堂塔跡や瓦窯跡が確認され、７世紀後半から末頃の創建と考えられている。奈良時代に創建された美濃山廃寺では、建物跡や溝などが検出され、奈良三彩壺片などが出土している。集落跡としては、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、女郎花遺跡などがある。内里八丁遺跡では、瓦や墨書土器などが出土しており、その性格が注目される。また、中国唐時代の絞胎陶枕片なども出土しており、遺跡の性格を考える上で示唆的である。上奈良遺跡は、『延喜式』に記載されている「奈良園」の候補地とみられており、則天文字などを記した墨書土器が出土している。生産遺跡としては、四天王寺の創建瓦を焼成した平野山瓦窯がある。また、平安時代には、木津川に面した男山丘陵北側の頂部に、石清水八幡宮が勧請される。

中世の遺跡としては、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、上津屋遺跡などがある。上奈良遺跡では、中世の井戸跡から木造仏座像の膝部が出土している。

（引原茂治）

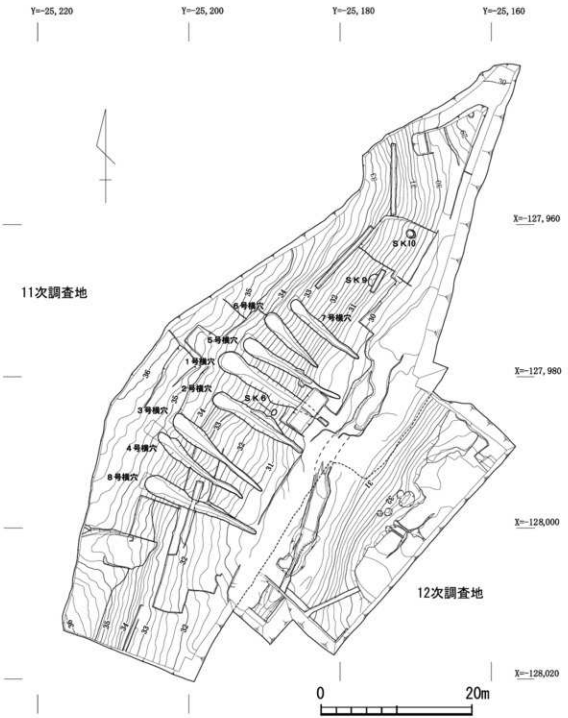
３．調査の経過

第11次調査は、平成21年７月９日から開始した。この調査地は、南西から北東に延びる丘陵の南東側斜面に位置しており、一帯は竹林となっている。調査では、平成20年度の調査で確認した



第２図　女谷・荒坂横穴群支群配置図

１号横穴、２号横穴の調査およびその周辺部における横穴の有無の確認を行った。周辺部の確認調査では、さらに３基の横穴（３～５号横穴）を確認した。これらの横穴の調査を行うためには竹林を広範囲に伐採する必要があるので、その準備等のため、９月10日に、一旦、調査を中断した。以上の調査については、すでに報告している。(注2)



第３図　女谷・荒坂横穴群第11・12次調査遺構配置図

10月27日から調査を再開し、横穴の掘削を順次行なった。また、さらに３基の横穴（６～８号横穴）を確認し、これらの横穴についても、順次調査を行なった。この間、平成22年１月30日に現地説明会を実施した。168名の方々が参加された。第11次調査は、平成22年２月25日に終了した。

検出した横穴は計８基で、北東方向に開く谷の北西斜面に築かれており、いずれも南東方向に開口する。横穴は谷の入り口付近にはなく、中央付近にまとまって分布する。なお、横穴の番号は検出した順番につけている。北東の７号横穴から南西の８号横穴までは30mを測り、各横穴の間隔は、２号と３号横穴の間が４ｍと広く、１号と５号・３号と４号の間が１ｍと狭い。横穴は、谷底から少し高い位置から掘削されており、１・２・５～７号横穴は標高30m付近、３・４・８号横穴は標高31m前後である。このことから横穴群は、１・２・５～７号横穴と３・４・８号横穴の２つのグループに分けられる可能性がある。

第11次調査で横穴群を検出した斜面と谷を挟んで相対する斜面部にも横穴が存在する可能性があるため、平成22年度に第12次調査として確認調査を実施した。調査は、平成22年５月13日から開始した。調査の結果、横穴は存在しないことが判明した。横穴群内の通路となっていた可能性がある谷底部を確認して、６月11日に現地調査を終了した。

（引原茂治）

４．調査内容

１）１号横穴

①形態と規模

南東方向に開口するD支群中最長の横穴である。全長17.2m、玄室長3.5m、玄室最大幅2.5m、墓道長13.7m、墓道の上幅２m、下幅0.5mで、玄室の平面形は羽子板形である。横穴の主軸はN 58°Wで、羨道の有無は不明である。玄室床面は１面のみで、標高は31.9mである。奥壁は床面から0.5mより上の部分は大きく崩落している。天井はほとんど崩落していた。

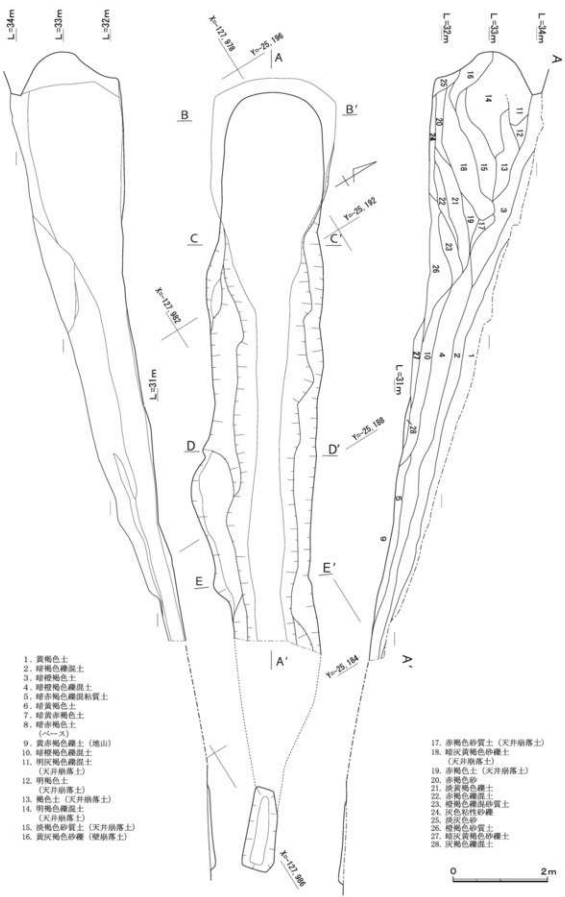
②土層堆積状況

玄室内は天井や壁の崩落土である明褐色系礫混土または赤褐色系土で埋まっており、墓道の埋土は暗褐色系礫混土（４・10・５層）であった。天井崩落後に表土化した２・３層が堆積していることから、墓道は入り口封鎖後もオープンであったのではないかと考えられる。

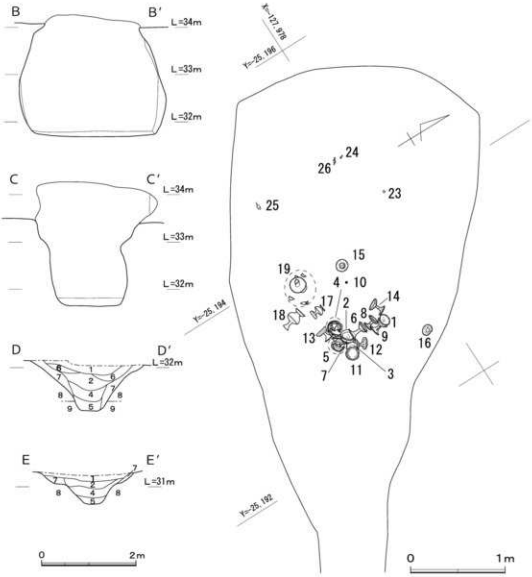
③遺物出土状況

玄室内からは須恵器高杯10点、蓋３点、台付長頸壺２点、台付甕１点、金環２点、鉄鏃２点、刀子片１点が出土した。鉄鏃(25)は玄室中央の右側壁寄りで、鉄鏃(26)と刀子(24)は金環(23)と同じく玄室中央付近で出土した。もう１点の金環は玄室精査中に出土した。須恵器は、玄室の入り口付近で様々な方向に倒れた状態でまとまって出土した。台付長頸壺(19)は直立した状態で出土しており、口縁部のみが破損していた。人骨や棺材は出土していない。

また、墓道掘削中に土師器(20・21)や横穴より新しい時期の須恵器片22などがわずかに出土した。


L=34m
L=33m
L=32m
L=31m
X=-172,979
Y=-25,186
X=-172,985
Y=-25,192
Y=-25,189
Y=-25,184
X=-172,996
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
1. 黄褐色土
2. 暗褐色礫混土
3. 暗褐色土
4. 暗橙褐色礫混土
5. 暗赤褐色礫混粘質土
6. 暗黄褐色土
7. 暗黄赤褐色土
8. 暗赤褐色土
(<ベース)
9. 黄赤褐色礫土（地山）
10. 暗橙褐色礫混土
11. 明灰褐色礫混土
(天井崩落土)
12. 明褐色土
(天井崩落土)
13. 褐色土（天井崩落土）
14. 明褐色礫混土
(天井崩落土)
15. 淡褐色砂質土（天井崩落土）
16. 黄灰褐色砂礫（壁崩落土）
17. 赤褐色砂質土（天井崩落土）
18. 暗灰黄褐色砂礫土
(天井崩落土)
19. 赤褐色土（天井崩落土）
20. 赤褐色砂
21. 淡黄褐色礫土
22. 赤褐色礫混土
23. 暗褐色礫混砂質土
24. 灰色粘性砂礫
25. 淡灰色砂
26. 暗褐色砂質土
27. 暗灰黄褐色砂礫土
28. 灰褐色礫混土
0
2m

第4図　1号横穴実測図

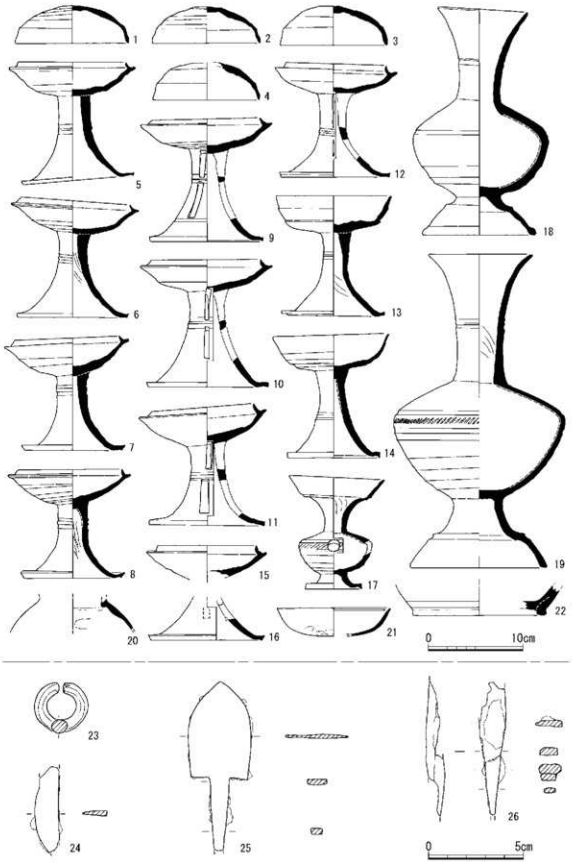


第５図　１号横穴立面図及び遺物出土状況図(土色は第４図に同じ)

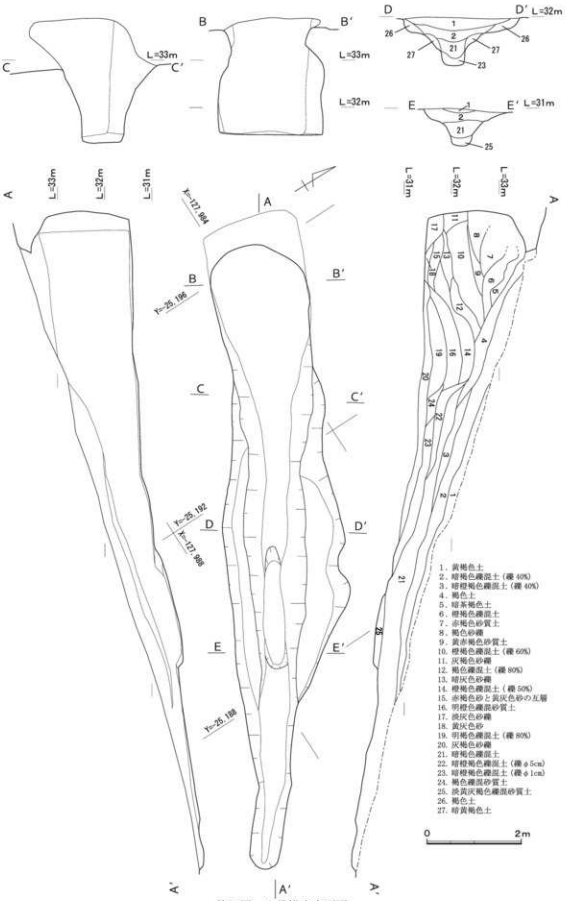
④出土遺物

１～19･23～26は玄室内から出土した。１～４は須恵器杯蓋で、口径11.8cm、器高4.0cmを測る。16は高杯の脚、５～12・15は有蓋高杯、13・14は無蓋高杯である。９～11の脚部には方形２段透かしを施す。12の脚部には切り込み状の２段透かしが施されている。５～８・13・14は透かしを施さず、２条の沈線を施す。17は台付甕である。これらは概ねＴＫ209～217型式の資料と考えられる。

23は金環である。断面形は楕円形で長径８mm、短径７mmを測る。緑青が進行しており鍍金はわずかに認められる程度である。金環は２点出土したが、もう１点は剝離した金メッキの部分のみであり、図示できなかった。24は鉄製品である。長さ4.5cm、幅1.3cmで、断面形から刀子と考えられる。25・26は鉄鏃である。25は平根系の鏃で、全長９cm、身部は幅3.3cm、厚さ２mm、頸部は幅１cm、厚さ２mmで断面形は長方形である。木質等の付着はみられない。26は全体形は不明であるが、断面の形状から鉄鏃と考えられる。身部については不明である。頸部は幅



第６図　１号横穴出土遺物実測図


L=33m
L=32m
L=31m
Y=-171,984
Y=-25,196
Y=-25,192
Y=-171,988
Y=-25,188
1. 黄褐色土
2. 暗褐色礫混土（礫 40%）
3. 暗橙褐色礫混土（礫 40%）
4. 褐色土
5. 暗茶褐色土
6. 橙褐色礫混土
7. 赤褐色砂質土
8. 褐色砂礫
9. 黄赤褐色砂質土
10. 橙褐色礫混土（礫 60%）
11. 灰褐色砂礫
12. 褐色礫混土（礫 80%）
13. 明灰色砂礫
14. 橙褐色礫混土（礫 50%）
15. 赤褐色砂と黄灰色砂の互層
16. 明橙色礫混砂質土
17. 淡灰色砂礫
18. 黄灰色砂
19. 褐色礫混土（礫 80%）
20. 灰褐色砂礫
21. 暗褐色礫混土
22. 暗橙褐色礫混土（礫 φ 5cm）
23. 暗橙褐色礫混土（礫 φ 1cm）
24. 褐色礫混砂質土
25. 淡黄灰褐色礫混砂質土
26. 褐色土
27. 暗黄褐色土
0
2m

第７図　２号横穴実測図

0.6～１cm、厚さ２～３mmで断面形は長方形である。図示したように途中で折れて食い違いに接合した状態で錆が進行している。木質等の付着はみられない。

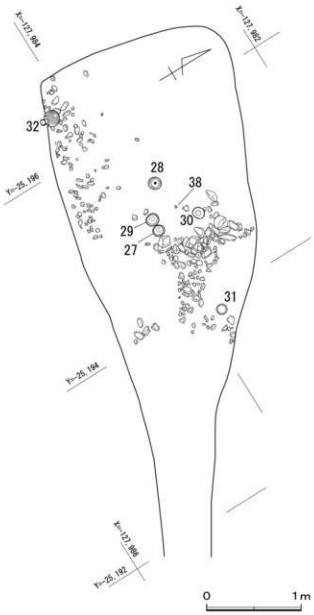
20～22は墓道掘削中に出土した。20は土師器の壺か甕の頸部である。頸部径７cm、残存高3.4cmである。墓道先端部付近の上層の埋土（第４図第２層）から出土した。21は土師器杯である。口径11.8cm、器高3.0cmを測る。墓道先端付近の検出面で出土した。22は奈良～平安時代の須恵器壺の底部である。墓道の埋土の最上層（黄褐色土）から出土した。

（松尾史子）

２）２号横穴

①規模と形態

１号横穴の西側に隣接する南東方向に開口する横穴である。全長13.8m、玄室長2.1m、玄室最大幅２m、墓道長11.7m、墓道の上幅２m、下幅0.5mで、玄室の平面形は羽子板形である。玄室は墓道に対して大きく南に屈曲する。玄室の主軸はN58°Wで、墓道の主軸はN56°Wである。玄室床面の標高は31.5mである。玄室床面は入口付近のみ礫敷が施されていたようである。羨道の有無は不明である。



第８図　２号横穴遺物出土状況図

②土層堆積状況

１～４層は天井崩落後に堆積した土層である。14・16・19層は玄門付近に山状に堆積しており、天井崩落土と考えられる。玄室内は天井や壁の崩落土（赤褐色系礫混土）で埋まっていた。１～４層を掘削後、墓道内では21層が幅0.5m、長さ8.5m以上にわたって溝状に確認できた。この層からは須恵器がまとまって出土しており、横穴を再利用した際に掻き出された可能性が考えられる。過去の調査成果においても同様の遺物出土状況がみられ、それらを墓道内通路出土遺物と評価している。今回も同様に評価しておきたい。また、１・２層の堆積状況からＳＸ１と同様、墓道は入り口封鎖後ある程度オープンであったと考えられる。

また、墓道中央には長さ2.6m、幅0.4m、深さ0.2mの土坑が掘削されており、墓道の床面と同じ高さまで淡黄灰褐色礫混砂質土(25層)で埋められていた。過去の調査例と同じく水抜き用の施設と考えておきたい。

③遺物出土状況

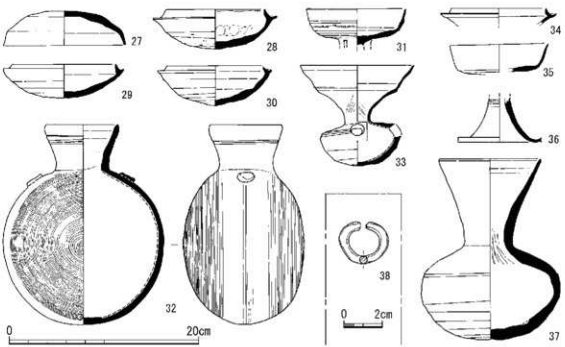
玄室内からは、金環(38)や須恵器の提瓶(32)、杯身(28～30)、杯蓋(27)、高杯(31)が出土した。提瓶は、玄室奥壁寄りの右側壁に立てかけられたような状態で出土した。杯身は、玄室中央付近で30が正位で、28は逆位で出土した。金環は30と28の中間で出土した。高杯は玄室の入り口付近で出土しており、脚部は欠損していた。人骨や鉄器、棺材は出土しなかった。

また、前述のように墓道の埋土からは須恵器がまとまって出土した。須恵器は墓道中央付近から先端付近まで広範囲に分布しており、破片化している率が高いことから追葬、もしくは再利用の時に、玄室内にあったものが掻き出されたと考えられる。

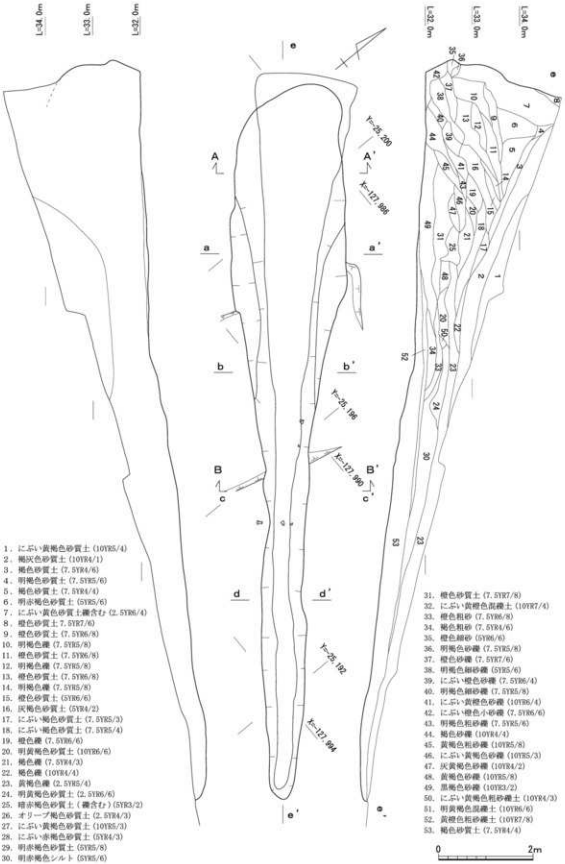
④出土遺物

27～32は、玄室内から出土した。27は須恵器杯蓋で、口径12.9cm、器高3.7cmである。28～30は須恵器杯身である。口径10～10.3cm、器高3.5～4.2cmを測り、小振りで深みがある。28・30は体部下半の外面に削りを施す。31は須恵器高杯の杯部である。口径10.4cm、残存高3.9cmである。わずかに脚部の透かしの痕跡が残る。墓道出土資料と接合関係を確認したが、接合するものはなかった。32は須恵器提瓶である。口径7.4cm、体部径17cm、器高21.2cmである。体部にはカキ目が施され、片面に「×」のヘラ記号が認められる。把手は形骸化しており、肩部に円形の粘土板を貼り付けているのみである。これらはＴＫ209～217型式段階の資料と考えられる。

38は金銅製の耳環である。断面形は楕円形で、長径４mm、短径３mmである。鍍金はほとん



第９図　２号横穴出土遺物実測図



第10図　3号横穴実測図

ど剝落しており、鍍金がわずかに残っている程度である。

33～37は墓道内通路の埋土から出土した。34は須恵器杯身である。口径10cm、残存高1.7cmを測る。35は須恵器高杯の杯部、36は須恵器高杯の脚部である。両者に接点はないが、同一個体の可能性がある。35は口径10.3cm、残存高3.1cmで墓道の先端付近で出土した。36は底径8.9cm、残存高4.8cmを測る。33は須恵器甕である。口径11.4cm、器高10.9cmである。37は須恵器長頸壺である。口径10.6cm、器高19.2cmを測る。墓道内でかなり広範囲に破片が分布していたが、ほぼ完形に復原できた。これらは玄室内の遺物とほとんど時期差はない。

（松尾史子）

3）3号横穴

①形態と規模

3号横穴は、2号横穴の南東側に位置する。玄室の平面形は、撥形を呈する。天井部は、崩落のため、ほとんど残存していないが、奥壁の状況から、奥壁付近での天井の高さは1.7m前後と考えられる。玄室床面は1面で、ほぼ平坦である。墓道部分は緩く傾斜して下降する。玄室と墓道の境界は、平面的には明確でない。天井部崩落土の状況から、奥壁から3.6m付近までが玄室と考えられる。玄室の閉塞状況は不明である。

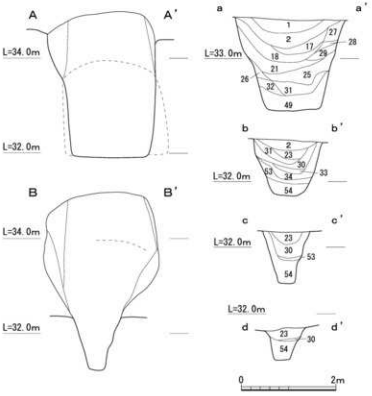
この横穴の規模は、全長15.3m、玄室長3.6m、玄室幅2.2m、墓道長11.7m、墓道最大上幅1.4mを測る。主軸はN56°Wである。

②土層堆積状況

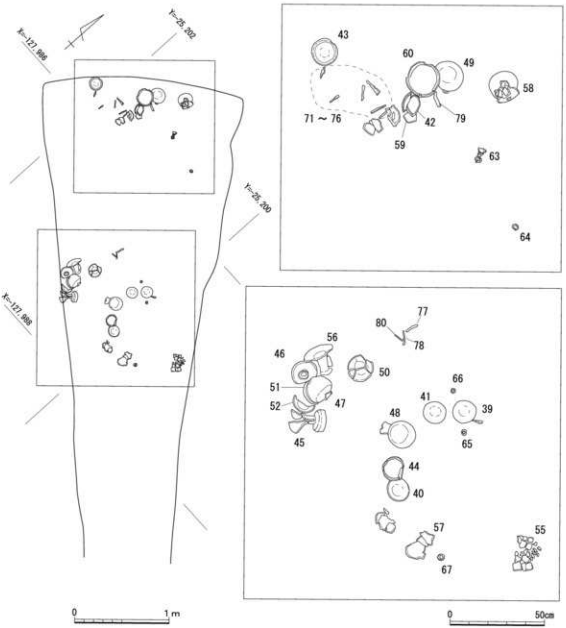
1～5層は、横穴の天井部等が崩落した後に堆積した褐色系の砂質土である。その下層は、天井部や奥壁・側壁部の崩落土と考えられる。地山の大阪層群に由来する砂礫が大半である。玄室床面は、地山の大阪層群である。

③遺物出土状況

遺物は、おもに玄室床面から出土している。玄室内では、奥壁付近と玄門付近の、およそ2か所に集中して出土している。奥壁付近からは、須恵器杯身(42・43)、須恵器提瓶(49)、土師器杯(59)、土師器甕(58)、土師器鉢(60)、耳環(63・64)、馬



第11図　3号横穴立面図及び土層実測図（土色は第10図に同じ）

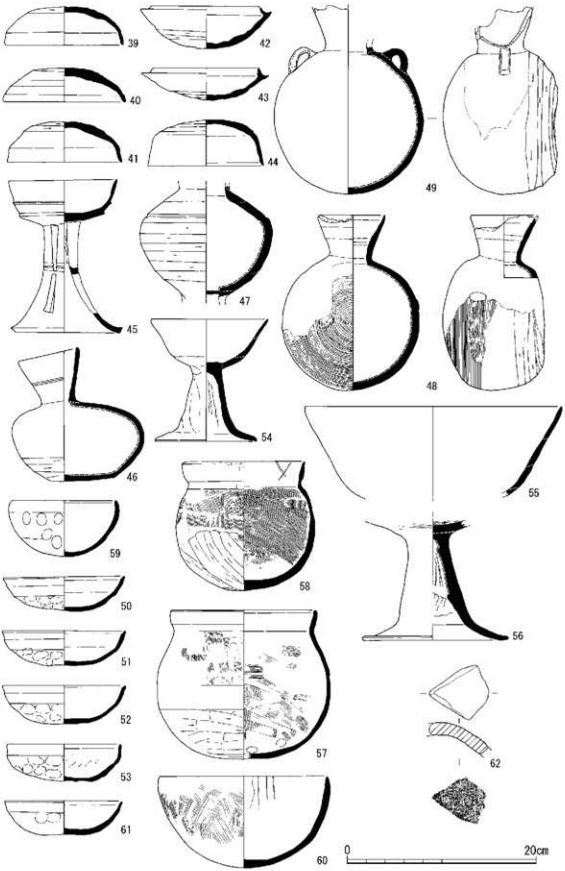


第12図　3号横穴遺物出土状況図

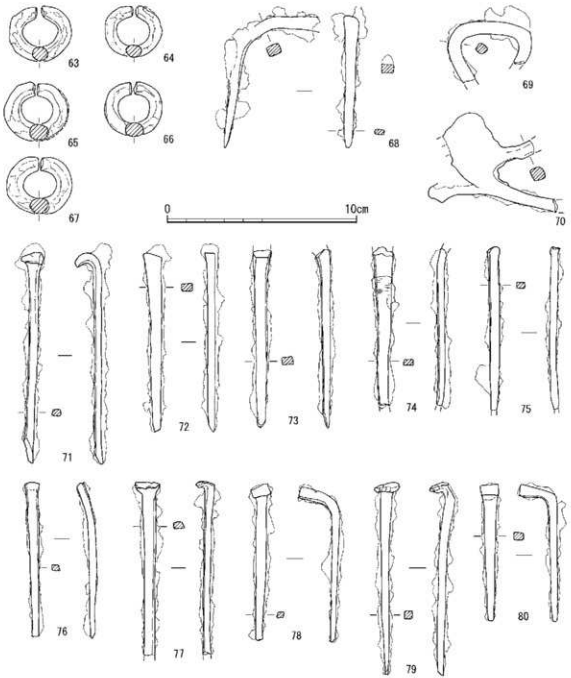
具と考えられる鉄製品(68～70)、ほか鉄釘が出土している。玄門付近からは、杯蓋(39～41)、高杯(45)、壺蓋(44)、台付壺(47)、平瓶(46)、提瓶(48)などの須恵器や、杯(50～53)、高杯(54～56)、甕(57)などの土師器、耳環(65～67)、ほか鉄釘などが出土している。また、墓道埋土から土師器杯(61)が出土している。また、玄室埋土から布目瓦片(62)が出土している。

④出土遺物

須恵器杯身(42・43)は、口径が11.2～11.4cmで、口縁部の立ち上がりは低い。ＴＫ209型式でも新しい様相を示すものとみられる。須恵器提瓶(49)は、頸部が斜め上方に立ち上がり、端部は打ち欠かれている。環状の吊手を持つ。土師器杯(59)は、半球状の形状で、外面にユビオサエがみられる。土師器甕(58)は、頸部があまりくびれず、口縁部が上方に立ち上がり、端部は丸くおわる。体部外面上半がハケメ調整、下半がヘラケズリである。内面はハケメ調整である。口縁部



第13図　３号横穴出土遺物実測図（１）



第14図　３号横穴出土遺物実測図（２）

内面に「×」状のヘラ描きがある。土師器鉢(60)は、半球状の形状で、外面ハケメ調整である。口縁部内面に４条のヘラ描きがある。以上の土器は、玄室奥壁付近から出土した。

須恵器杯蓋(39～41)は口径12～12.8cmで、天井部が丸味を持つものと台形状を呈するものがある。ＴＫ217型式でも古い様相を示すものとみられる。須恵器蓋(44)は、口縁部が長めに垂下しており、壺蓋とみられる。須恵器高杯(45)は、脚部２段透かしで、３方向に透かしを持つ無蓋高杯である。須恵器平瓶(46)は、頸部外面に沈線を施す。須恵器台付壺(47)は、頸部と脚部を欠く。副葬時に故意に欠いた可能性も考えられる。須恵器提瓶(48)は、頸部が斜め上方に立ち上がり、

端部は丸くおわる。吊手の痕跡はない。土師器杯(50～52)は、浅目で、口縁端部が段状になる。土師器杯(53)は、浅目で、口縁端部が直立して立ち上がる。土師器高杯(54)は、磨滅のため、調整は不明である。土師器(55・56)は同一固体と考えられ、大型の高杯とみられる。土師器甕(57)は、頸部があまりくびれず、口縁部が上方に立ち上がり、端部は丸くおわる。体部外面上半がハケメ調整、下半がヘラケズリである。内面はハケメ調整である。以上の土器は、玄室玄門付近から出土した。

土師器杯(61)は、浅目で、口縁端部は外反気味に丸くおわる。墓道から出土した。布目瓦片(62)は、丸瓦とみられる。玄室埋土から出土した。

耳環(63・64)は銀環とみられる。玄室奥壁付近から出土した。耳環(65・66)は金環とみられる。耳環(67)は表面の残りが悪い。これら３点は、玄室玄門付近から出土した。鉄製品(68)は、「U」字形を呈するものとみられ、馬具の鐙の一部か。鉄製品(69)は、環状を呈するものとみられ、馬具のバックルの一部か。鉄製品(70)は、形状不明であるが、轡等の一部か。以上３点の鉄製品は、玄室奥壁付近から出土した。鉄釘(71～80)は、棺に用いられていたものか。

(引原茂治)

4）4号横穴

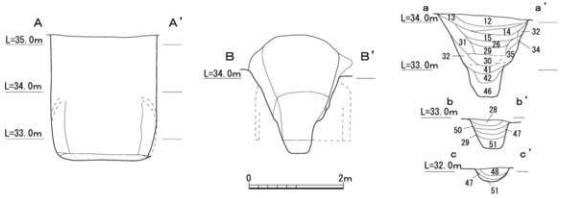
①形態と規模

３号横穴の南東側に位置する。玄室平面形は、羽子板形を呈する。玄室奥壁部から1.9mにわたって天井部が残存している。ただ、玄室床面からの高さは1.2mであり、本来の高さを保っていない可能性がある。玄門は、床面の平面形のくびれなどから、奥壁から3.5m付近と考えられる。玄室床面は、若干の盛土を敷いてほぼ平坦に仕上げる。墓道は、緩く傾斜して下降する。閉塞の状況は不明である。

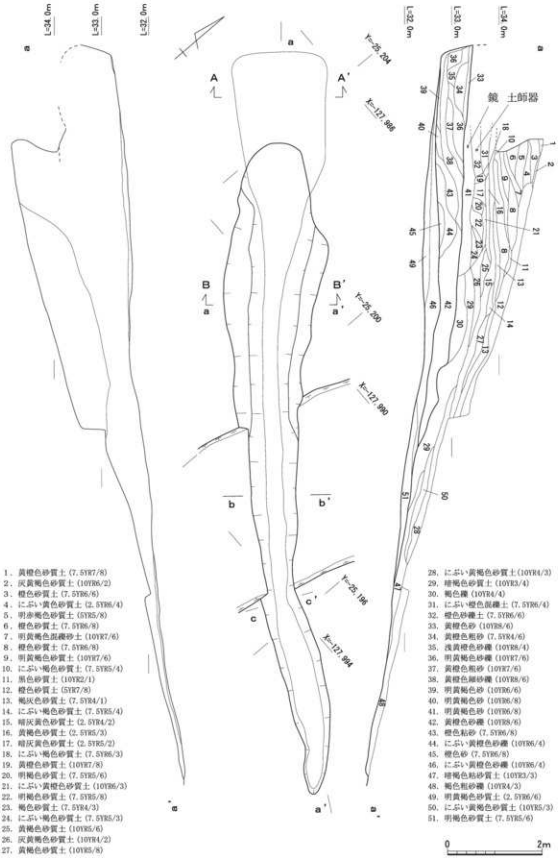
この横穴の規模は、全長15.7m、玄室長3.5m、玄室幅２m、墓道長12.2m、墓道最大上幅1.9mを測る。主軸はN49°Wである。

②土層堆積状況

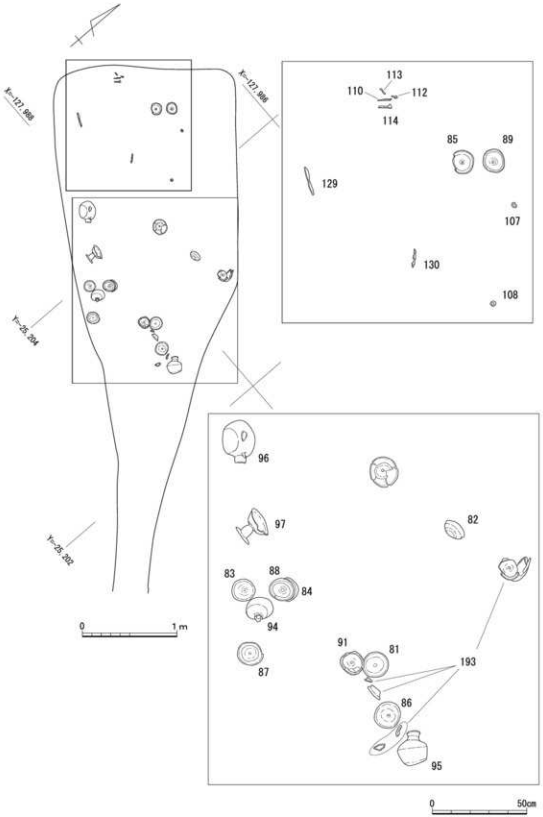
１～29層・47・48・50層は、横穴の天井部等が崩落した後に堆積した砂質土である。この横穴は、９世紀頃に再利用されており、30～33層・41層は、再利用後に堆積した天井部等の崩落土と



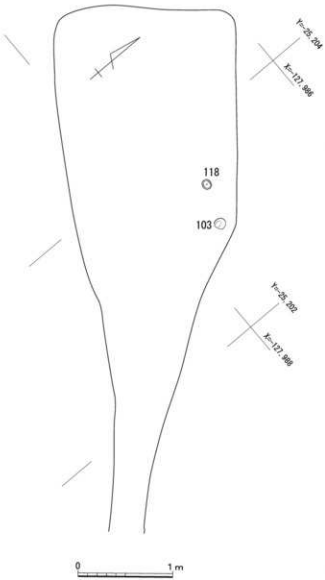
第15図　４号横穴立面図及び土層実測図(土色は第16図に同じ)



第16図　4号横穴実測図



第17図　4号横穴遺物出土状況図(1)



第18図　4号横穴遺物出土状況図（2）

みられる砂礫層である。34～40層・42～45層は、9世紀以前の天井部崩落土と考えられる砂礫層で、これらの層上をほぼ平坦に削平して再利用している築造当初の床面から0.6m前後の高さである。46・49・51層は、横穴築造時に地山の大阪層群の上に床面を整えるために敷かれたと考えられる砂礫や砂質土である。

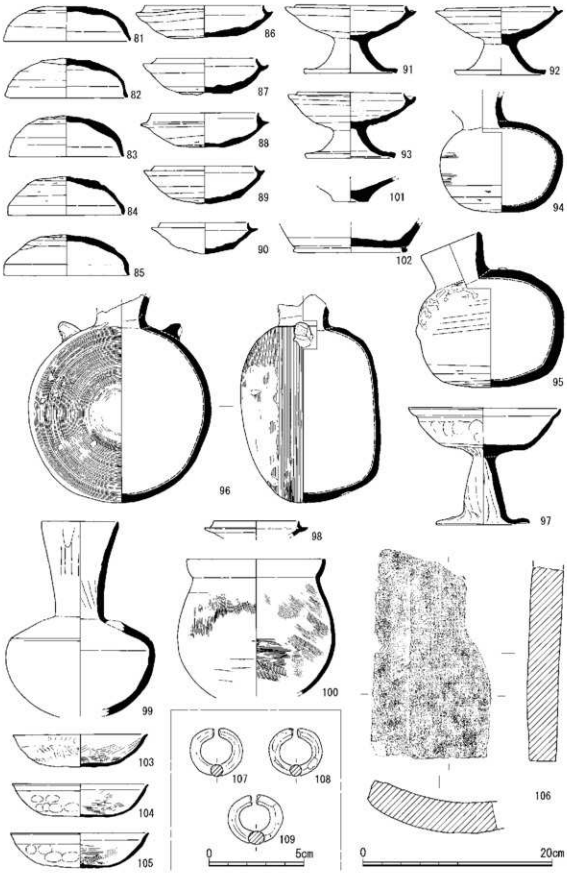
③遺物出土状況

横穴に伴うとみられる遺物は、おもに玄室床面のほぼ全面にわたって散乱する様相である。須恵器が多く、土師器は、高杯(97)と甕(100)である。玄門から奥壁に向かって左側の側壁に沿って須恵器提瓶(96)や須恵器平瓶(94)、土師器高杯(97)などが配されている様子がうかがえる。玄室奥半部からは、耳環(107・108)や鉄鏃(110～113)、刀子(115～117)が出土している。墓道埋土からは、須恵器杯身片(98)が出土している。

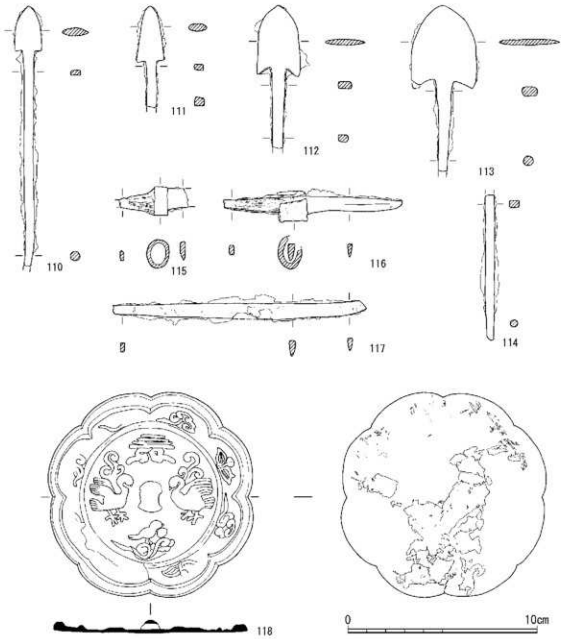
再利用面上からは銅鏡(118)や土師器杯(103～105)が出土している。銅鏡(118)は、鏡背を上にした状態で出土した。このほか、玄室埋土から布目瓦片(106)や須恵器杯片(102)、弥生土器壺底部片(101)などが出土している。

④出土遺物

須恵器杯蓋(81)は、口径13.4cmを測り、やや扁平気味の器形である。ＴＫ209型式とみられる。須恵器杯蓋(82～85)は、口径11.9～13.1cmで、天井部が丸味を持つものと台形状と呈するものがある。ＴＫ217型式でも古い様相を示すものとみられる。須恵器杯身(86・88)は、口径11.3～12.5cmを測り、扁平気味の器形を呈する。ＴＫ209型式でも古い様相を呈するものとみられる。須恵器杯身(87・89)は、口径10.6cmで、ＴＫ209型式とみられる。須恵器高杯(91～93)は、透かしがない短脚付の有蓋高杯である。須恵器平瓶(94)は、体部にカキ目調整がみられる。須恵器平瓶(95)は、体部上面に1個の小円板状浮文を貼りつける。須恵器提瓶(96)は、肩部に形骸化した吊手を持つ。土師器高杯(97)は、杯部径に較べてやや細めの脚部を持つ。以上の土器は、玄室から出土した。



第19図　4号横穴出土遺物実測図(1)



第20図　4号横穴出土遺物実測図（2）

須恵器杯身(90)は、口径9.2cmで、ＴＫ217型式併行期のものとみられる。玄室埋土出土であり、確実にこの横穴に伴う遺物とは判断できない。須恵器杯身片(98)は、小形のもので、墓道埋土から出土した。須恵器長頸壺(99)は、焼成が軟である。墓道埋土から出土した。土師器甕(100)は、頸部があまりくびれず、口縁部が上方に立ち上がり、端部は丸くおわる。体部外面上半がハケメ調整、下半がヘラケズリである。内面はハケメ調整である。須恵器片(102)は、杯ないしは壺の一部とみられる。９世紀頃のものか。横穴埋土から出土した。弥生土器(101)は、弥生時代後期の壺底部とみられる。玄室埋土から出土した。

土師器杯(103～105)は、再利用面上から出土した。内面ハケメ調整で、口縁端部は外反気味になる。布目瓦片(106)は、須恵質で、上面に布目、下面は縄目タタキのちナデ調整である。再利

用面上の埋土から出土した。

耳環(107・108・109)は、銀環である。鉄鏃(110～113)、刀子(115～117)は、玄室奥半部から出土した。

銅鏡(118)は、床面から0.6m前後高い位置にある再利用面上から出土した。直径11.2cm、厚さ0.1～0.7cmを測る。八花形をしており、鏡背の内区には向かい合う２羽の鳥や雲模様を鋳出す。外区には雲文と花文を交互に配するが、湯まわりが悪かったのか、ほぼ半周分文様が鋳出されていない。この鏡は「瑞雲双鸞八花鏡」と呼ばれる。鏡面には紙の痕跡があり、紙に包んで埋納されたものとみられる。

(引原茂治)

５）５号横穴

①形態と規模

１号横穴の北東に隣接し、D支群中では中規模の横穴である。玄室は全体が杓文字形を呈する。天井部は奥壁から0.4m付近までは残存するが、その他の箇所では崩落していた。玄室の床面は１面で、ほぼ水平に作る。玄室の幅の狭まり及び土層断面の観察から、玄門部は奥壁から3.6mの位置と判断される。羨道の有無や閉塞の状況は不明である。玄門部付近および墓道の床面は谷底に向かって徐々に傾斜する。

各部長は次の通りである。全長15.2m、玄室長3.6m、玄室幅は奥壁部が最大で2.5m、玄門幅が0.87m、墓道長11.6m、墓道の最大上幅1.6mである。主軸はN57°Wである。

②土層堆積状況

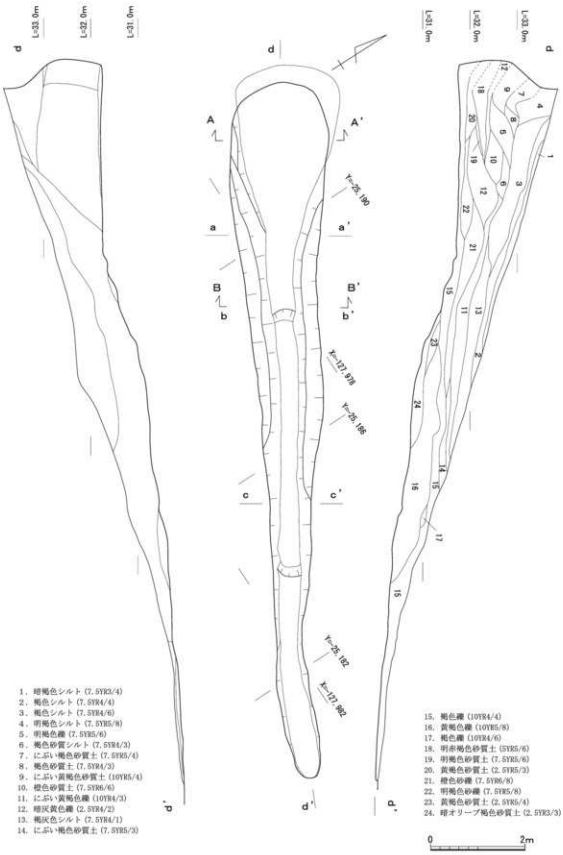
１～４・13層は天井崩落後の堆積土で、褐色を呈するシルト層である。５～９層は天井及び壁面の崩落土と考えられ、褐色や橙色を呈する礫土である。14～19層は埋葬後の堆積土で、褐色を呈する礫層である。玄室の床面は地山を形成する大阪層群で、この面から遺物が出土している。

③遺物出土状況

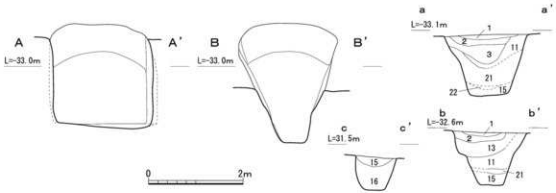
遺物は玄室の床面と埋土中、墓道から出土している。玄室床面出土遺物には須恵器壺１点(124)、須恵器長頸壺(126)、平瓶(125)、有蓋長脚高杯(122・123)、無蓋長脚高杯(121)、杯身(120)、耳環(129・130)がある。玄室左側壁に近い位置では、壺(124)と平瓶(125)が正立し、長頸壺(126)が口縁を奥壁側に向けて横転した状態で出土した。これらに近接して耳環129・130が揃って出土した。奥壁に近い玄室の中央付近では、高杯(121)が杯部を玄門方向へ向けて横転した状態で出土した。玄室奥壁の右隅に近い位置では、高杯(122・123)がともに杯部を壁側に向け横転し、杯身(120)は正立した状態で出土した。

玄室埋土中からの出土遺物は須恵器杯蓋(128)である。墓道からの出土遺物は、須恵器杯身(119)、土師器椀(127)である。奥壁から５～６m付近の墓道内２か所から、椀(127)が出土した。出土地点の層位は、埋葬後に堆積した礫層で、玄室床面とほぼ同じ高さであることから、玄室内に置かれたものが土砂とともに墓道側へ流出した可能性がある。

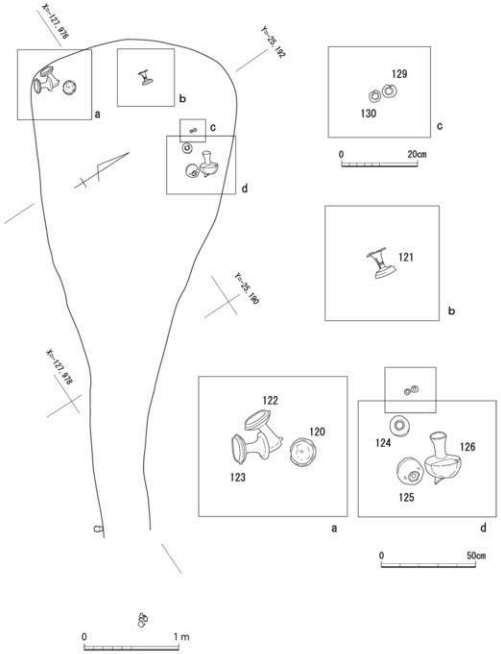
④出土遺物



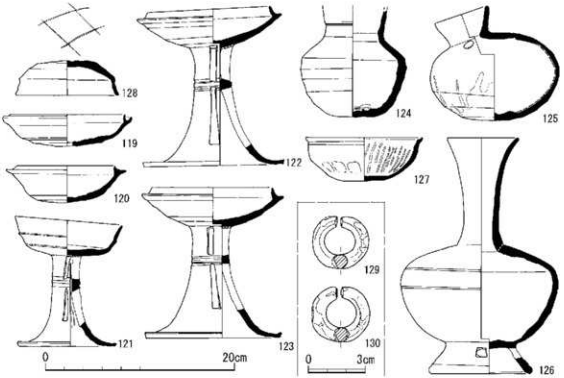
第21図　5号横穴実測図



第22図　5号横穴立面図及び土層実測図(土色は第21図に同じ)



第23図　5号横穴遺物出土状況図



第24図　５号横穴出土遺物実測図

須恵器は玄室内から、土師器は墓道から出土した。須恵器壺（124）は口縁端部を欠くが、頸部径6.0cm、残存高12.0cmを測る。肩部以下をヘラケズリする。平瓶（125）は口径5.9cm、器高12.2cmである。肩部に吊り手を作らず、粘土の突体を貼り付ける。長頸壺（126）は口径7.8cm、器高25.0cmで、頸部と体部の接続部分に粘土の継ぎ目が見られる。また、短脚部の二方に縦・横1.0cmの透かしを作る。有蓋高杯（122・123）は口径13.0cm、器高16.0～17.0cmを測り、杯部の底部外面をヘラケズリとする。脚部は二段透かしで、上段は幅1.0cm、高さ3.0cm、下段は幅1.0cm、高さ5.0cmの透かしを二方に作る。無蓋高杯（121）は口縁11.8cm、器高13.8cmで、杯部外面に稜をもつ。杯身（120）は口径10.6cm、器高4.0cmで、底部外面をヘラケズリで仕上げる。ＴＫ217型式とみられる。杯蓋（128）は口径11.2cm、器高3.6cmで、外面をヘラケズリで仕上げる。天井部外面に井桁状の線刻を施す。耳環（129・130）は銀環で、ほぼ完形である。形状・出土状況などから対となるものである。

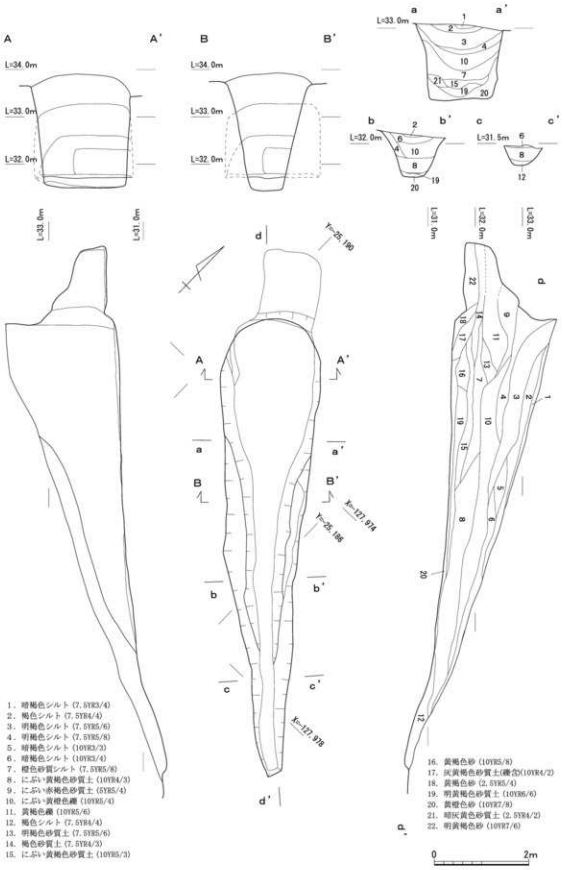
墓道の埋土から出土した須恵器杯身（119）は口径12.2cm、器高3.2cmで、外面をヘラケズリで仕上げる。土師器椀（127）は、口径12.6cm、器高4.6cmで、内面には暗文を施し、外面にはユビオサエの痕が残る。墓道内２か所から出土した破片が接合したものである。飛鳥Ⅱ型式と併行するものと考えられる。

（松元章徳）

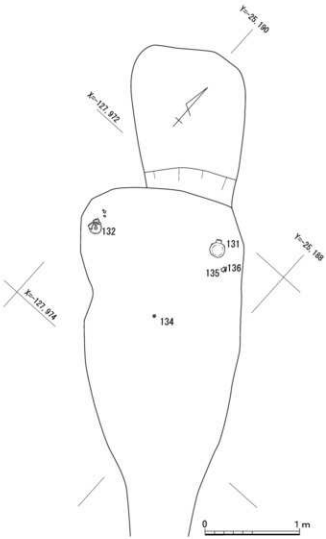
６）６号横穴

①形態と規模

Ｄ支群中で最も小規模な横穴で、５号横穴と形態はやや異なり、墓道の入り口が斜面の高い位



第25図　6号横穴実測図



第26図　6号横穴遺物出土状況図

置にある。玄室は全体が杓文字形を呈し、床面は1面で水平に作る。天井崩落土の堆積状況から羨道を持たないものと判断する。玄門の位置は正確には判断しがたいが、玄室幅が急速に狭くなることと土層断面の観察より、奥壁から3.4m付近と考えたい。玄門部から墓道に至る付近から谷底に向かって床面が徐々に傾斜する。閉塞の状態は不明である。奥壁の北半分に天井高1.2m、奥行1.3mの小横穴を掘削する。床面は玄室床面より0.2m高い。出土遺物はなく、小横穴の性格は不明である。また、天井部は奥壁の小横穴部では残存するものの、その他の箇所では崩落していた。

各部長は次の通りである。全長11.0m、玄室長3.4m、玄室幅は奥壁部が最大で1.9m、玄門幅が0.7m、墓道長7.6m、墓道の最大上幅1.6mである。主軸はN42°Wである。

②土層堆積状況

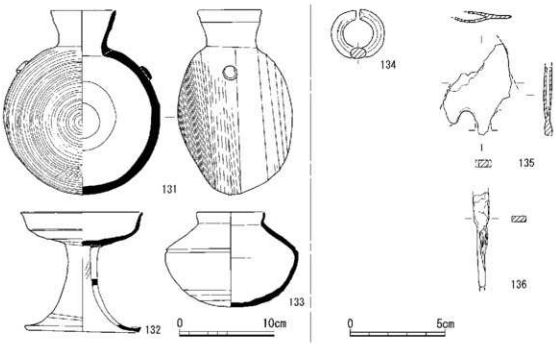
1～6層は天井崩落後の堆積土で、褐色を呈するシルト層である。8・10層も天井崩落後に堆積したと考えられ、橙色を呈する砂質土である。7・9・11・13～16・19層は天井崩落土で、天井部が残存していた玄室奥の小横穴部まで流入したものと考えられる。橙色の砂質土や褐色を呈する礫、砂質土が混じる。12・17・18・20～22層は埋葬直後の堆積土で褐色や橙色の砂質土である。玄室の床面は地山を形成する大阪層群で、この面から遺物が出土している。

③遺物出土状況

遺物は玄室床面と墓道外の谷底側斜面で出土した。玄室床面から出土した遺物は、須恵器提瓶(131)、同無蓋長脚高杯(132)、鉄製品断片(135・136)、耳環(134)である。玄室内左側壁奥から提瓶と鉄鏃が出土した。提瓶(131)は口縁を奥壁方向に向けて横転した状態で出土した。玄室中央の床面から耳環(134)が出土した。片方のみで、対となるものは出土しなかった。玄室右側壁の奥から高杯(132)が正立して出土した。谷側の斜面からは、須恵器有蓋短頸壺(133)が出土した。

④出土遺物

土器は須恵器のみで、土師器はない。提瓶(131)は口径7.0cm、器高20.0で、外面には部分的に



第27図　6号横穴出土遺物実測図

釉が付着し、肩部にボタン状の凸体を付ける。高杯（132）は、口径13cm、器高13cmで、口縁部内側と外面は回転ナデで、底部外面は回転ヘラケズリで仕上げる。脚部は1.0cm四方の透かしを二方に作る。内面・外面ともに回転ナデである。杯部は、崩落した天井の土圧により破損していた。耳環（134）は材質不明である。片方のみで、対となるものは出土しなかった。鉄鏃（135・136）はともに腐蝕が著しいが、同一個体である可能性が高い。

墓道の延長部、谷側の斜面で出土した短頸壺（133）は口径7.0cm、器高10.0cmで、外面下半部はヘラケズリである。

（松元章徳）

7）7号横穴

①形態と規模

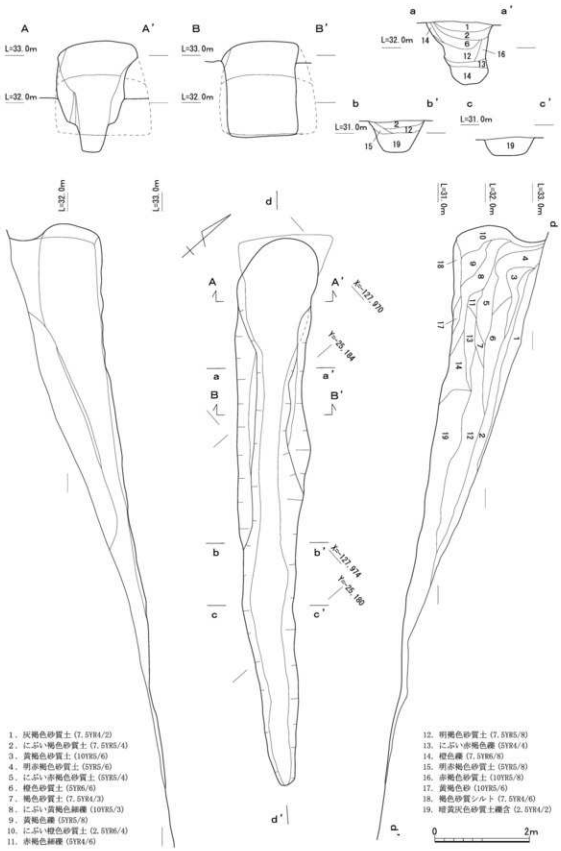
谷の入り口に最も近く、D支群の北東の端に位置する。玄室の平面は撥形を呈する。玄室床面は水平に作る。天井部は奥壁部分でわずかに残るのみで、他の箇所では崩落していた。

玄室の平面形と壁面が湾曲する状況、及び土層断面から、玄門の位置は奥壁から2.5m付近と推定される。閉塞の状態は不明である。羨道はない。墓道の床面は谷底に向かって傾斜し、先端はやや北東に振る。

各部長は次の通りである。全長11.8m、玄室長2.8m、玄室幅は奥壁部が最大で1.9m、玄門幅が0.8m、墓道長9.1m、墓道の最大上幅1.6mである。主軸はN48°Wである。

②土層堆積状況

1・2層は天井崩落後の堆積土で、褐色を呈する砂質土である。3～7・12層は天井及び壁面崩落土の砂質土で、崩落後に土砂の一部が谷側へ流れたものと考えられる。8～10層は奥壁付近



第28図　7号横穴実測図

の天井や壁面の土が崩落し、流入したと考えられる褐色を呈する礫層である。11・13・14・19層は埋葬後に堆積したと考えられる礫層である。

玄室の床面は地山を形成する大阪層群である。この面から遺物が出土している。

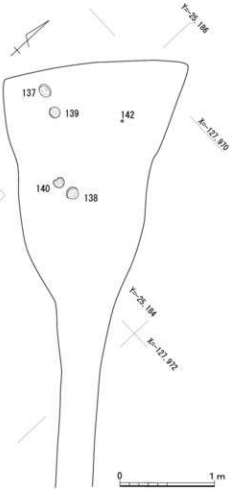
③遺物出土状況

玄室内床面から、須恵器無蓋短脚高杯(137～140)と耳環(142)、玄室内埋土中から鉄製品(143～146)、墓道内の埋土中から須恵器壺(141)が、それぞれ出土した。

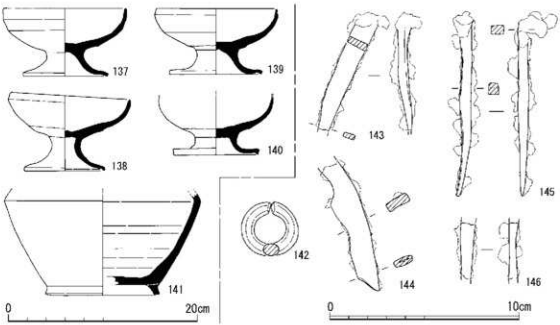
玄室中央より右の奥壁に近い位置から短脚高杯(137・139)が、玄室の床面中央部から短脚高杯(138・140)が、いずれも正立した状態で出土した。耳環(142)は玄室中央よりも左側の奥壁に近い位置から片方のみ出土した。

④出土遺物

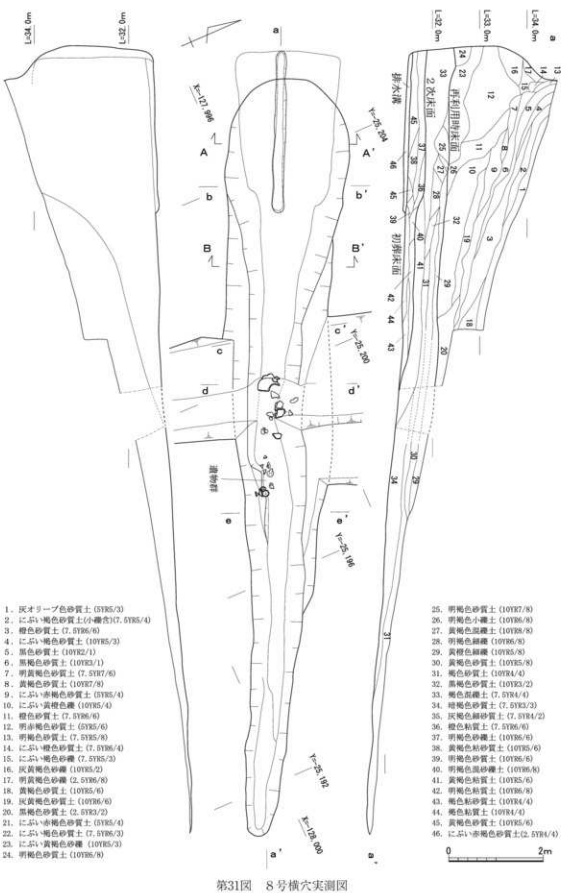
土器は須恵器のみで、土師器は出土していない。短脚高杯(137～140)はいずれもほぼ完形である。口径13.0cm、器高7.0～8.0cmで、焼成は



第29図　7号横穴遺物出土状況図



第30図　7号横穴出土遺物実測図



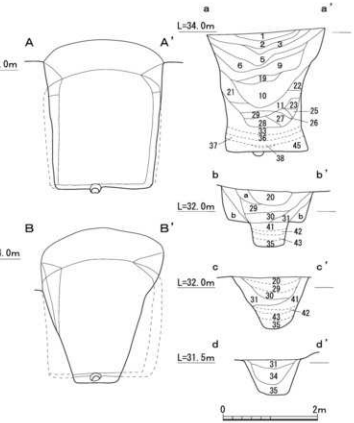
第31図　8号横穴実測図

軟である。短脚高杯(140)は口縁端部が欠損する。口径12.0cm、器高7.0cmで、焼成は軟である。

耳環(142)は金環である。対になるものは出土していない。鉄製品は鉄釘(145)と不明断片(143・144・146)である。

墓道の埋土から出土した須恵器壺(141)は、胴部のみで、肩から上部を欠く。内面・外面ともに回転ナデで仕上げる。高台径11.8cm、残存高10.0cmである。8世紀(Ⅳ型式2～3段階)の様相を呈し、他の出土遺物よりも新しいことから、2次利用の可能性が考えられる。

(松元章徳)



第32図　8号横穴立面図及び土層実測図(土色は第31図に同じ)

8)8号横穴

①形態と規模

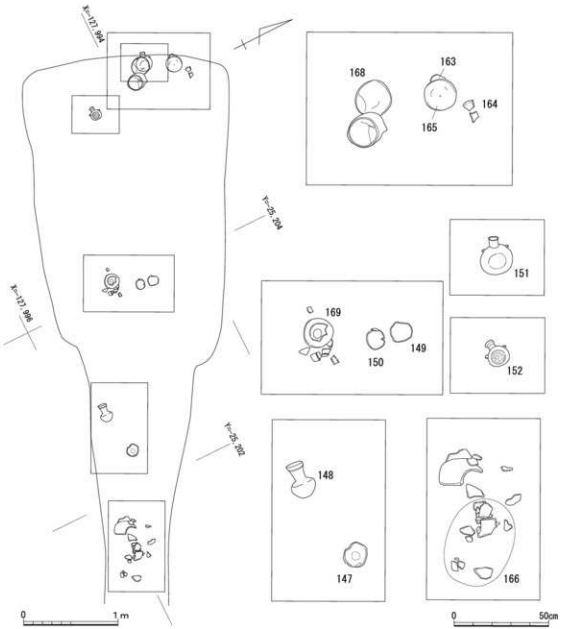
4号横穴の南東側に位置する。D支群の中では、谷の最奥部に位置する。玄室平面形は、長方形を呈する。横穴平面形には、玄室奥壁から3.3mで明瞭にくびれる部分があり、これが玄門と考えられる。また、追葬に伴うと考えられる2次床面がある。初葬時の玄室床面は大阪層群で、ほぼ平坦に仕上げる。初葬時の玄室床面には、奥壁から玄門に向って直線的に延びる幅約20cm、深さ約8cmの排水溝を設ける。この横穴は、D支群では唯一の排水溝を持つ横穴である。2次床面は、低い段状になる。墓道はあまり傾斜を持たない。

この横穴の規模は、全長15.6m、玄室長3.3m、玄室奥壁側幅2.2m、玄室玄門側幅1.6m、玄門幅1.2m、墓道長12.3m、墓道最大上幅2.2mを測る。主軸はN66°Wである。

②土層堆積状況

1～9層・18～20層は、横穴の天井部崩落以後の堆積と考えられる砂質土層である。この横穴は、4号横穴と同様に、9世紀頃に再利用されており、10～17層、23・24層は、再利用以後に堆積した横穴天井部等の崩落土とみられる砂礫や砂質土である。25～34層・41層は、2次床面上に堆積した天井部崩落土および流入土とみられる礫・砂質土層である。36～40層・42～45層は、追葬時の2次床面を構築する際の盛土層で、砂礫や粘質土などである。46層は、排水溝埋土の細砂質土である。

③遺物出土状況

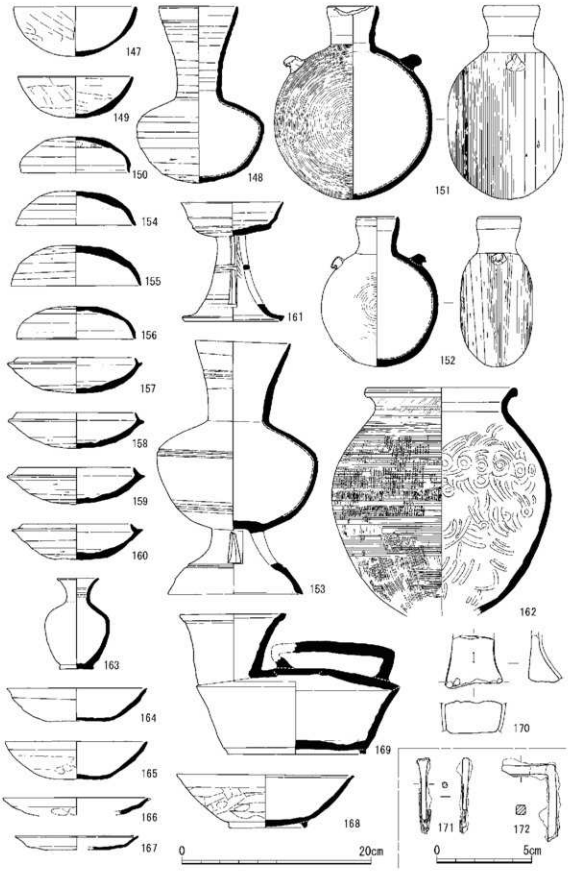


第33図　8号横穴遺物出土状況図

初葬時の玄室からは、顕著な遺物は出土していない。初葬時の遺物としては、玄門外側で、須恵器長頸壺(148)、土師器杯(147)が出土している。玄室の2次床面では、奥壁側から須恵器提瓶(151・152)が、玄門側から須恵器台付長頸壺(153)が出土している。また、不明鉄製品(171・172)も出土している。

墓道からは、須恵器杯蓋(154～156)、須恵器杯身(157～160)、須恵器高杯(161)が、まとまって出土している。このうち、須恵器杯蓋(156)には、初葬時床面の排水溝埋土から出土した須恵器片が接合できた。このことから、墓道出土の須恵器は、初葬時の副葬品と考えられる。追葬にあったって、玄室内から掻き出されたものか。他に、墓道埋土から、須恵器甕(162)が出土している。砥石(170)も墓道埋土から出土している。

玄室奥壁付近の再利用面上からは、須恵器小壺(163)、須恵器平瓶(169)、土師器杯(164・



第34図　８号横穴出土遺物実測図

165・168)、土師器皿(166・167)が出土している。須恵器平瓶(169)は逆転して出土しており、棺などの上に置かれていたものが、腐朽によって転落したものか。

④出土遺物

土師器杯(147)は、丸味を持つ形態で、外面にヘラケズリが残り、内面はナデ調整である。須恵器長頸壺(148)は、扁平気味の体部から外開き気味に長い頸部が立ち上がり、特徴的な形態である。これら２点は、初葬床面から出土した。

土師器杯(149)は、やや浅目の丸味を持つ形態である。須恵器杯蓋(150)は、口縁端部が内湾気味になり、口径が11.4cmと小さ目である。ＴＫ217型式に相当するとみられる。須恵器提瓶(151・152)は、大小の差はあるが、外開き気味に立ち上がる口縁部を持ち、端部は丸く終わる。肩部に形骸化した吊手を持ち、体部全面はカキ目調整、背面はヘラケズリである。須恵器台付長頸壺(153)は、胴部と肩部の境に２条の沈線を持ち、脚部には３方向に透かしを持つ。以上５点は、２次床面出土土器である。

須恵器杯蓋(154～156)は、天井部が丸味を持ち、口径は12.4～13.7cmである。ＴＫ209型式でも新しい様相を示すものとみられる。須恵器杯身(157～160)は、底部が丸味を持つものと、台形状になるものがある。口径は11.4～12.5cmである。杯蓋と同じく、ＴＫ209型式でも新しい様相を示すものとみられる。須恵器高杯(161)は、無蓋高杯で、脚部は２方向の２段透かしである。以上８点は、墓道から出土した。上記のとおり、須恵器杯蓋(156)は、初葬床面の排水溝から出土した破片が接合でき、これらの墓道出土の土器は、初葬時の副葬品と考えられる。

須恵器甕(162)は、体部外面が細かいタタキ後カキ目調整、内面には同心円状のタタキがみられる。墓道埋土から出土した。砥石(170)は各面に使用痕がある。墓道埋土から出土した。

鉄製品(171)は、断面が四角形で木質が残る部分がある。釘の一部か。鉄製品(172)は、「Ｌ」字状の形状で、断面は四角形を呈する。

(引原茂治)

9)土坑

横穴の他に土坑を３基検出した。

ＳＫ６　１号横穴と２号横穴の間で検出した土坑で、長径0.85m、短径0.65m、深さ0.1mである。須恵器杯身・無蓋高杯・壺等が出土した。出土遺物の詳細は昨年度の報告を参照されたい。

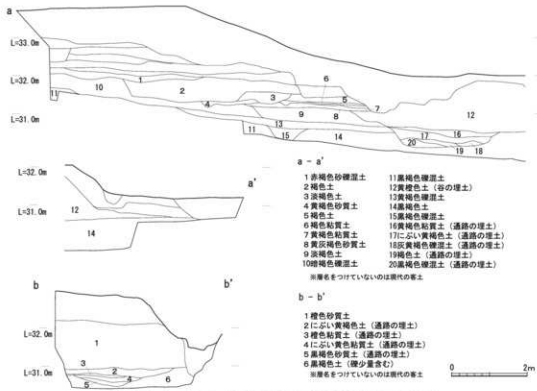
ＳＫ９　７号横穴の北東側で検出した土坑で、幅1.4m、長1.7m、深さ45cmである。遺物の出土はなかった。

ＳＫ10　谷の入り口部で検出した土坑で、幅1.2m、長1.4m、深さ45cmである。遺物は出土しなかった。

(引原茂治)

10)第12次調査(第３・35・36図)

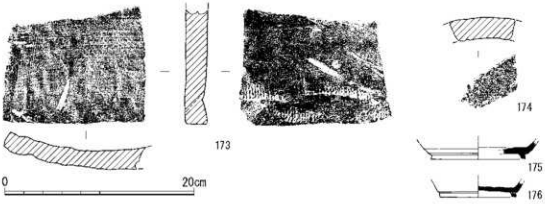
平成21年度の第11次調査の成果により、谷の南東側斜面に横穴が分布することが予想されたため、第11次調査で確認した８基の横穴に対面する斜面に調査区を設定して調査を実施した。



第35図　第12次調査谷中央部断面図（土層位置は第37図参照）

重機により表土を掘削し、その後人力掘削を進めたところ、横穴は確認できなかった。谷の中央部では、第11次調査で確認されていた溝状の落ち込みの続きを確認した。この落ち込みは、幅１～2.5m、深さ30～50cmで、約22mにわたって検出した。埋土は礫を主体とし、西に向かって次第に浅くなる。表土から検出面まで近世以降の流土や現代の客土が堆積していた。埋土は上層が黄褐色系の土で、下層は黒褐色礫層である。第35図17層直下で平安時代の瓦が出土した（第36図173）。この瓦は内面に布目圧痕が認められ、外面はタタキのちケズリである。同様のものが美濃山廃寺で出土している。(注2) 横穴の再利用と同じ時期の遺物であることから、それに伴うものと考えられる。また、谷の埋土からは須恵器杯Bの底部片が出土した（175・176）。

この谷内の溝状の落ち込みは、各横穴の墓道の端部を連ねる位置あることと、少なくとも平安



第36図　第12次調査出土遺物実測図

時代前期には露頭していたこと、それより下には20cm程度の堆積土しかなく、溝の底面が横穴掘削時の地表面と判断されることから、横穴掘削時～再利用時にかけての通路であったと判断される（第37図）。同様の墓地内通路状の遺構は、女谷Ａ～Ｃ支群においても確認されている。

なお、丘陵の尾根筋は、地表下約２ｍまで後世の攪乱がおよんでおり、削平されていた。

（松尾史子）

５．まとめ

今回検出した女谷Ｄ支群には、横穴の規模、副葬品の内容やその多寡などに違いがあり、被葬者の地位などが反映している可能性も考えられる。また、他の支群とはやや離れた場所に営まれていることや、限られた場所に密集して横穴が造られている様子から、家族や一族のような集団によって営まれた墓や、あるいは、一集落の墓地と考えることができよう。

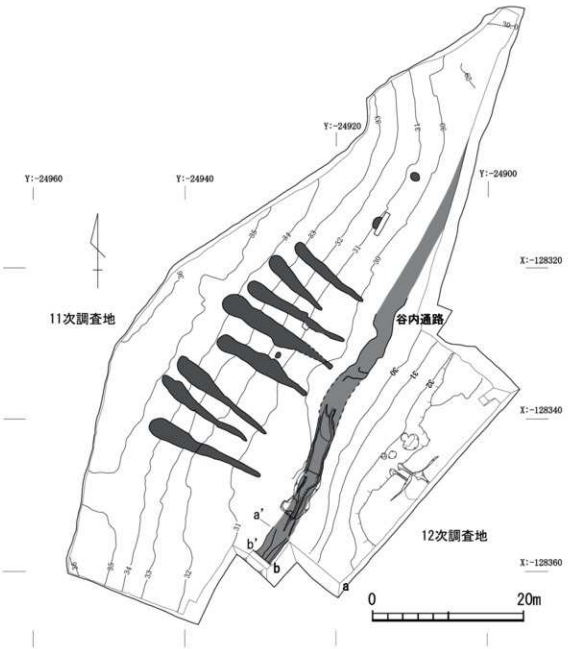
横穴が配置されている間隔から、１・２・５・６・７号横穴の５基と３・４・８号横穴の３基のグループに分かれる可能性がある。これらの横穴では、４号横穴が最も早く６世紀末頃に造られたものとみられ、やや遅れて、その他の横穴が造られたとみられる。時期を知る標識となる蓋杯が出土しない横穴もあるため、詳しい築造順は今後の検討課題であるが、規模の大きいものが先行し、小さいものが新しくなるものとみられる。なお、人骨が残る横穴はなかった。

それぞれの横穴には、須恵器・土師器のほか、耳環や鉄製品などが副葬されている。出土した土器から、このＤ支群はＴＫ209型式期からＴＫ217型式期頃（古墳時代末～飛鳥時代）にかけて築造されたと考えられる。女谷・荒坂横穴群では、これまで荒坂Ａ～Ｃ支群、女谷Ａ～Ｃ支群の調査を行っている。最も早く築造が開始されたのは荒坂Ｂ支群で、ＴＫ43型式併行期と考えられる。ＴＫ209型式併行期には、その他の支群でも横穴の築造がはじまり、ＴＫ217型式併行期まで使用される。女谷Ｄ支群は、女谷・荒坂横穴群の築造の最盛期に営まれた支群と考えられる。

４号横穴と８号横穴では、ある程度内部が埋まった段階で、墓として再利用された状況を確認した。須恵器や土師器が出土し、それらの土器から９世紀頃に再利用されたものとみられる。特に４号横穴では、土器のほかに、瑞雲双鸞八花鏡という銅鏡が副葬されていた。この鏡は、唐鏡を原型として日本で作られた踏み返し鏡とみられる。鏡背を上にした状態で出土しており、下に

付表　女谷Ｄ支群横穴一覧

横穴番号	全長	玄室長	玄室最大幅	墓道長	玄室の形状	築造時期	追葬・再利用の有無	備　考
1	17.2	3.5	2.5	13.7	羽子板形	TK209 ～ TK217	追葬・再利用無し	
2	13.8	2.1	2	11.7	羽子板形	TK209 ～ TK217	追葬有り	
3	15.3	3.6	2.2	11.7	撥形	TK209		
4	15.7	3.5	2	12.2	羽子板形	TK209	再利用有り	鏡出土
5	15.2	3.6	2.5	11.6	杓文字形	TK217	追葬・再利用無し	
6	11	3.4	1.9	7.6	杓文字形	TK217	追葬・再利用無し	
7	11.8	2.8	1.9	8.3	撥形	TK217	追葬・再利用無し	
8	15.6	3.3	2.2	12.3	長方形	TK209	追葬・再利用有り	



第37図　女谷D支群(第11・12次調査)と谷内通路

なっていた鏡面には紙の痕跡が残る。紙に包んで副葬されたものと考えられる。同様の鏡が、奈良県霊安寺跡から出土している。今回出土した鏡と比較すると、大きさや文様の状態が非常に類似しており、同じ鏡を原型として作られた可能性もある。今回出土した鏡は、湯廻りが悪かったのか、周縁部の花形や雲形の文様が半周分鋳出されていないが、当時の貴重品と考えられる。

なお、ほとんどの横穴が、谷底付近から墓道を掘削しており、谷底を通路として使用していたものと考えられる。谷底部は、雨水などの水流によるものか、浅く窪む。埋土から布目瓦片が出土しており、あるいは再利用された時期の通路であった可能性も考えられる。

京都府下では、丹後地域の峰山町・大宮町付近や丹波地域の綾部市や京丹波町、南山城地域の八幡市・京田辺市付近に横穴が分布している。こういった点で、横穴式石室墳がほぼ一様に分布

するのに比べると、横穴は特殊な墓制と言えよう。

丹後地域の横穴は、7世紀から築造が始まり、一部では、8世紀前半まで築造が続く。横穴の築造が開始される時期は、他地域と比べて、やや遅れる。横穴の築造は、丹後地域の中央部付近に集中している。京丹後市大宮町の大田鼻横穴では、「厨」「厨物」などの墨書土器が出土している。地方官人が被葬者であったとも考えられる。この横穴群が位置する丘陵の上部には古墳群が存在するが、古墳群の築造は6世紀前半に終っており、横穴築造開始までには若干の時間差がある。したがって、古墳の築造者と横穴の築造者には関連がない可能性も考えられる。なお、これらの横穴の中には、平安時代に再利用されたものもある。

丹波地域は、京都府内の他地域に較べると、その数ははるかに少なく、むしろ、横穴が築造されなかった地域とした方が適切であるかもしれない。栗ヶ丘古墳群内では、3基の横穴が確認されている。古墳が分布する丘陵の斜面部に位置し、6世紀末頃から7世紀初めにかけて築造されたと考えられる。横穴は追葬を前提とする墓制であるが、栗ヶ丘横穴群ではどの横穴も追葬の形跡がみられない。一方、古墳群においては、6世紀後半から末頃にかけて、家族墓的な一墳複数主体部の古墳から一墳一主体部の家父長のみを埋葬したと考えられる古墳に移り変わる。それに続いて造営されたと考えられる横穴でも、単葬が引き継がれており、古墳の築造者と横穴の築造者は同系統とみられる。丹波での横穴の築造は、短期間で終了する。

南山城地域の横穴は、木津川流域に分布しており、特に、八幡市、京田辺市付近の丘陵地に集中する。女谷D支群がある女谷・荒坂横穴群では、これまで、52基の横穴を調査している。今回、さらに8基の横穴を調査した。調査された横穴だけでも60基を数え、府下でも最大級の横穴群と言える。この横穴群の築造は6世紀後期に始っており、他地域よりも早い。その後、7世紀中葉頃まで築造、使用が続く。付近には、古墳時代後期の古墳はほとんど分布していない。大規模な横穴群であるにもかかわらず、横穴築造の契機は不明である。

八幡市の南に隣接する京田辺市には、「大住」という地名が残り、律令期以前から大住隼人が居住しており、宮殿の警護役や舞人として宮廷に仕えたと言われる。隼人の出身地である南九州地域には横穴が多く分布することから、南山城の横穴も隼人の墓とする説もある。ただ、南九州地域の特徴的な横穴である「地下式横穴墓」は、今回の調査でも確認できず、これまでの南山城地域の調査でも確認されていない。地名や伝説から、付近に隼人が多く居住していた可能性は考えられるが、今の時点で、考古学的に、横穴と隼人を確実に結び付けるには至っていない。

（引原茂治）

注1　岩松保ほか『京都府遺跡調査報告書　女谷・荒坂横穴群』第34冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　2004

注2　松尾史子・村田和弘「女谷・荒坂横穴群第10・11次発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第137冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2010

注3　八幡市教育委員会大洞真白氏のご教示による。

図　　版

(1) 調査前全景(南西から)

(2) 調査地全景(北東から)

(3) 調査地全景(南西から)

(1) １トレンチ全景(南西から)

(2) １トレンチ土層断面(北西から)

(3) ８トレンチ全景(北東から)

(1) ８トレンチ土層断面(北西から)

(2) ２トレンチ全景(南西から)

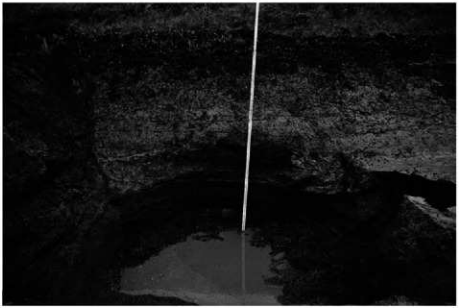
(3) ２トレンチ土層断面(北西から)

(1) ９トレンチ全景(南西から)

(2) ９トレンチ土層断面(北西から)

(3) ３トレンチ作業風景(北東から)

(1) ３トレンチ全景(南西から)



(2) ３トレンチ土層断面(北西から)

(3) 10トレンチ全景(南西から)

(1)10トレンチ土層断面(北西から)

(2) 4 トレンチ全景(南西から)

(3) 4 トレンチ土層断面(北西から)

(1) ５トレンチ作業風景(南から)

(2) ５トレンチ全景(北から)

(3) ５トレンチ土層断面(北西から)

(1) ６トレンチ上層全景(南西から)

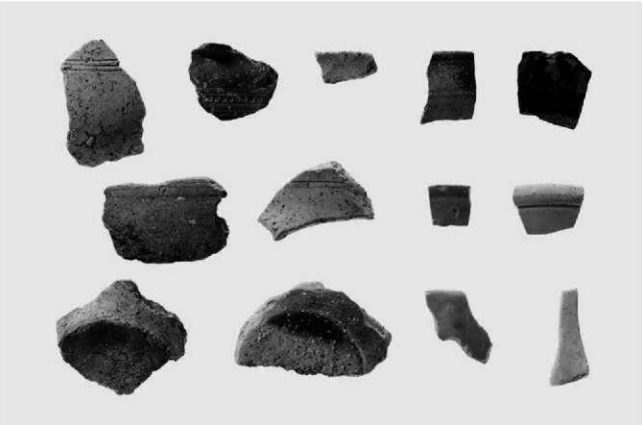
(2) ６トレンチ全景(南西から)

(3) ６トレンチ土層断面(北西から)

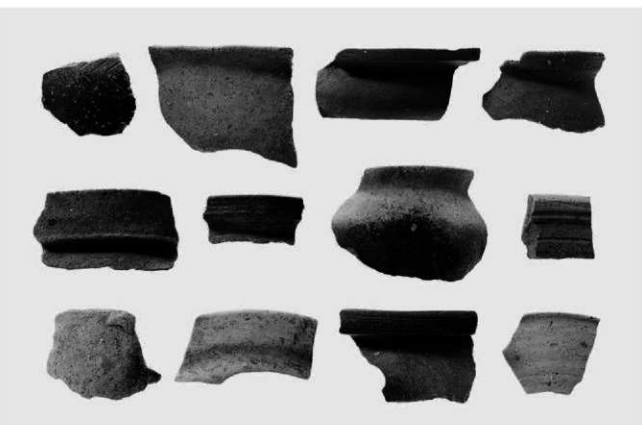
(1) ７トレンチ重機掘削(北から)

(2) ７トレンチ作業風景(北東から)

(3) ７トレンチ土層断面(南東から)



(1) 出土遺物１



(2) 出土遺物２

(1)調査前全景(南東から)

(2)平成21年度１トレンチ
市電軌道検出状況(南から)

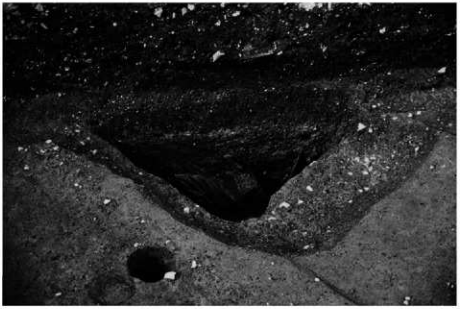
(3)１トレンチ全景(南西から)

(1)平成21年度１トレンチ全景
（北東から）

(2)１トレンチ北東壁断面
（南西から）

(3)１トレンチ北西壁断面部分
（南東から）

(1) １トレンチ柱穴ＳＰ52
遺物出土状況(北西から)



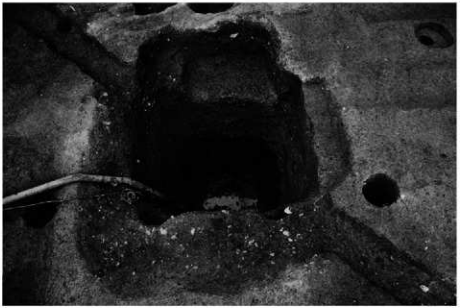
(2) １トレンチ井戸跡ＳＥ42
検出状況　(南東から)

(3) ２トレンチ全景(北東から)

(1) １トレンチ全景(南西から)

(2) １トレンチ全景(南から)

(1) １トレンチ井戸跡ＳＥ42井戸枠
検出状況（南から）



(2) １トレンチ井戸跡ＳＥ42
完掘状況（東から）

(3) １トレンチ井戸跡ＳＥ147
完掘状況（南西から）

(1) ３トレンチ全景(南東から)

(2) ４トレンチ全景(北西から)

(1) ３トレンチ溝ＳＤ140断面
（北西から）

(2) ４トレンチ北西壁断面（東から）

(3) ４トレンチ井戸跡ＳＥ63
（南東から）

137

24

34

38

43

40

119

46

51

53

130

59

60

出土遺物１

15

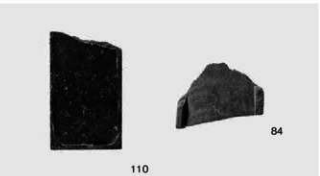
77

81

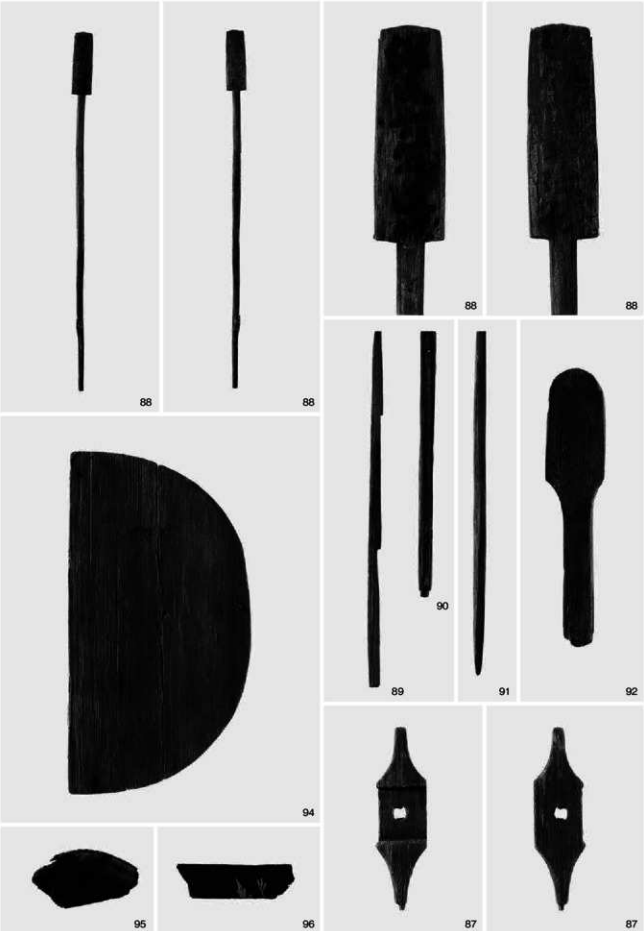
67

78

83


84
110

出土遺物２



出土遺物3

(1) 1トレンチ遺構検出作業風景
（南東から）

(2) 1トレンチ完掘状況（北から）

(3) 1トレンチ溝ＳＤ101
完掘状況（北から）

(1) 1トレンチ溝ＳＤ101
遺物出土状況(北から)

(2) 1トレンチ溝ＳＤ107
検出状況(北西から)

(3) 1トレンチ遺構掘削作業風景
(北西から)

(1) 1トレンチ溝SD107
検出状況(西から)

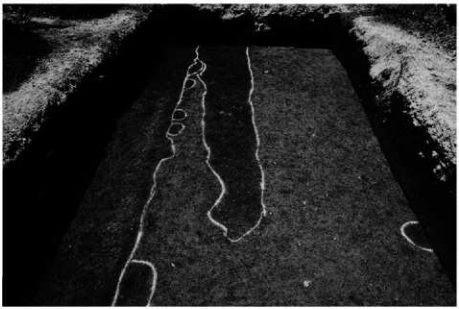
(2) 1トレンチ溝SD107
完掘状況(西から)

(3) 1トレンチ溝SD107
土層断面(西から)

(1) 1トレンチ溝ＳＤ107
遺物検出状況(東から)

(2) 2トレンチ遺構検出状況
(南から)

(3) 2トレンチ遺構完掘状況
(南から)



(1) 3 トレンチ遺構検出状況
（東から）

(2) 3 トレンチ遺構完掘状況
（東から）

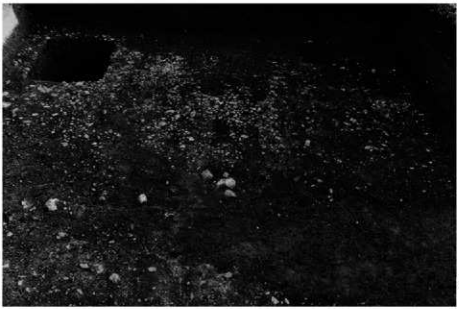
(3) 調査地近景（北から）

出土遺物

(1) 調査地全景(南から)

(2) 調査区南部全景
＜上層＞（北から）

(3) 調査区中央遺構検出状況
＜上層＞（東から）

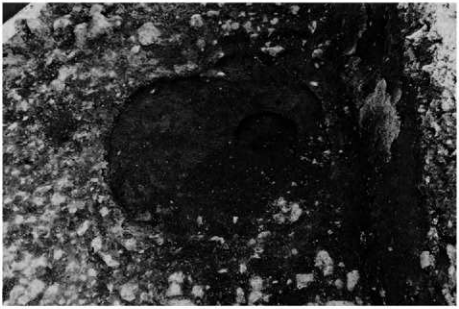


(1) 砂礫集積ＳＸ５検出状況
＜整地面＞（北から）

(2) 砂礫集積ＳＸ５瓦出土状況
（上が南）

(3) 落ち込みＳＸ４検出状況
（北東から）

(1)土坑ＳＫ６検出状況(南東から)



(2)土坑ＳＫ７検出状況(南から)

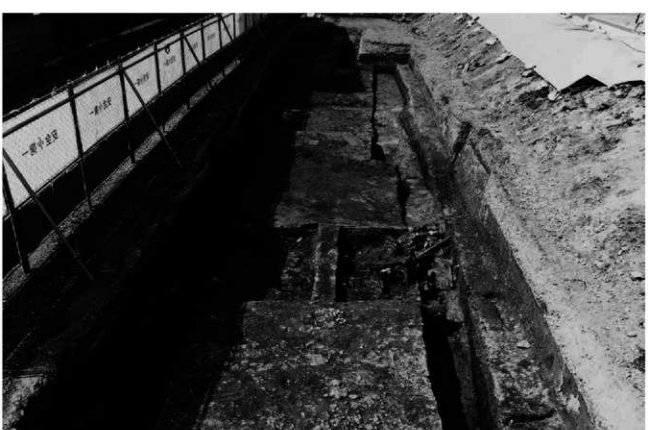
(3)溝ＳＤ１検出状況(東から)

(1) 調査区南部遺構検出状況
＜上層＞（南から）

(2) 溝ＳＤ３検出状況（東から）

(3) 溝ＳＤ３土層断面（東から）

(1) 調査区全景＜上層＞（北から）



(2) 調査区全景＜上層＞（南から）

(1)溝ＳＤ３全景(東から)

(2)溝ＳＤ３・木組遺構ＳＸ14検出状況＜上層＞（南東から）

(1) 木組遺構ＳＸ14検出状況
（南東から）

(2) 木組遺構ＳＸ14検出状況
（南から）

(3) 木組遺構ＳＸ14・南壁土層断面
（南東から）

(1) 調査区西壁中央土層断面
＜上層＞（西から）

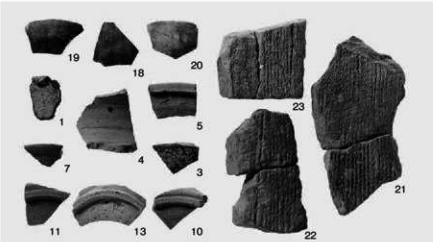
(2) 調査区西壁南部土層断面
＜断ち割り部は下層＞（西から）

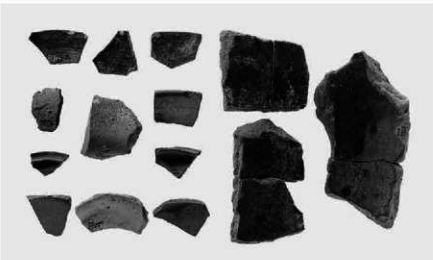
(3) 調査区西壁北部土層断面
（西から）

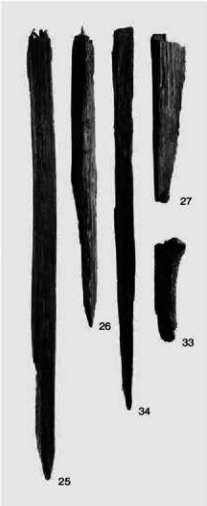
(1) 下層遺構検出状況（北から）

(2) 流路ＳＤ10全景（東から）

(3) 流路ＳＤ10土層断面＜西壁＞
（東から）







出土遺物

京都第二外環状道路関係遺跡　図版第１

西代遺跡

(1)西代地区１トレンチ(北東から)

(2)西代地区２トレンチ(東から)

(3)西代地区３トレンチ(東から)

京都第二外環状道路関係遺跡　図版第２

西代遺跡

(1)西代地区４トレンチ(東から)

(2)西代地区５トレンチ(東から)

(3)西代地区６トレンチ(東から)

西代遺跡

(1)西代地区７トレンチ(南から)

(2)西代地区８トレンチ(東から)

(3)西代地区９トレンチ(北東から)

京都第二外環状道路関係遺跡　図版第４

奥海印寺遺跡、下海印寺遺跡

(1)新郷地区全景(西から)

(2)新郷地区トレンチ(北西から)

(3)駿河田地区トレンチ(東から)

京都第二外環状道路関係遺跡　図版第５

長岡京跡右京第 973 次・下海印寺遺跡

(1)尾流地区調査前の状況
（北西から）

(2)尾流地区上層遺構全景
（北東から）

(3)尾流地区竪穴式住居跡ＳＨ05
（北東から）

(1)尾流地区竪穴式住居跡ＳＨ140
（北東から）

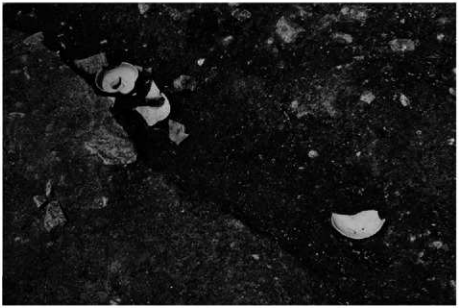
(2)尾流地区掘立柱建物跡ＳＢ184
（南西から）

(3)尾流地区土坑ＳＫ14（南から）

京都第二外環状道路関係遺跡　図版第７

長岡京跡右京第 973 次・下海印寺遺跡

(1) 尾流地区溝ＳＤ130全景
（南東から）

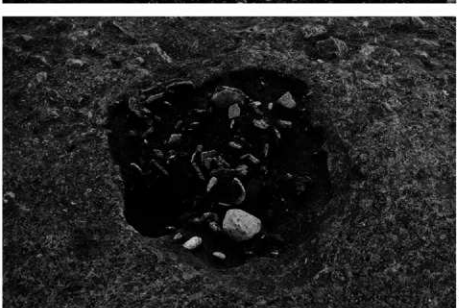


(2) 尾流地区溝ＳＤ130
遺物出土状況（南から）

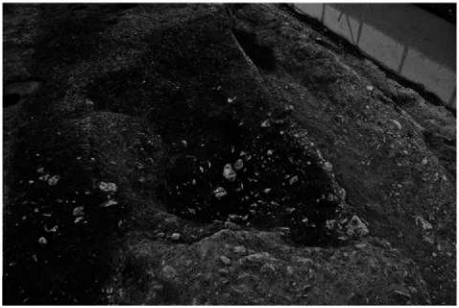
(3) 尾流地区下層遺構全景
（北東から）

(1)尾流地区下層遺構全景東側部分
（南東から）

(2)尾流地区下層遺構全景西側部分
（南東から）

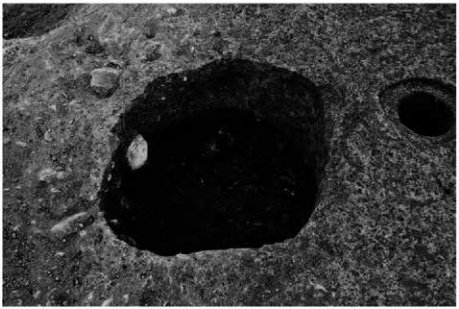


(3)尾流地区土坑ＳＫ193
遺物出土状況（北西から）



(1) 尾流地区土坑ＳＫ193完掘状況
（東から）

(2) 尾流地区土坑ＳＫ194
遺物出土状況（北西から）

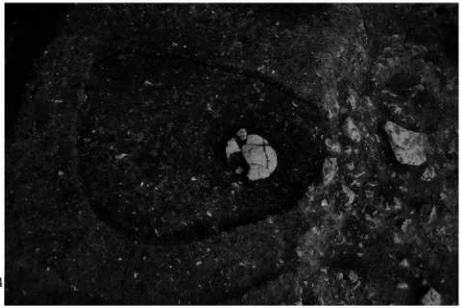


(3) 尾流地区土坑ＳＫ194完掘状況
（東から）

(1) 方丸地区調査前全景(南東から)

(2) 方丸地区Ａトレンチ全景
(南東から)

(3) 方丸地区Ａトレンチ溝ＳＤ01
遺物出土状況(北から)



(1) 方丸地区Ａトレンチ土坑ＳＫ04
遺物出土状況（北西から）

(2) 方丸地区Ａトレンチ土坑ＳＫ04
完掘状況（北西から）

(3) 方丸地区Ｂトレンチ全景
（北西から）

(1) 方丸地区ＢトレンチＳＤ01断面
（北西から）

(2) 方丸地区Ｃトレンチ全景
（西から）

(3) 方丸地区ＣトレンチＳＫ02全景
（南から）

1

4

14

27

16

18

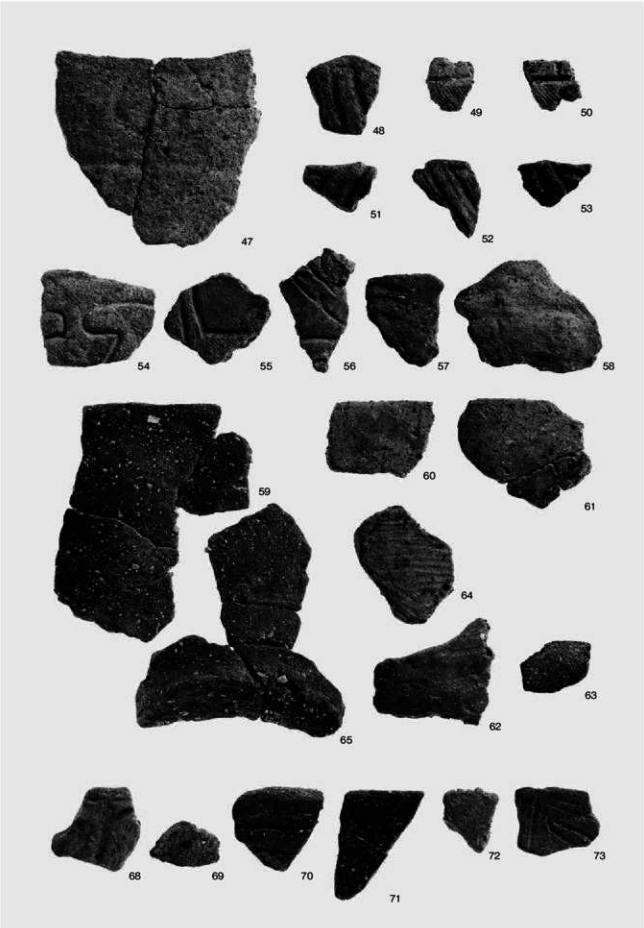
19

20

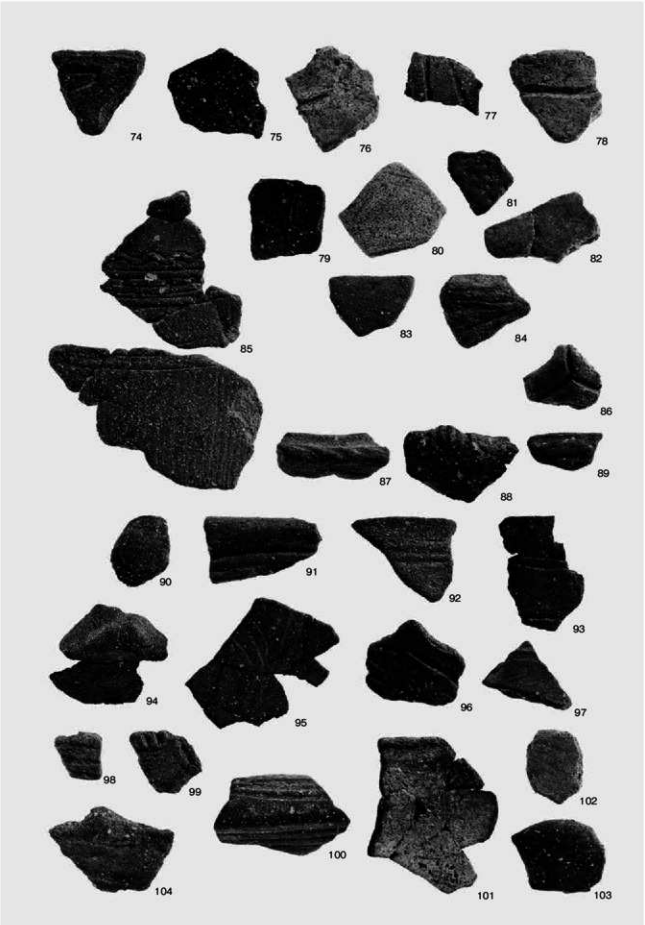
21

32

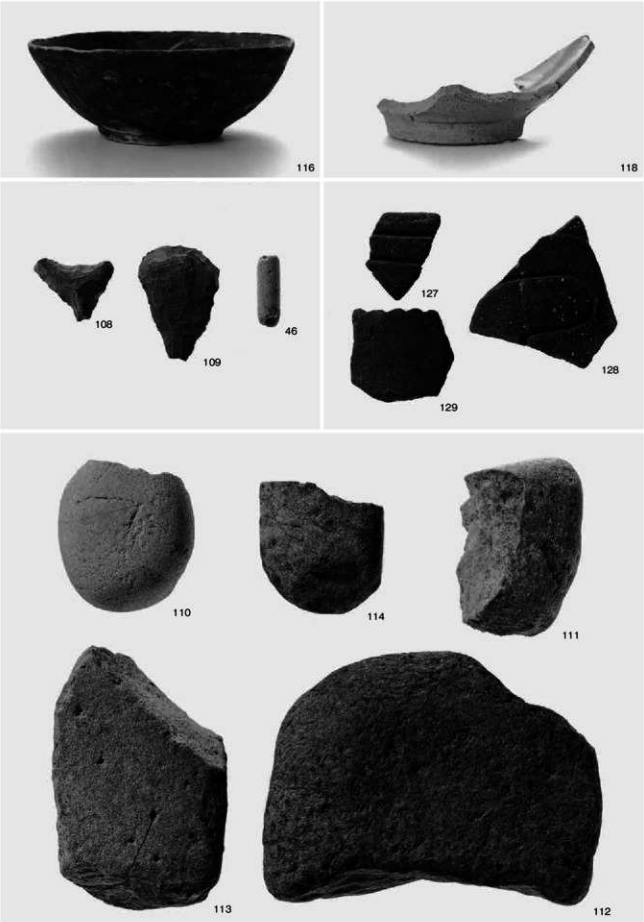
出土遺物 1


47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
68
69
70
71
72
73

出土遺物 2


74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104

出土遺物 3



出土遺物 4

(1) 女谷D支群全景(南東から)

(2) 女谷D支群全景(空撮：上が北西)

(1) 女谷D支群全景(東から)

(2) 女谷D支群全景(南から)

(1) 女谷D支群遠景(北東から)

(2) 女谷D支群遠景(南西から)

(1) 5～7号横穴検出状況(東から)

(2) 5～7号横穴検出状況(南東から)

(1) 1 号横穴遺物出土状況
（南東から）

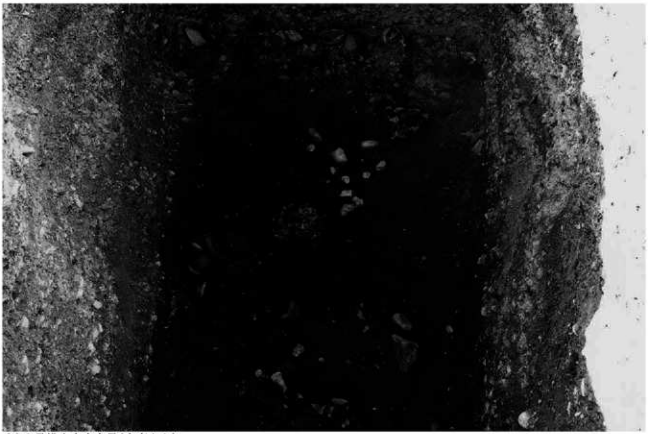
(2) 1 号横穴遺物出土状況側面
（南東から）

(3) 2 号横穴遺物出土状況
（南東から）

(1) 3 号横穴玄室断面(北東から)

(2) 3 号横穴玄室奥壁付近
遺物出土状況(南東から)

(3) 3 号横穴玄室中央部
遺物出土状況(南東から)



(1) 3 号横穴玄室全景(南東から)

(2) 4 号横穴玄室全景(南東から)

(1) 4 号横穴再利用面鋤出土状況(南から)

(2) 4 号横穴再利用面と玄室床面(南東から)

(1) 4 号横穴再利用面と玄室床面
（南から）

(2) 4 号横穴再利用面と玄室床面
（北西から）

(3) 4 号横穴瓦出土状況（北東から）

(1) 5号横穴玄室追葬面(南東から)

(2) 5号横穴玄室初葬面(南東から)

(1) 5号横穴玄室遺物出土状況
（北東から）

(2) 5号横穴玄室遺物出土状況
（南東から）

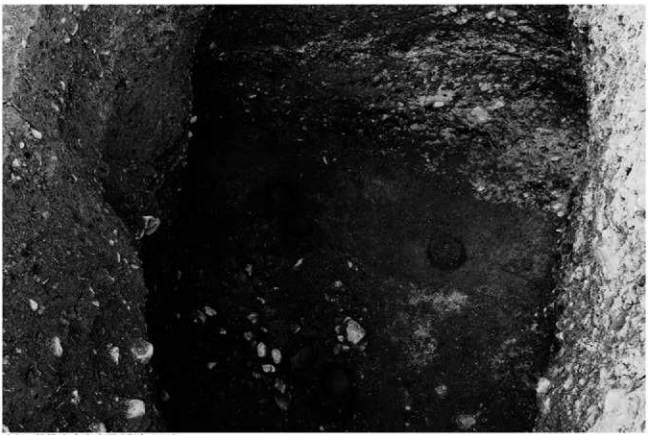
(3) 5号横穴墓道遺物出土状況
（北東から）

(1) 6号横穴玄室断面(東から)

(2) 6号横穴玄室遺物出土状況
(東から)

(3) 6号横穴埋土断面(北西から)

(1) 6号横穴玄室全景(南東から)



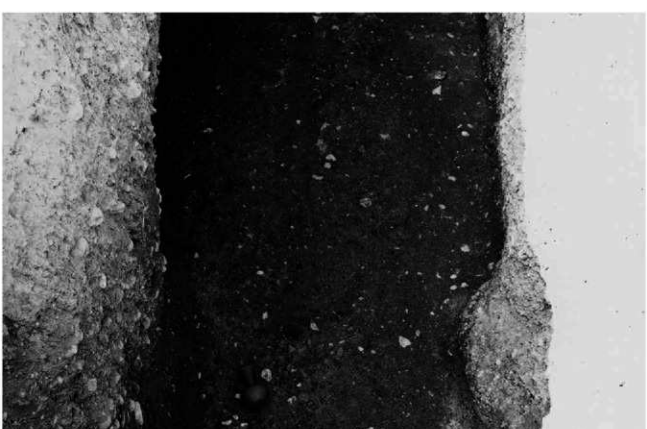
(2) 7号横穴玄室全景(南東から)

(1) 7号横穴玄室断面(北東から)

(2) 8号横穴再利用面遺物出土状況
(南から)

(3) 8号横穴墓道遺物出土状況
(南西から)

(1) 8号横穴玄室追葬面(南東から)



(2) 8号横穴玄室初葬面(南東から)

(1) 8号横穴初葬面全景(東から)

(2) 土坑ＳＫ９(南東から)

(3) 谷底部瓦出土状況(北西から)

(1) 1号横穴全景(南東から)

(2) 2号横穴全景(南東から)

(3) 3号横穴全景(南東から)

(4) 4号横穴全景(南東から)

(1) 5号横穴全景(南東から)

(2) 6号横穴全景(南東から)

(3) 7号横穴全景(南東から)

(4) 8号横穴全景(南東から)

(1) 第12次調査全景(表土掘削後：南西から)

(2) 第12次調査全景(完掘後：南西から)

(1) 谷の中央部(奥が谷の入り口：南西から)

(2) 谷の断面(北東から)

3

2

4

11

12

10

5

7

出土遺物 1（1 号横穴：土器）

出土遺物２（１・２号横穴：土器）

40

39

41

43

42

44

45

52

51

50

53

出土遺物３（３号横穴：土器）

46

47

49

48

60

57

出土遺物 4（3 号横穴：土器）

82

85

81

84

83

86

88

87

90

89

93

91

出土遺物５（４号横穴：土器）

94

95

96

92

103

97

104

105

出土遺物 6（4 号横穴：土器）

120

121

126

127

119

123

122

125

出土遺物７（５号横穴：土器）

124

128

132

131

133

137

139

138

140

出土遺物 8（5～7 号横穴：土器）

155

150

158

157

160

149

147

161

153

170

出土遺物９（８号横穴：土器・石製品）

151

148

152

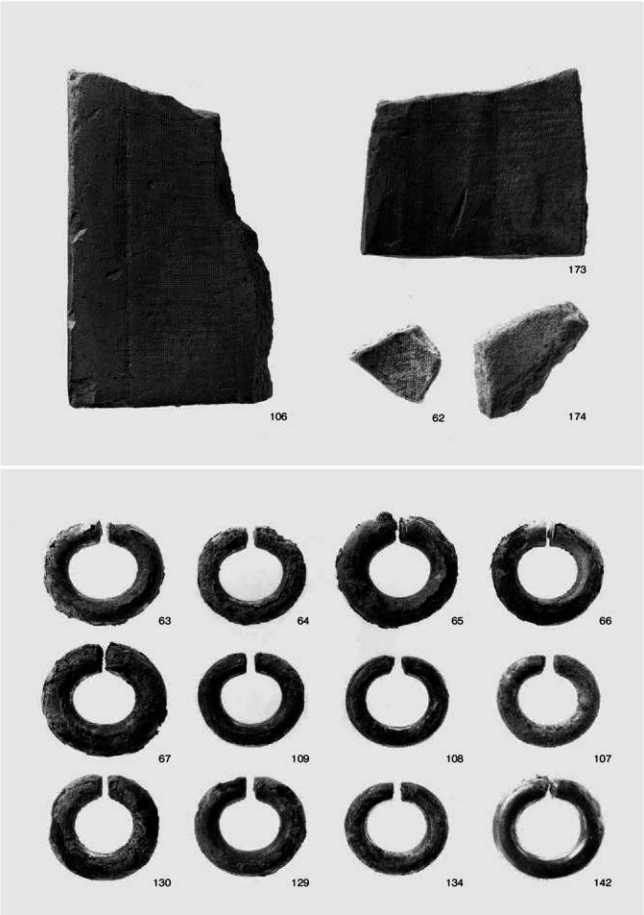
168

165

163

169

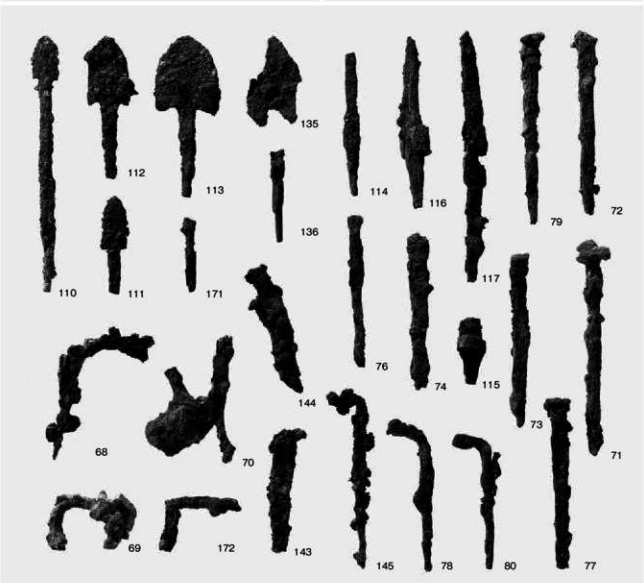
出土遺物10(８号横穴：土器)



出土遺物11(瓦・耳環)

118

118


135
112
113
114
116
72
79
136
110
111
171
117
76
74
115
144
73
68
70
71
69
172
143
145
78
80
77

出土遺物12（鏡・鉄製品）

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第142冊
編著者名	
編集機関	（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　Tel. 075（933）3877
発行年月日	西暦2011年3月25日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
とっとりばしいせきだいいちじ 鳥取橋遺跡第1次	きょうたんごしやさかちょうわだのくるまだ、いべもりやまほか 京丹後市弥栄町和田野車田、井辺森山ほか	26212	4501	35° 40′ 37″	135° 05′ 20″	20100512 ～ 20100706	850	道路建設
へいあんきょうあとさきょうよんじょういちぼうろくちょう・じゅういっちょう、みぶおおじ 平安京跡左京四条一坊六・十一町、壬生大路	きょうとしなかぎょうくみぶぼうじょうまちょんじゅうはちばんちじゅうろく 京都市中京区壬生坊城町48番地16	26104	2001	35° 00′ 20″	135° 44′ 46″	20091130 ～ 20091218 20100419 ～ 20100624	150 350	庁舎建設
ながおかきょうあとうきょうだいきゅうひゃくきゅうじゅうごじ・かいでんいせき・かいでんこふんぐん 長岡京跡右京第995次・開田遺跡・開田古墳群	ながおかきょうしかいでんにちょうめ 長岡京市開田2丁目	26209	63・80・107	34° 55′ 32″	135° 41′ 53″	20100426 ～ 20100602	146	道路建設
ながおかきょうあとうきょうだいきゅうひゃくきゅうじゅうろくじ・かみさといせき 長岡京跡右京第996次・上里遺跡	ながおかきょうしいのうちかみいんでんちない 長岡京市井ノ内上印田地内	26209	7・107	34° 56′ 35″	135° 41′ 30″	20100426 ～ 20100605	125	道路建設
きょうとだいにそとかんじょうどうろかんけいいせきにしんだいいせき 京都第二外環状道路関係遺跡西代遺跡	ながおかきょうしおくかいいんじにしんだいちない 長岡京市奥海印寺西代地内	26209		34° 55′ 23″	135° 40′ 15″	20091005 ～ 20091023	370	道路建設

きょうとだいにそとかんじょうどうろかんけいいせきおくかいいんじいせき 京都第二外環状道路関係遺跡 奥海印寺遺跡	ながおかきょうしおくかいいんじあらごうちない 長岡京市奥海印寺新郷地内	26209	68	34°55′14″	135°40′33″	20090603 ～ 20090619	150	道路建設
きょうとだいにそとかんじょうどうろかんけいいせきしもかいいんじいせき 京都第二外環状道路関係遺跡 下海印寺遺跡	ながおかきょうしおくかいいんじするがでんちない 長岡京市奥海印寺駿河田地内	26209	95	34°55′12″	135°40′40″	20090818 ～ 20090824	30	道路建設
きょうとだいにそとかんじょうどうろかんけいいせきながおかきょうあとうきょうだいきゅうひゃくななじゅうさんじ・しもかいいんじいせき 京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第973次・下海印寺遺跡	ながおかきょうししもかいいんじおりゅうちない 長岡京市下海印寺尾流地内・方丸地内	26209	95・107	34°55′06″	135°40′50″	20090602 ～ 20091013 20090608 ～ 20091013	1,000 540	道路建設
おんなだに・あらさかおうけつぐんだいじゅういち・じゅうにじ 女谷・荒坂横穴群第11・12次	やわたしみのやまあらさかろくじゅうごーに 八幡市美濃山荒坂65－2	26210	31	34°50′45″	135°43′28″	20090709 ～ 20100225 20100513 ～ 20100611	2,000 400	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥取橋遺跡第1次	集落跡 生産跡	弥生～中世 近世～現代	川跡(河川内堆積土) 耕作溝	弥生土器・土師器・須恵器・磁器・陶器・瓦質土器・土錘・砥石	
平安京跡左京四条一坊六町・十一町・壬生大路	都城 集落 集落	平安 中世 近世	井戸・柱穴 溝・土坑 井戸	土師器・須恵器・瓦器・常滑甕・東播系甕・中国製青磁壺・緑釉・白磁・瓦・木製品(題籤軸・著・曲げ物) 土師器・瓦器 陶磁器	題籤軸両面に墨書、『保延六年(1140)返抄』。壬生大路側溝・路面は確認できず
長岡京跡右京第995次・開田遺跡・開田古墳群	古墳 都城 集落	古墳 長岡京 近世	周溝 土坑 土坑・溝	土師器・須恵器 土師器・須恵器 陶器・土製人形・瓦・寛永通宝・雁首	

長岡京跡右京第996次・上里遺跡	集落跡 集落跡 集落跡 集落跡 集落跡・都城 集落跡	縄文 弥生 古墳 奈良 奈良～平安 中世	（流路内包含） （流路内包含） （流路内包含） 溝 土坑・整地面 流路	縄文土器 弥生土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器・木器・杭 土師器・須恵器 土師器・瓦器	
京都第二外環状道路関係遺跡西代遺跡	集落跡	奈良～近世	柱穴	須恵器・土師器・瓦器・陶磁器	
京都第二外環状道路関係遺跡奥海印寺遺跡	集落跡	近世	流路	染付	
京都第二外環状道路関係遺跡下海印寺遺跡	集落跡		なし	なし	
京都第二外環状道路関係遺跡長岡京跡右京第973次・下海印寺遺跡	集落跡 集落跡 集落跡 集落跡	縄文 弥生 古墳 中世	土坑・柱穴 竪穴式住居跡 竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土坑 溝	縄文土器・石錐・敲石類・台石・石皿 弥生土器 土師器・須恵器・石錐・滑石製管玉 土師器・瓦器・陶磁器	
女谷・荒坂横穴群第11・12次	横穴	古墳～飛鳥・平安	横穴・通路	土師器・須恵器・鉄鏃・刀子・馬具・鉄釘・耳環・鏡・瓦	平安時代に横穴を再利用

所収遺跡名	要　　約
鳥取橋遺跡第１次	鳥取橋遺跡におけるはじめての調査で、現地表下1.5～1.8mまでは耕作に伴う堆積層で、その下位には竹野川の河川堆積層が認められ、顕著な遺構を確認することはできなかった。各トレンチでは弥生時代前期から中世末の遺物が多数出土しており、調査地点の周辺に遺構の広がりが予想される
平安京跡左京四条一坊六町・十一町・壬生大路	市電車庫や京都市交通局の建物跡によって攪乱を受けていたが、平安時代後期～鎌倉時代後期の溝・井戸跡・土坑などを検出した。また、壬生大路の路面や側溝は確認できなかった。調査地近辺には、平安時代後期の白川法皇の近臣であった内蔵頭藤原国明の邸宅があったとされており、邸宅周辺で大火が発生したことが記録されている。今回の調査で中国製陶磁器の出土や火を受けた多数の甕類が出土したことは、藤原国明の邸宅との関係が注目される。また、廻籤軸『保延六年返抄』などの出土も、当該地の歴史的背景を考える上で重要である
長岡京跡右京第995次・開田遺跡・開田古墳群	古墳時代中期の２条の溝を検出し、一辺約12mの方墳が復原できた。調査地周辺では開田古墳群の存在が知られており、そのなかの１基と捉えることができ、開田古墳群東羅支群11号墳と命名された。周辺に同時期の古墳が存在する可能性が高い
長岡京跡右京第996次・上里遺跡	奈良時代と推定される溝や平安時代～鎌倉時代の土坑・流路、砂礫が集積した整地面などを確認した。周辺には、天皇家供御の菜園である「乙訓園」があり、今回検出した溝もそれに関連する可能性がある
京都第二外環状道路関係遺跡西代遺跡	古代から近世の土器類が出土したが、農地造成のため遺構面は大きく削平を受けていた。丘陵斜面の盛り土中からも遺物が出土するので、本来は丘陵部分から緩斜面部まで、遺構が存在していたと想定できる
京都第二外環状道路関係遺跡奥海印寺遺跡	耕作関連の土層のすぐ下に河川氾濫による堆積土があり、良好な遺構面を検出できなかった

京都第二外環状道路関係遺跡 下海印寺遺跡	調査により、包含層や遺構面は確認できなかった。小泉川とその支流に囲まれていることから、川の氾濫のため安定した遺構面が形成されなかったと推測される
京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第973次・下海印寺遺跡	調査により、縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代、中世の溝・遺物を確認した。縄文時代後期の遺構は、縄文時代の下海印寺集落の広がりを知る上で重要な知見となった。また、中世の溝は、下海印寺集落を巡るものと思われる。確実に長岡京に属する遺構は確認できなかったが、奈良時代頃の遺物を含む溝を検出しており、周辺に長岡京期の遺構が存在する可能性がある
女谷・荒坂横穴群第11・12次	南山城地域の横穴は、八幡市・京田辺市付近の丘陵地に集している。今回、女谷D支群として８基の横穴を調査し、過去に調査された横穴と合わせると60基を数え、府下でも最大級の横穴群と言える。この横穴群の築造の開始時期は６世紀後半であり、他地域よりもやや早く造墓が始まり、その後、７世紀中葉頃まで築造・使用されている

京都府遺跡調査報告集 第142冊

平成23年3月25日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141